

これに反して易行道たる淨土教が世人に尊信せられて居るのを見て、大にこれを遺憾とし、その鋒を主として法然の選擇集に向けたものである。つまり法華經も眞宗も前に述べた様に、實行的易行道たる關係上、相類似せる一向宗を主として排撃せることは自然の勢已むを得ないことである。日蓮は法然の淨土宗が道俗男女の多數の信仰を得て居るのを慨し、かくの如く我國に種々の災厄の降下するは、この邪教の廣布せるが爲であると信じ、この選擇集がかく廣く信ぜられて居る限り、我が國には各種の災害が降下して、國家の安泰を望むことは不可能である。我が國家を守護し、これを安泰ならしめんが爲には、宜しく法然の選擇集を排斥して、法華經を主持すべきことを論じたものである。日蓮が立正安國論に筆を染めたのは、後深草天皇の正嘉元年から始めて、龜山天皇の文應元年に書き畢つたものである。正嘉元年は鎌倉には大震災があつて、山は崩れ、地は裂け、水涌き出で、大火災が起つたことがあつた。この前五月十八日も鎌倉に地震があつた。これを動機として、日蓮がこの安國論を草したのであつた。そして其の前年即正元元年には守護國家論が出来上つて居る。内容は異つて居るけれども、同一趣旨の下に書かれて居る書物である。日蓮は經論の中からこの二書中に種々現世的實行的な意見を述べて居る。

日蓮はその宗門の求むる淨土は、この現實世界にあることを説きて次の如く言つて居る。

この文の如くば、本地久世の圓佛はこの世界に在せり。この土を捨て、何の土を願ふべきや。

故に法華修業の者の所住の處を淨土と思ふべし。何ぞ煩はしく他の處を求めてんやと言つて、此の世界を淨土と見て居るが、次に日蓮はこの日本を法華經流布の地と定めて、次の如く言つて居る。

日本國は殊に法華經の流布すべき處なり。

問うて曰く、その證如何

答へて云はく、肇公の法華の翻經の後記にいはいはく

羅什三藏、奉值須利耶蘇摩三藏、授法華經時、語曰、佛日西山隱、遺燿照東北。茲典有緣於東北諸國。汝慎傳弘。

東北とは日本なり。西南の天竺より東北の日本を指すなり。故に慧心の一乘要譯にいはいはく、日本一州圓機純一。朝野遠近同歸二乘。緇素貴賤悉期成佛。

願はくは、日本國の今世の道俗、選擇集の久習を捨て、法華涅槃の現文に依り、肇公慧心の日本記を待みて、法華修業の安心を企てよ。

かくて日蓮は、その立正安國論に於て、「旅客來り嘆じて曰はく、近年より、近日に至るまで、天變地妖し、飢饉疾癘遍く天下に滿ち、廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充ち、死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざる族一人も無し。」と云ふに筆を起し、さて斯くの如き悲境に沈淪するのは「世

皆正に背き、人悉く惡に歸す。故に善神國を捨て、相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て魔來り、鬼來り、災起り、難起る」とて、金光明經大集經仁王經等を引用して、その然るべき所以を明かにし、特に仁王經の七難説を擧示して居る。仁王經の七難とは、初の二難は天文上の異變にて、日月度を失ひ、時節返逆することなどであり、次の四難は火災水災、風難旱難で、これ等の災禍の爲に、國土山河も荒廢し、人畜死亡相次ぐ所以を説き、最後の第七難は四方の賊來りて國を侵し、内外の賊亦起るを云ふのである。かくて日蓮は六難は既に起つて居るが、第七の難もやがて起つて來べきことを感じて居たようである。勿論日蓮のこの書を造つた文應までは、蒙古襲來のことについては、表面上何等の事實は現はれて居ないのであるが、或は何等かの噂はあつたかも知れない。それとも唯これらの經文に暗示を受けて、何等かの外國の襲來あるべきを豫感したのであつたであらう。現に立正安國論の終りに附記した言葉の中に

いぬる正嘉元年大歲丁巳八月三日戊亥の尅の大地震を見てこれを勘ふ。その後、文應元年大歲庚申七月十六日を以て、宿谷禪門に付きて、最明寺入道に獻じ奉れり。その後、文永元年大歲甲子七月五日大明星の時いよくこの災の根源を知る。文應元年大歲庚申より、文永五年大歲戊辰後正月十八日に至るまで九個年を経て、西方大蒙國より、我が朝を襲ふべきの由、牒狀これを渡す。又同六年重ねて、牒狀これを渡す。すでに勘文これに叶ふ。これに準して、これを

思ふに、未來亦しかるべきか。この書は徵ある文なり。これ偏に日蓮の力にあらずして、法華經の眞文、聖の感應する所か。

とあつて、彼は何等知る所がなかつたように記してゐる。

さて斯くの如く、國內に種々の災禍の起るその最大の源因を法然の選擇集にありとし、

法然の選擇に依りて、即ち教主を忘れて、西土の佛馱を貴び、付屬を抛ちて、東方の如來を闕き、唯四卷三部の佛典を専らし、空しく一代五時の妙典を抛つ。是を以て、彌陀の堂に非らざれば、皆供佛の志を止め、念佛の者に非ざれば、早く施僧の懷を忘る。故に堂塔零落して、瓦松の煙老い、僧房荒廢して、庭草の露深し。

と慨嘆し、

汝早く、信仰の心を改めて、速に實乗の一善に歸せよ。然らば則、三界は皆佛國なり。佛國それ衰へんや。十方は悉く寶の土なり。寶土何ぞ壞れんや。國に衰微無く。土に破壊無くんば、身は是安全にして、心は是禪定ならん。此の言信ず可く崇む可し。

と言ふので結んで居る。

以上を以つて見れば、日蓮は法華經を阿彌陀佛と同じく信仰の對象として、専らこれを信じて南無妙法蓮華經の七字を唱へさへすれば、淨土往生すべく、しかもその淨土は現世日本國なれば、我が

國の災難を除き、外敵蒙古の來襲を防ぐことが出來ると云つて居るのである。即何處までも現世的實行的である。

次に儒教に於ける實行的傾向を觀察したいと思ふ。元來儒教は佛教のように、理論的思索的なものでなく、實行を主とした教訓であつて學と云ふ程のもので無いのは、言ふまでもない所であるが、動もすれば外面を飾る道具に供せられて、兎角空言に終る傾向が最も強いものである。支那人は此の傾が殊に強い。そこになると日本人は餘程眞面目である。正直である。書物のまゝに實行せんとする。教へられたまゝを行はんとする。諺にも「論語讀みの論語知らず」と云ふのがあつて、實行力の無いものを譏つた言葉である。此の點については、友人原田實氏が昨昭和九年の夏期講習會に於て發表せられた講演、「日本教育に於ける實踐性と包容性」と題する論文の筆記の前半は、實に我が國民性のこの傾向を表明せるものである。原田氏は日本教育が實踐性と包容性を有つて居ると論ぜられて居るが、それは勿論、日本國民性がこの兩性質を多分に包含して居るからのことであると解すべきである。さて原田氏が日本教育に於けるこの實踐性を證明せんと試られて居るのは、私の全然同意する所であるから、私は自分の考によりて論述するよりも、むしろ氏の講演筆記そのまゝを拜借して、こゝに引用し、然る後自分の意見を少し附け加へたいと思ふ。これ蓋し原田氏の所説を尊重する所以であると信ずるからである。

應神天皇の十五年に、百濟からその使臣阿直岐と云ふものが來朝した。阿直岐の使命は貢を奉るにあつたやうであるが、天皇には阿直岐の偶々具備せる學識を看取せられて、皇太子菟道稚郎子をこれに就いて學ばしめられ、更に阿直岐に問うて、特に使臣を百濟におくり、博士王仁を招聘して、皇太子の師たらしめられたのであるが、これは實に全然教育の目的のみを以て外人を招聘したのであつて、實に日本の教育史上に劃期的の出來事であつた。而かもその結果は端的に奏功した。

「十五年甲辰秋八月壬戌の朔、丁卯、六日、百濟王、阿直岐を遣はして、良馬二匹を貢る。即ち之を輕坂の上の厩に養ふ。因りて阿直岐を以て掌り飼はしむ。故れ其の馬を養ひし處を號けて既坂と曰ふ。阿直岐亦能く經典を讀めり。即ち太子菟道稚郎子師としたまふ。是に天皇、阿直岐に問ひて曰く、如し汝に勝れる博士ありや。對へて曰く、王仁といふものあり、是れ秀れたり。即ち上毛野君の祖荒田別、巫別を百濟に遣はして、仍りて王仁を徵さしむ。其の阿直岐は阿直岐史の始祖なり。」

十六年乙巳春二月、王仁來けり。即ち太子菟道稚郎子之を師として、諸の典籍を王仁に習ひ、通達らざるところなし。故れ所謂王仁は是れ書首の始祖なり。」

なほ古事記によれば、王仁はその來朝に當つて、論語十卷、千字文一卷、併せて十一卷持參したと

いふことで、王仁の教育が儒教の精神に基づく教育であつたらうことは、想察出来るのであるが、皇太子菟道稚郎子はやがて、父應神天の崩御に遭ふや、直ちに王仁から受けた教育を實踐して、兄の王子大鷦鷯尊と皇位繼承に關する譲り合ひをするのである。大鷦鷯尊は皇太子の兄であつたが、その仲は極めて親しく、恐らくはこの尊も直接王仁から教育的感化を受けたのであらうと想像されるが、よしさうでないにしても、弟の王子を通じて、間接に儒教的教育に惠浴してゐたであらうことが、十分に想像されるのである。そこで皇位の譲り合ひが實現されたと見ざるを得ないのである。

「四十一年春二月、譽田天皇應神天皇のこと崩す。時に太子菟道稚郎子、位を大鷦鷯尊に譲りまして帝位即しめさす。仍りて大鷦鷯尊に諮さく、夫れ天下に君として萬民を治むるは、蓋ふこと天の如く、容るゝこと地の如く、上に驕べる心ありて、以て百姓を使はしむれば、百姓傾然で、天下安らかなり。今我は弟なり。且文献足らず。何ぞ敢て嗣の位を繼ぎて天業に登らんや。大王は風姿岐嶷にして仁孝遠く聆え、以齒且た長けたまへり。天下の君と爲すに足れり。夫れ先帝、我を立てゝ太子と爲したまひしことは、豈に能き才有らんとならんや。唯愛みしなり。亦た宗廟社稷に奉ずるは、重事なり。僕不佞にして、以稱に足らず。夫れ昆は上にして、季は下に、聖は君にして、愚は臣なること、古今の常典なり。願くは王、疑ひたまはに相讓る。」(日本書紀)

ず、帝位即しめせ。我は臣として助けまつらくのみと。大鷦鷯尊對へて言く、先皇の謂ひし如く、皇位は一日も空しかるべからず、故れ預じめ明德を選びて、王を立てゝ貳とし、祚へたまふに嗣を以てし、授けたまふに民を以てせり。其の寵の章を崇めて國に聞え令む。我れ不賢と雖も、豈先帝の命を棄てゝ、輒く弟の王の願ひに従はんやと、固く辭みて承けず。かたみに相讓る。」(日本書紀)

かくて互に推し讓つて、王位が三年間空しかつたといふのであるが、これは實に儒教道德の模範的例話である所の、伯夷叔齊の互讓の、端的なる實踐に外ならないのである。

「伯夷叔齊は孤竹君の二子也。父叔齊を立てんと欲す。父卒するに及び、叔齊、伯夷に讓る。伯夷曰く、父の命也と。遂に逃れ去る。叔齊亦た立つを肯ぜずして逃る。」(史記伯夷列傳第一。)

應神の二皇子は史記を讀んだ譯ではないが、この話は儒教道中最も尊貴さるゝ逸話の一つで、王仁がこれを皇太子に話さない筈はなく、現に論語にも、伯夷叔齊は何人ぞや、曰く、賢人なりとあつて、王子達がこの話を承知して居たことは想像に餘りある。而かも二王子が皇位の推讓に當つて用ひられた言葉の中には、支那の言葉そのまゝのところ、少くないのである。

また大鷦鷯尊は後に皇位に即かれて仁徳天皇になられるのであるが、仁徳天皇の名高い炊煙

の御仁政も、蓋し儒教的教育の實踐に外ならない。賦役を免する三年の後に、天皇が高殿に昇られて、盛んなる炊煙を打ち眺められながら、后に仰せらるゝ、「夫れ天の君を立つる是れ百姓の爲めなり。然らば君は百姓を以て本と爲す」(日本書紀)と云ふ有名のお言葉の前段は實にそのまゝ、荀子の中に見らるゝ語句である。

更にまた、大化の改新は、實に中大兄皇子と藤原鎌足との尊王愛國の至情に發出したのであるけれども、これまた儒教的教育から生れた實踐にほかならないと言つてよかつた。皇子と鎌足とは、隋唐に三十二年も留學して歸朝した新知識であるところの、南淵の請安の門に通學する途次において、入鹿誅謀をめぐらしたのであつた。

「俱に手に黃卷を把りて、自ら周孔の教を南淵先生の所に學ぶ。遂に路上往還の間において、肩を並べて、潜かに圖り、相協はずといふことなし。」(日本書紀)

これらの諸例は、半ば傳説的であるとは言へ、却つて寧ろ、日本教育の姿を象徴するものであつて、私達はそこに日本教育の特徴として、理論を理論として玩味するといふよりは、それをば寧ろ超克して、端的に實踐に移るところの特色ある教育現象を看取せねばならないのである。

以上原田氏の所論は、氏が書紀の語をそのまゝ、稚郎子命や、仁徳天皇の御言葉であると取つたと以外に於ては、全然同感である。實に我が日本の國民性の最も特異な點は、その尊信する所の言

は、直ちにこれを實踐すると云ふ點にあるのである。

大化の改新は我國に於ては、非常な事件である。就中班田法の實施は著しい難事業であることは想像に餘りあることであるが、しかもこの難事業を、何等の躊躇もなく、又何等の故障もなく、實行せられた所を見ると、我が國民が如何に實行に果敢であるか、推知せられるのである。我々はこゝに大化の改新や、班田法のことについて、詳論せんとするものではないが、當時の國狀は決して安易なものではなかつた様である。内に蘇我入鹿父子の專横と、これに關聯した皇位繼承の紛争が相次いで起つて居るし、地方には豪族兼併の弊や、民間の惡風汚俗も著しかつた。亦外國との關係も中々容易ならぬ狀態で、遂にはかの白村江の海戰に於て、唐の水軍の爲に撃破せられた事實などがあつて、事は中々面倒であつた。こんな中に於て、一つはかくの如き弊風を打破すべき必要に迫られて居たであらうが、彼の皇極天皇の三年、蝦夷と入鹿とが、誅に伏するや否や、その翌年、孝徳天皇の大化元年には既に改新の政に着手し、戸籍を作り、田畑を校べ、兵器を收納し、官吏の汚濁を警戒し、沙門の惡行を監視するなど、をささ改新の準備に怠りなかつた。超えて翌大化二年の正月には、賀正の禮畢るや、直に改新の詔を宣へて、大英斷を宣布したのである。其の第一と云ふのが、かの貴族の土地收用法で、恰も廢藩置縣の如きものである。即ち「罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣、連伴、造國、造村、首所有部曲之民、處々田莊、仍賜食封大夫以上各有差。降以布帛、賜官人百姓有

差。これはかの廢藩置縣と同じく随分困難な事業に相違なかつたが、こゝに至つてこれを斷行したのであつた。蓋し經濟組織の變更は生活の變化を來たし、各家各個人に取りては、非常に重要な事件であるので、容易に行はるべきものではない。強いてこれを行はんとすれば、必騒亂を起すに至るのであるが、我が國に於ては、この大化の班田法の實行と云ひ、又明治維新の廢藩置縣と云ひ、共に著しい紛擾なくして行はれたと云ふのは、一は皇室の威令がよく行き届いて居るからであるが、又他の大きな一大原因は、上下各々その實施の重要なことを看取し、これが實行を已むを得ざるものと觀念し、むしろ自ら進んでこれを援助せんとする位のもので、容易にかくの如き難事業が遂行せられるのである。かの廢藩置縣の如き、薩長土肥の四雄藩が進んで藩籍奉還の英斷に出たので、この困難な仕事が比較的容易に實施せられたのである。それは諸侯及士大夫が、明治維新の政を行ふには立憲政治によらなければならぬと云ふことを、歐米政治の實際から考へて、これを覺知した結果、その必要を看取したことによるものであるが、この大化の改新に於ても、當さにこれと同じく、隋唐に遣はされた學生達や使臣達が、歸朝後、盛に在來の習俗を改善するには、儒教の教へによりて、仁政を行ふべきこと、それには豪族兼併の弊を打破することの必要を力説したものであらう。そして中大兄皇子や中臣鎌子連がその中心となつて、第一線に立つて専らその實行を劃策せられたのであらう。當時の經濟組織の不合理なことは、改新の政を宣示せられる前年、即ち

日本書記大化元年の項には次の記事がある。

遣使者於諸國、錄民元數、仍詔曰、自古以降、每天皇時、置標代民、垂名於後、其臣連等、伴造國造、各置己民、委情驅使。又割取國縣山海、林野池田、以爲己財、爭戰不已。或者兼併數萬頃田、或者全無畝針少地、及進調賦時、其臣連伴造等、先自收歛、然後分進。脩治宮殿、築造園陵、各率己民、隨事而作。易曰、損上益下、節以制度、不傷財害民。方今百姓猶乏。而有勢者、分割水陸、以爲私地、實與百姓、牟索其價、從今以後、不得賣地。勿妄作主兼併、劣弱百姓大喜。

如何に當時の經濟組織の不合理であつたかを知るに足りよう。此の時に當りて遣唐使節、留學生等、即今の西洋歸りの新知識等が連りに儒教の仁道や、周時代の井田法などを説き、前に引用せられた易經の損上益下の教を宣べたので、當時の有勢者も、この狀勢を看取して、班田法の已むべからざることを覺り、これが實施を當然であるとして、これに服したものであらう。大化の改新の條項、その數多しと雖も、要は國民の不均分を正して、全體の發達を期するにあつたのであるし、又それがよく實行せられたのは、實に我が國民の實行性に富んだことを證明するのである。而して明治維新に於てもその趣旨は正に同様である。たゞこの原動力となりたるものは、大化に於ては、儒教とこの儒教文化を實現した隋唐の現實世界を見たものが、我國をも此處まで發達させたいと云ふ希望であつたが、明治維新は歐米の政治法律の學と、その實際文化の現状とを見て、我國をもこゝに到

達せしめたいと云ふ希望がその原動力となつたことの相違のみである。

以上私は大化改新に關して、我等の祖先が儒教の教義を實際化して行動の上に實現したことを述べると共に、明治維新に於ては、我等の先輩がまた、歐米の政治法制的學理をも、實行に移すに至つた事をも示唆したのであつたが、我々の現實的實行主義は、單に政治法制的範圍に止まつたものではない。道德の方面に於ても亦儒教道德を十分に取り入れて、これを實行に移したのであつたことは前既に論じた通りである。かの武士道の如きも、儒教に大きな影響を受けて居ることは勿論であるが、又儒教を實行に移したものと云ふべきである。彼の辜鴻銘氏は、儒教の理想たる君子道が日本に於て武士道となつたと言つて居るが、武士道は一の教義ではなく、實行である。すべて我國に入り來つたものは、我國人はこれを實行に移すことを努める。その外のものには、措いて取らない。これが實に我が國民の一大特徴と言ふべきである。

かくの如く我が國民が、すべてを直に實現せんとする特異な性格は、我が國の進運に生々發展の機會を與へて居る。生々發展は進んで息まないものである。進んで息まない所には所謂革命なるものは無い。革命は主權者並にこれに従ふ爲政者が、頑冥固陋で、世の進運に伴はず、自ら權にして自己の利益をのみ固守せんとする所にのみ勃發する所の社會現象である。そこには賢明がない。勇氣がない。然るに實行的な國民は、主權者並にこれに従ふ爲政者も被治者も皆等しく明智を有

し、明かに社會の進運を視て、これに處する方法を會得して、これを實行するを以て、氣運は常に疏通して凝滯する所が無い。かくの如き所には革命が起るべき餘地を發見することが出来ない。これは我國の一系列の主權者であらせられる歴代の天皇が賢明に涉らせられ、現神と尊信せられ給ふ程の明智をお備へ遊ばされ、一般の支配階級にあるものが、亦これに従つて賢明で、國民一般も亦同様賢明な性質を有するのみでなく、勇氣に富み活力を有して、よく困難を凌いで大業を成就することが出来る性質を有して居る。上下三千載の間革命なるものなく、一たび凝滯する所あるも、適當の機會が來れば、程よくこれを切り開いて疎通せしめて行く。これ我國には革命なるものゝ勃發しない理由である。今後と雖も我國には絶対に革命は無いと斷言するに憚らないのである。

かくの如く我國國民の特質の一は何處までも實行的な所にあるのであるが、これには前に述べたように明智と勇氣とを必要とする。我が國民の賢明なことは、屢々記述した筈であるから今は述べないが、しかし我が國民の有する明知と云ふのは事實を事實として正視し、これに對して適當の處置を講ずることの出来る賢明さであつて、所謂賢明と云ふ言葉が最も當てはまつて居ると思ふ。實行的の人には必この賢明さが無くてはならないのである。しかしながらこれと共に深奥な哲理や深刻な想像は出て來ない。我が國民には釋迦は生れない。孔子も、プラトーンも、アリストートルも、乃至はカントも、ヘーゲルも、トルストイも生れなかつた。これは確かに現實を重んじ、實行を主

とする我が國民の一大缺點には相違ない。識者が日本人は模倣的な國民だと云ふことも或る意味に於ては諾げける所もある。それは我が國民には創造的な所が無いと云ふ意味に於ては、我々はこれに反對する。何となれば我が國特有な文化を有するものが、何で創造性を有しないと云ふ理由があるであらうか。その國特有な文化を有するものは、その國民の特有する創造性によりて創始した文化でなくてはならないからなんだ。しかし我が國民には深い廣大な想像や、深刻な冥想がないと云ふ意味で、創造性が缺けて居ると云ふ意味ならば、自分はこれを承認したいと思ふ。現實を見、現實を重んずる國民は、空理や空想に耽る思索的、瞑想的な傾向を寧ろ排斥する。何處までも現實を正視し、現實に處せんとするからである。偉大な實業家は幾らもあるが、偉大な空想家思索家は生れなかつた。すべて物には一長一短があるものである。長所は即短所である。その短所を強いて無くせんと努むる時は却つてその長所をも失ふものである。實際採長補短など云ふことは出来るものでは無い。これを一つの警告として言ひ、或は自ら警める言葉とするならば善いが、實際それを徹底的にやつて行くことは出来ることでもなければ、又望ましいことでも無い。我々は實行を貴び、現實を重んずると云ふ非常に重要な特徴を有して居ることで満足しなくてはならない。否、むしろ、これをその誇とすべきである。これによりて自ら良くし、世界を利すべきである。親鸞は地獄極樂を説かぬではなかつたが、それは彼れには問題ではなかつた。彼れには法

悦が主たるものであつた。孟子は禪讓放伐を説明した。しかし我々は唯忠孝を取つてこれを行つた。それでよいのだ。これだけを見る賢明さは我々には十分に持ち合はせがある。そしてこれを實行するだけの力と勇氣とも十分に持合はせて居る。日本に來れば何事も皆簡明直截になつて來る。實行は皆さうであるからなんだ。

實行には力と勇氣とが必要である。これが無くては何事も出来ない。今日の日本人は體軀は矮少であるが、しかし中々活動力には富んで居る。世界中日本人ほど勤勉な國民はあるまい。今日世界の人は勤勞の過剩を説いて、勞働時間の短縮を説いてゐるにも拘らず、日本ではこれを主張しない。矢張り何處までも勤勉を説いて居る。我が國民は仕事に生きる國民である。勇氣に於ても亦恐らく世界に匹敵するものはあるまい。彼は死を恐れない。芳賀博士が言つて居るように、上古の我々の祖先は、死を忌んだことは甚しいが、これを恐れたことはない。泰然として死に就く。我が國が戦争に強いのも一つはこれによるのである。忠勇美談は非常に多く、そして國民は皆等しくこれを尊崇する。かの爆彈三勇士の如きは人間業では出来ない。少くとも一般庶民の子弟には出来ない仕事である。それを我々日本人は平氣でやつて退ける。今日アメリカが日本の軍人を恐れてゐるのは、若い軍人達が自ら肉彈となつて喜んで陛下の爲に死することが出来るからである。しかしまたあまりに死を輕んずる弊害も無いではない。自殺など、若し必要に迫ら

れて来るならば、決して躊躇しないで敢行する。一利一害はこゝにも免れ難い所はあるが、兎に角日本人は現實的で實行性に富んでゐる國民であることは争はれない。これが彼等の生々發展の重大原因の一つである。かくて彼等は今後世界の先頭に立つて、人類全體を指導する地位に進むであらうと、私は信ずる。

第三節 和

我が國體の特徵たる萬世一系の皇室を奉戴して、祖先を崇拜し子孫を愛育し、以て生々發展の一路を辿つて、我國獨特の文化を形成したその根本性質の一は、實行の實際的に存することは、前章に於て詳述した所であるが、第二の根本性質として私は和を挙げざるを得ない。元來我が國民性を論ずるものが、この特質を挙げたものがないのは私の不思議に思ふ所である。然らば和とはどう云ふことであるかと言へば、支那でも、これについては餘程重大な意義を保有せしめて居る。即易には大和を保合すと云ひ、中庸には「喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ひ、發して皆節に中ることを和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致さば、天地位し、萬物育す」と説いて、和なるものに非常に重大な意義を與へて居る。康熙字典には和の字を解して、順也、諧也、不堅不柔也と謂ひ、他と諧和し、他に順ふ意味を含めて居る。故に書經には萬邦を協和すと云ふ言

葉がある。即己の我意を推し通すことのみをしなで、譲るべきは譲り、與ふべきは與へて、協力一致して協調和諧する。しかもそれが故意に努むるのでなく、自然に行はるゝのである。我が日本人にはこの特性が非常に顯著に發達して居る。この特質が發して我が國民生活の種々の特徴を構成して居る。外に對しても我が國民ほど温和な國民はあるまい。内に於てはすべてが一致協力して進む所に國家の強みが存して居る。かの日本人特有の強烈な犠牲的精神の如きも、この特質の一顯現であると思ふ。我が國民の最も重きを置いて居る萬世一系の皇統、皇室中心の國民生活は、實にこの和道の發現である。又次に我が國民が重視して居る家族制度も亦實に我がこの特性の現はれである。そしてこの特性が國民生活のすべての部面に發現せられて、我が日本の文化を形成してゐるのである。この和道を心理的に言へば、その中核をなすものは情の動きである。穏やかな細かな人情美である。よく義理と人情との柵と云ふことを言ふが、それは本當に柵である。我々はこの柵に引きかゝつて、何ともすることが出来なくなるものである。これが自然であつて作爲ではないからである。自然の本性であるから、斯うもしたいと思はぬこともないが、本性はさうさせないのである。そこに愛がひらめき、親切が湧いて来る。斯うした所に平和がある。平和は實に我國歴史の特徵である。これは神代の傳説としても、又有史以後の歴史としても、平和を以つてその特徴として居る。勿論人事たる以上、色々の出來事があつて、互に排撃したり、殺戮誅

伐などのことがあつたり、戦争などが行はれたりすることのあるのは、當然のことであるが、そう云ふ中に於ても、比較的にすべてのことが、平和に進んで居り、よく統一が保たれてゐる。例の芳賀博士はその國民性十論の中に

我國の神話は極めて平和である。八百萬の神はあつたが、我天孫に向つて敵對行爲を取つたものは無い。外國の神話には大陽をあらはした勇者の神が、色々の妖怪に逢ひ、種々の怪物を退治する事が見えるが、我國にはそんな話は一つも無い。窟戸隠れは御弟の素盞烏神の行爲に怒られた爲で、その時には八百萬の神が一同集會して、その善後策を講じた。外國の大陽神の如く、或は幽閉せられたり、或は一時殺害せられて、又復活する様な事は無い。荒ふる神と云ふ語はあるが、荒行爲をした事は見えて居らぬ。八百萬の神はいづれもおとなしい忠義の神で、天つ神も、國つ神も、日神の御子孫の事業を補翼する事をのみ力めて居る。その事業を妨害したり、又はその國を奪ひ取らうなどといふものは一人も無い。誠に平和な神話である。神話は即ち我太古の國民の心性を反映したもので無い。

と書いて居るが、實にその通りである。我國の神話は、國土の經營と産業の開發とが、その本幹をなしてゐて、戦争などの事實は殆どない。従つて神話全體が平和で文學的な趣味に富んでゐる。特に天照皇大神の御神徳に至つては實に氣高いものであつたことが窺ひ知られる。古事記の記

する所によれば、須佐之男命が「大御神の營田の畔離ち溝埋め、亦其の大菅開谷す殿に屎放り散らし」給ふたけれども、大神は咎めずて告り給はく、「屎如すは酔て吐き散らすとこそ、我が汝兒の命、如此爲つらめ。又田の畔離ち溝埋むるは、地を惜しとこそ、我が汝兒の命、此如爲つらめ」と宣り給ふた。しかし須佐之男はなほそれにも反省せられず、大神が忌服屋にましまして神御服を織らしめ給ふ時に、命はその服屋の屋根を打ち抜いて、天の斑駒を逆剥きに剥いで、これを投げ入れ給ふたので、織女はこれを見て驚いて死んだと云ふ出来事があつた。流星に勘忍強くあらせられる大神も、畏みて天の窟屋に閉ぢ籠りましたので、遂に例の窟戸開きの段取となつたのである。そして須佐之男命は所謂千位置戸を負せ、髪を切り、手足の爪をも抜き取られて、神追ひに追はれ給ふたのである。

この一段を見ても、いかに天照大御神の和協の精神に充ち給うたか、そして終には萬全の勝利を得給ふたか、窺はれるではないか。これこそ實に我が日本の國民性の範例ではあるまいか。又大國主神の國作りの一聯の物語りも、國譲りの段もすべてはこの和協の大道に外ならぬのである。紀元一千八百五十二年、源頼朝征夷大將軍に任せられ、幕府を鎌倉に開き、武門政治が確立して以來、明治元年王政復古に至る六百七十六年の長年月間、我國史の上には、著しい汚點を印したのであるが、しかも此の間に於ても、猶國民の和協性を失はないで居た爲に、遂に明治の維新となつて皇室

の復起を見たのである。思ふに、武門政治は此の間にありて己むを得なかつた一種の變態的狀態と謂ふべきであらう。勿論我々はこれを正道とは言はぬ。たゞ當時の事情に即して取られた變態的な政體であつた。藤原氏執政時代から朝官の威力活動微弱となり、地方には盜賊跋扈し、豪族割據して、朝廷ではこれを制御統一することは出来なかつた。加ふるに頼朝時代に於ては平氏の遺族及其の殘黨などが諸國に潜伏し、義經及其の與黨も隨處に隠れ居りて、動もすれば擾騷を起すの憂があつた。これを統御して國內の靜謐安寧を圖らんとすれば、強力なる政治を行ふの要があつた。そこで朝廷の百官はその儘に名義許りを存して、諸國に守護地頭を置き、頼朝自身は總追捕使となり、遂に征夷大將軍に任ぜられたのである。頼朝の死するや、頼家實朝の代に至つては、その實權は北條氏に歸して仕舞つたのであるが、北條氏は猶これを廢除することなくして、將軍としてこれを其の上に戴き、頼朝の血統絶ゆるに至つては、京都より公卿親王を奉迎して將軍となし、自身等は鎌倉の執權と云ふので満足して居つたのである。頼朝にしても、義時・時頼・時宗にしても、若し天皇を廢し、若くは將軍を廢して、自らこれに代らんとすれば、敢えて難事では無かつたであらうが、そこに自ら抑制して、依然としてこれを主君として尊重して行つたのである。それはたゞ名目のみであつたのではあるが、名目だけでも存して置けば、他日時運の循環と共に、名實共に復興する時機の來るべきは、明治維新の事實に徴して明かである。かの承久の亂に、北條泰時がわざわざ途中

から引返して、

若し道のほとりにも計らざるに、辱く鳳輦を先立て、御旗を擧げられ、臨幸のけむらうなる事も侍らんに參りあはゞ、其時の進退如何侍るべからむ。この一事を尋ね申さんとて一人馳せ侍りき。

と云ふに對して、義時は、

かしこくも問へる男かな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓引くことは如何あらん。さばかりの時は兜を脱ぎ、弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべしと答へたと傳へられて居る如く、武門政治も己むを得ずして行はれたものと解しなければならぬと思ふ。たゞ大義名分の書生論ばかりでは論じられない。或は君の意見も尤だが、しかしさうだとすれば、頼朝としては、矢張り陛下の御もとに於て、これを助け奉つたらばよいではないかと、言ふ人もあるであらうが、それはさう簡單には片付けられない。さうなれば、京都に居る神代からの家柄のものを片付けて仕舞はなければならぬし、これは中々困難なことであるのみでなく、さうすれば、矢張り、かの清盛の徹を踏まねばならぬし、やがて腐敗して力の無いものとなつて仕舞うであらう。これらの事情を考へて見ると、當時、頼朝としては、幕府を鎌倉に開いて、政治上の強力な統御の方法を取り、たゞ儀禮の上から朝廷は何處までもこれを尊重すると云ふ方法を取るより

外に道は無かつたものだと思はれる。これは一方から言へば、確かに不徹底な方法であつたには相違ない。これが歐洲であつたならば、徹底的に皇室を叩きつけて、恰度フランスの革命や、近い頃では、ロシアの革命のように、ブルボン家を倒し、ロマノフ家を滅したものであらう。しかし我が國民性はこれを許さない。かくては不忠不臣のものとして、到底地方の豪族がこれに服従しないであらう。こんな考からして、恐らく、かくの如き和協の方法を取つたものであらう。これが實に日本國民の特性であつて、そしてその結果は非常に良好であつたのである。私は我が國の武門政治史を讀んで、かの武士の棟梁たちが、何故に時の天皇を弑し奉つて、己自らこれに代らなかつたかを、不思議に思ふのであるが、それが實に我が國民性の非常に優れた所で、これあるが爲に、遂に今日の如き、理想的な皇室中心の國體が成立したのである。頼朝が武門政治を開いて、強力な政治を行ふて居た爲に、かの後年の元寇にも打ち勝つて、我が國家の名譽を毀損することがなかつたのである。

この和協の筆法は足利尊氏のやり方にも現はれて居る。たゞその手段が多少異つて居るのみである。足利氏が北朝を戴いたればこそ多くの武士達がこれに従つたのである。さもなければ如何に尊氏が梟雄であつても、南朝と抗することは出来ない。のみならず南北の合一も矢張りこの和協の國民性であつたのである。徳川家康に至つては一層この和協の本性が強く現はれて居

る。彼れが戰國擾亂の世とて、帝室が甚く疲弊せられたのを嘆いて厚くこれを扶持し奉つたことは、比較的な話ではあるが、和協の性質の一つの現はれとも言ふべきである。かの東照宮の遺訓として傳へられるものが、果して彼れの作であるかどうかは、我々の知らない所であるが、少くとも最もよく、彼れの性質を表現して居るものと思はれるが、その中に「勘忍は無事長久の基」と云ひ、「勝つ事ばかり知りて負くる事を知らざれば害その身に至る」と云ひ、「及ばざるは過ぎたるよりも勝れり」と諭すなどは、實にこの和協の本性を遺憾なく發揮せるものである。論語の「過ぎたるは及ばざるが如し」と言へるに比して、教訓の言葉としては、一段勝れたものである。彼れは常にこの心掛けを忘れなかつたようである。明治維新の際に取つた徳川氏の處置は實に立派なものであつた。これが爲に日本の擾亂を救ふたのみでなく、徳川氏自身をも救ふたのであつた。當時内外の大勢は最早徳川氏の武家政治を許さなかつた。徳川氏の治世に於て、教育の普及と、學問の研究の進歩、就中國學研究の進歩とは幕府政治に對して非常な打撃を與へたのであつた。この時に外國との關係が起つたのである。こゝに強固な一元的な政治の要求が起つて來て、また武門政治の存続を許さなかつたのである。徳川慶喜がこの大勢を見破つて、潔く身を引いて、政權を皇室に返し奉つたことは、實に時勢を見るに敏なるものがあつたのであるが、そこに日本國民として和道の性質が發揮せられたのである。加之、皇室がこれを優遇せられて、今日に於ても、第一流の貴族

として、文明の惠澤に潤ふことを許し給ふてゐることも、亦實に和道の本性の然らしめた所であると思はれる。これと同時に、かの各藩の版籍奉還の如き、實にこの和協の本性を遺憾なく發揮して、我が國民性の優秀なことを十分に證明して居るものと思ふ。蓋徳川時代に於ける教育の興起と國學の研究とは、既に武家政治の存在を許さなくなつて來たと同時に、歐米諸國との通商は、亦封建制度の存在をも許さなくなつて來た。この趨勢を察知した人々は、各雄藩の藩主に勸説して版籍を奉還せしめ、藩主も亦時勢を察して深くこれを奉還したのであつた。この趨勢を看破した人々も、亦この意見を嘉納して版籍奉還の英斷を決行した雄藩の藩主も、これに倣ふてその版籍を奉還した一般藩主も、皆等しく時勢を見るの明を備ふると同時に、一致和協以つて維新の大業を完成せしめた忠愛の精神は、我が國民でなければ出來ないことである。その結果として、これら藩主は各々相當の公債を興へられて貴族に列し、今日に於ても、社會の上位を占めて、政治上にも、經濟上にも亦有利の地歩を占むることが出來て居る。抑も明治維新は政治上經濟上非常に重大なる變革であつたが、しかもそれが微少な紛擾によりて遂成せられたのは、つまりこの和協の國民性の賜と云ふべきである。

人或は、大化の改新と云ひ、明治の維新と云ひ、共に忠君の思想の發現であつて、決して和協の精神によるものではないと言ふものが多くあるかも知れない。然り、それは慥かに、忠君の考から來て居るであらう。しかし私の見る所によれば、我が忠君の思想もその根本を尋ねれば、この和協の性質から出てるものである。そしてそれが、自然の性情として、天皇を尊敬してこれを現神とし、その御爲には、身命財産をも惜む所ではないと云ふ所までになつたものであると信じてゐる。即消極的な和協と云ふ所から、それが積極的な奉仕の性情に進んで來たものである。和の本來の意義は順也諧也とあつて、むしろ消極的の性質の文字であるが、これが保合大和と云ひ若くは發而皆中節と云ひ、進んで致中和天地位萬物育と云ふに至つては、大々的に積極的な意味となるのである。私は教育勅語を奉讀する毎に常に此の感を深くするのである。教育勅語の第一段

朕惟フニ我が皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

とあるが如く、皇祖皇宗の日本國家を御創始になつたのは、唯一時權勢の欲を擅にする爲でなく、その恩澤を遠く永遠に及ぼさんとし、又これを次第に廣く普及せしめん御心からであると同時に、樹徳亦深厚であつた。これは歴代天皇の御心であつて、何れの天皇も臣民を子の如く愛し給はぬこととはない。これは我國史を讀むものゝ常に深く感ずる所である。上のこの長年に涉る御聖徳に、對し奉つて、下としての臣民は、皆等しく忠孝を盡し、こゝに上下祖孫相和して、所謂天地位し萬物育

すの大和境に達したのである。この大和境が即我が日本の國狀である。斯くて夫婦兄弟朋友社會とこの和道を盡す所に、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して戻らざる、大和の保合が生ずるのである。和の徳は、消極的な順譜から進んで、斯くの如く忠孝節義の積極的な保合大和となつて、天地位し萬物育するの妙境に到達するのである。我が國民性の隨一を忠君愛國であること云ふことは我々も勿論これと同様に信ずるものであるが、これに對して歴代の天皇の臣民を子愛せられる御仁徳を思はねばならない。國史を案ずるに歴代天皇の御事業にはそれぞれ違ひがあるけれども、この御精神には少しも變りはない。しかし始終御英邁の聖主が生まれて、専ら民業の發展に御心を傾け給ふた。特に神代にありては、天照大神の御名を始め、御一族の御勝れましたこと、あの交通不自由な時代にも拘らず、御名聲の全國に轟きわたることを推察するに足るべきである。例へば彼の瀆佐之男命が出雲の肥の河上にて國つ神足名推手名椎にその子櫛名田比賣を奉れと仰せられし時、「恐れけれど御名を覺らず」と申し、時命は「吾は天照大神の伊呂勢なり。故、今、天より降り坐しつ」と答へ給ひしかば、老人は「然坐さば恐し。立奉らむ」と答へし由を記し、又天照大神の御弟大遠理命が、兄の命の鉤を失ひ、これを尋ねて、海神の家に參られし時、海の神これを見て「此の人は天つ日高の御子、虚空つ日高にまませり」と云ひて、内に率ひて入れ奉りて、非常に鄭重に饗應せる趣を記し、又日子番能邁々藝命が天降りまさんとする時、天の八衢に居て、上は高天原を

照らし、下は葦原の中つ國を照らす神があつたので、天宇受賣命にその何人なるかを問はしめ給ふた時に、その神は「僕は國つ神、名は狹田彦神なり。出で居る所以は、天つ神の御子、天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、參迎へ侍ふ」と答へたとあるやうに、天照大神は勿論、その御一族に對し奉つて、國つ神々達は、非常に尊敬の意を表したものである。神代から既にかくの如きであるのに、神武天皇の御神武と云ひ、崇神天皇の御聖業と云ひ、その後御歴代の御英主が、相次いで皇位を嗣がせ給ふたのである。されば古來から天皇を現神と申し奉つたことも固より當然のことである。この神聖な歴代の天皇が國民の身の上を覺し召して、その幸福を圖り給ふたことに對して、國民が忠誠の意を表するのは、自然のことであつて、固より當然のことに屬する。されば國民の忠誠なるは、歴代天皇の御高德によるものであると言ふべきである。國史を見れば毎頁にこの趣が見られるのである。されば國民も己の利害得失を忘れて忠誠を盡すに至るのである。こゝに双方とも己を棄て、相和協するに至るのである。

然るに人々はこの説明に満足しない人々もあるのであらう。その人々の意見によれば、我が國民の忠誠は、かくの如く利害得失を考へたり、又は道德上の正否を考へたりして後に、忠誠であるのでは無い。所謂大義名分に即して、自然に發する國民の熱情であつて、彼の歐米人のギヴ・エンド・テイク主義のものではない。君君たらずと雖も臣は臣たらざる可らずと云ふ、換言すれば利害得失

に超然たる性情から發した忠誠の精神であると主張するのである。それは恰も四時の循環、晝夜の交替のように必然に来るものであると信ずるのである。思ふにこの間の心理を分解するのは甚困難ではあらうが、要するに三つの階級に分つことが出来る。即

第一 利害得失を計較して後態度を決する段階

第二 大義名分を考慮して處置する場合

第三 自然の性情に即する場合

この三つの場合を想定して、さて實際の事實を考へて見れば、皆何れの一つによるものであるとは定まつて居ないと思はれる。國民の數は無盡であるし、又その時の事情も種々雜多に相違して居る所から、必しも各の中の一つによるものであると限定することは無論出来ないことであらう。否我が國民の中にも、この三つの場合以外、不臣無道の奴輩のあるのは、一般に知られて居ることである。かの蘇我の馬子が、崇峻天皇を弑し奉つたが如き、平清盛が後白河法皇を幽せし如き、亂暴なものも多くあつたであらう。多くの民衆の中には、種々の思想を抱き、各種の性情を有つたものも多くあるし、又大抵のものは、何等の考も感情もなく、たゞ大勢に引きずられて居ることであらうし、決してこれを一定することは出来ない。況んや利害得失を考慮するとしても、所謂現金の直接取引のみでなく、長い期間の、しかも自然の、そして廣い、又目に見へない報酬もあると云ふ取引であつ

たならば、それは最早取引でなくなつて来る。斯くの如き賢明な利害得失の打算は、大義名分論と多く異なる所は無い。大義名分に從ふと云ふことは、利害得失を度外に置くと云ふのであるが、しかし大利大害を考へるならば、それは殆ど同様の結果になるのである。鼎鑊甘如飴と歌つて死んで行つた文天祥の如き人物が、多數に居たならば、今日も猶宋朝の天下であるに相違ない。そして支那四億の人民は、今日文明の惠澤を受けて居るであらう。のみならずこんな考なり行爲なりが、數十百代、何千年間遺傳性となり、そして各人の習慣となり、又社會的には、それが輿論となつて國民の行動を支配し、これを刺戟して来るならば、こゝにこの國民の大部分は、自然の本性の如くに、おのづから忠誠の心と行爲とを以て充たされるであらう。こんな風になれば、大義名分に從ふと云ふ有意的な行爲も、自然の忠誠心から發する行爲も、殆ど區別が付かぬ位になるであらう。而も人間の心境は非常に機微なもので、必しも一つのみによつて動くものではない。時としては利害得失の打算も行はれるだらうし、時としては、大義名分論によつて、自己を律することもあらうし、又時としては、自然の性情が主となつて働くこともあるであらう。又多くの場合はこれらの三要素が併せ働くこともあるであらう。さればその中の一つのみで、我々國民が動いて居ると云ふことは出来ないのである。我が國民が歴代天皇の愛民の思想及御行爲に感じて、國民は自己を捧げて奉仕する忠誠の心と行爲とを發揮すると言つた所で、何も我々はギヴ・エンド・テークの交換的賣買的、從つて

單純な利害打算的なものではないのである。即和道の根本は斯くの如くして、一部は賢明な利害打算となり、一部は大義名分を重んずる道徳的な思慮行爲となり、一部は自然の性情となり、これらが相錯綜して我が國民性の一有力な要素たる和の大道を形成したものと考へるのである。

私はこゝに至つて、我が國號をヤマトと稱し、これに日本又は大和の文字を充當したことについて考へさせられることを一言しなければならぬ。我が國をヤマトと稱するに至つたことは、その帝都の所在の地方の名稱を以つて、廣く全體を呼稱するに至つたのであることは云ふまでもない所であるが、さてこのヤマトなる名稱に大和の文字をあてたことが、私の疑問とする所である。日本と云ふ文字にヤマトと訓じたのは、ヤマトなる中央の一地方名を、全體の名稱とした所から、日本と云ふ全體の文字にヤマトなる訓を附したことも、勿論明瞭であるが、ヤマトなる地方名に大和なる二字をあて、それを更に全稱の日本名にまであてはめたことは如何なる理由によるか、私の問題とする所である。和魂漢才と云ひ、大和心と云ひ、和若くは大和の字を以つて、我が日本全體の名稱として、ヤマトの意に用ひ、且つさう讀ませて居る。或る人の説によれば、今の大和地方は、天災地變等が極めて少く本當に平和な地方であるから、和の字をあて、ヤマトと訓ませたのではあるまいか。大和地方は大きな地震もなく、又大風雨の災害もなく、誠に平和な地方である。さう云ふ所からこの地方に和と云ふ文字をあて、ヤマトとしたのではあるまいかと云ふのである。元來

ヤマトなる言葉は神皇正統記には、耶麻土といへる詞は、山迹と云ふなり。昔天地分れて泥の濕未だ乾かず、山をのみ往來して其の跡多かりければ、山迹と云ふ。或は古語に居住を止といひ、山に居住せしによりて、山止なりともいへり」とあるが如何にや。私はやまとは山戸で、かの港が水戸であるのと同じ義で名つけたのでは無いかと思ふ。従つてその内部は平和であることは當然であつて、嘗て天災地變のみでなく、人事上に於ても、平和であつたから、かく和の字を當てたのであるかも知れない。その理由は地方は未だ王化にうるほはないで騷擾が絶えなかつたが、大和地方は皇居として十分に王化に霑ふて居た所から、極めて平和であつたので、かたかた和又は大和の二字をあてはめて、これをヤマトと訓ませたものであるかも知れない。一時は大養徳と云ふ三字をあて、之をヤマトと訓ませたことがあつた。大百科事典には「この國は古くは倭國に作り、神武天皇の朝既に大倭、葛城等の國造を定めたまうたことが、國造本紀に見えてゐる」と記し、又「聖武天皇の天平九年大養徳國に改めたが、久しからずしてこれを大倭の二字に復し、孝德天皇稱徳天皇の誤の御代に至り、更に改めて大和としたものと思はれる。」とあるが如く、初には倭の字を用ひたのである。然るに倭の字も矢張り和と同様の發音と意義とを附して居るようであるが、元來は此の兩字各々多少づつ相違してゐる。倭は字典に於て爲切音煨とありてイと發音すべく、又鳥禾切音渦とありてクワと發音すべきようである。字義は順貌とあり、又倭暹回遠貌とありて悠揚迫らざる所を

表はす文字である。又前漢書には樂浪海中有倭人分爲百餘國とあり、師古註には魏略三倭在帶方東南大海中、依山島爲國、廣海千里、復有國、皆倭種とありて、これらから思ひ付いて、ヤマトに倭の字を當てて、大倭又單に倭と稱したものであらう。當時の學者は皆漢籍を諳誦せしを以て、これらの書中に記した所のものをよく記憶して、倭字を採用したことゝ思はれる。後更にこれと殆ど同意義同音を有する和の字の、更に意義あることを思ひ付いて、大和と名付けたものであらう。しかし私のこゝにこの事を論ずる所以のものは、我が國の國號として和字を用ひるに至つた歴史でなくして、その意義である。我が國が古來から萬世一系の皇室を戴き、國民は一致融合して、國家を衛り、擾亂比較的になく、國民安らかにその生を送ることを得たのは、上下各々和の道を守りて、互に推讓するの美德を有する所から來たのであると信ぜられるが、その和が我が國を表はす文字として採用せられて居ることを、私は不思議に思ふのである。或は古の識者が、この平和推讓などの特性を自覺して、大和の文字を當てはめたものであるかどうかを考へて見たいと思つて、この一論を試みたものである。それにつけても、私はかの我が國を代表すべき經世家の一人たる二宮尊徳が、その報徳教の四綱領の隨一に推讓の徳を擧げて居ることをこゝに想起せざるを得ないのである。和の根本は推讓にあるのである。互に相讓る所に和道が存するのである。各自己の我慾を擅にしては争はあるが、和は存しないのである。勿論和の後ろには争が伏在して居る。争があるからして

和が必要なんだ。歐米の諸國民はこの争を醇化して、それによつて國家を保つて居るが、我が國民は和を本として争を止めて居る。これが歐米諸國民と我が國民との性情の著しい相違である。争が激化すると擾亂となり革命となる。和の弊は動もすれば悠長となり、懦弱となり無氣力となり、凝滯となる。これは我國の中世の歴史がこれを證明して居る。我々はその特性たる和の大道を會得すると同時に、その弊に陥らざる様最も注意しなければならぬ。

我々は猶一つ和道の現はれを観察せねばならぬ。それは道德上から言へば孝道となり、制度上から言へば家族制度となるのである。我國は古來よりこの孝道を重んじたことは何人も知る所である。尤もこゝに孝道と言ふのは、父母に對する奉養のみでなく、遠く祖先に對する敬愛の情をも含めて言ふのである。忠孝一致と云ふのは、一つには心理的傾向の一致から云ふのであるが、又他の一つは祖先に對する敬愛の情から、その祖先の心を盡して奉仕して居た萬世一系の天皇の御子孫に對し奉つて忠誠を盡すは、即祖先の心を心とするものなれば、こゝに忠孝の一致が成立するものである。この見方は同じ忠孝一致を説く支那人には、極めて制限せられたものとなるのである。それは奕世革命の支那に於ては已むべからざることである。斯くの如く孝道はたゞ現在の父母に對するのみでなく、遠く祖先に對する敬愛の念をも含むものであるが、我國に於ては、古來この點が著しく強調せられて居たのである。それは社會制度が特に然らしめたものである。即

上古の社會制度は族制で、その一族は相集つて住居し、同一の職業を營み、同一の族長、即氏の兄によりて統御せられて居た關係から、その同族の人々を保護し、その幸福を増進せんが爲に、皆その祖先を尊びてこれを祀つたものである。これによりて同族中の人心を統制し、これを勵まし、これを奨めて、その族人の奮勵努力を促がしたものである。前に引用した大伴宅持の歌がよくこれを示して居る。「大伴の、遠つ神祖の、其の名をば、大來目主と、負ひ持ちて、仕へし官」云々、「健男の、清き其の名を、古從、今のをつゝに、流さへる、親の子どもぞ、大伴と、佐伯の氏は、人の祖の、立つる言立て、人の子は、祖の名絶たず、大君に、まつらふものと、言ひ續ける、事の官ぞ、」云々と歌つたように、人々の祖先は、その子孫の爲に、努力奮勵し、その子孫は、祖先の功勞を思ひ、その恩に報ゆる爲と、又一方には、子孫の爲に、努力奮勵して、益々その家名を隆昌にする、こゝに双方の和協が成立する。その關係は君臣が、君は臣の爲に盡し、臣は君の爲に身命を擲つて奉仕するのと、全く相同しい關係に立つて居るのである。この關係が實に和協の關係で、これを強く主持するのが、我が日本の國民性である。これは族の制度から進んで、家の制度に至つても、亦同様である。そはたゞその範圍が狭くなつたと云ふに過ぎない。然るに今日に於ては、我が國も、殆ど歐米に於ける個人制度と同じ状態になつて來たのであるが、穩健な考を有つて居る識者は、猶未だ、我國に於ては、家の制度を維持せねばならぬと主張して居る。その理由はこれが淳風良俗であるからだと言ふのであるが、何故にこれを淳風良俗として、

保持しなければならぬだらうか。

元來家族制度が、個人制度に進むのは社會制度の變遷の順序として、當然と思はれるのである。始めは一族のものが、一人の家長に統率せられて、ある一地方に住したものが、後には一家のものゝのみが、その家長に統率せられて、その生活を營んでゐた。それが又個人を主とする人の制度に移つて來た。それは種々の理由によることであるが、第一には生計を立つる上からの必要があつたのである。昔時人間の生活の單純な時代、人口稀薄な時代に於ては、多くの職業もなし、又交通も容易でなく、人々も多く無知純朴で、人の統御の下にあることを、苦としなかつたのであるが、現代に至りては教育が普及した爲に、各人各々知能を開發し、加ふるに種々の業務も生れ出て、交通も極めて容易となり、何處に行つても、その仕事を見出して、その生計を立てることが容易に出来ることゝなつた。しかも國家の保護が行き届いて、安全にその生を送り得ることゝなつた。かゝる場合に於て、我々は何を好んで、氏の長者や、家長の統制に服従して、その自由な活動を阻礙せられる必要があらうか。加ふるに各人各々その天稟の才能を發揮して、その全能を盡すことは、その一家の定職に服事するよりも、社會上有効な活動をなすことが出来るのである。こんな場合に當つて、以前の様に族長や家長の下にありて、その統制の下に服従することが出来るものではない。こゝに個人制度が生れて來た。特に歐米に於ては自由獨立の思想が強く人心を動かして居るので、これが一層個

人制度の出現に拍車をかけることゝなつたと思ふ。

然るに我が國民にありては、こゝに一種特別な心情が存してゐるので、歐米の社會制度と同じものが生れて來るとは思はれない。よく我が國の識者は、日本は家族制度の國であるから、これを維持しなければならぬと言ふのであるが、それは必しもさうでなければならぬと云ふ理由はない。前に言つたように、社會制度は社會の事情によりて變化し發展するものであるから、從來家族制度であつたからと云ふて、何日までも家族制度でなくてならぬと云ふものではない。現に我が古代は族の制度であつたものが、家の制度に知らぬ間に變化してゐる。それは社會の狀態がかく變化せしめたものである。されば家を單位とした社會制度も、社會の事情が變化して來れば、自然に變化して來るのは當然のことである。これは歐米だつて同じことである。歐米諸國が今日個人を主とした社會の組織となつて居るのは、矢張り社會事情がこれに適する様になつて來たからである。日本も今日既に歐米の社會事情と同様になつて來てゐるので、同じ個人制度に變化して來るかと思へば、それは必しもさうではない。何となれば歐米人の心理と我が國人の心理との間には、相當の相違があるからである。この心理の相違と云ふのは、歐米人の傾向は鬭争傾向が強く、我が國民にありては和協の傾向が主となつてゐる。我が國民は互に相讓る氣分が非常に強い。我が國の歴史は主として和協の歴史である。従つて歐米の如き壓制政治と云ふものがない。殘虐な殺

戮の事實を歴史上に見ることは出來ない。我が國民は歐米人に比して温和親切であることは、歐米人の日本に來たものゝ強く感ずる所である。歐米人が日本を指して好戰國民であると云ふが、それは當を得ない批評である。それは日清日露の役と相次いで二つの大戦争を敢行したのみでなく、その士氣甚旺盛で、遂に兩國の兵に勝れて居り、身を以つて國家に殉ずることを、非常な名譽とし、勇敢に戰ふ所から、これは好戰國民であると言ふに至つたことゝ考へられるのである。しかしながら平常これに接すれば温和親切な國民であることは、少しく日本人を知れるものは何人も認むるに躊躇しない所であると思ふ。我が國民が自由とか平等とかを叫ばなかつたのは、これを叫ぶほど壓伏せられて居ない證據である。私は再び歐米に遊んでこの事を深く感じたのであつた。かくの如き心理上の相違は、社會事情が殆ど相同じいと言つても、その制度を全く同一になすと云ふことはない。我國にありては、都會地にありては、各家皆個人制度の如きものとなつてゐて、歐米諸國と、外形上殆ど同様である。換言すれば全く個人制度となつてゐるようであるが、その實質に於ては、遂にこれと相違してゐる。即我國にありては、小家族ではあるが、矢張り家の制度を主として、家督相續を重んじ、嗣子がなければ養子をなし、以て祖先の祀を絶えざらしめんことを努め、祖先の祭には、必法要をつとめ、親族のものが相會してこれを行ふ習慣となつて居り、又兄弟が生計に困れば、矢張り郷里に歸りて、父母の家に養はれる。父母老衰すれば子孫がこれを扶養する。これ

我國にありては養老院の設少く、又失業救済などの社會的立法を多く必要としない理由である。この頃では老衰せる父母と壯年の子供とは別居するものが多くなつたが、それは双方とも心配なく、自由な生活をなす爲の便宜的な方法であつて、矢張り家と云ふものは嚴然として存在して居る。即何れか一人は戸主であつて、他は所謂昔の部屋住である。唯部屋が獨立した家屋となつたまである。かくの如く表面は個人制度の如くなつたけれども、その内容は矢張り家の制度である。我が日本人にはこの方が満足が出来る。そして今日の民法で皆満足してゐると考へられる。別にこれを純然たる個人制度に変更しなければならぬと論ずるものは無い。そして父母の子に對する愛情は、子が成長しても變らないし、子は又父母に對する孝養を最も大切なものとして、終生偷らないようである。この制度は今後社會事情の變化によつてどんなに變るべきか、その點は豫言することは出来ないが、その精神に於ては恐らく永久に變化することはあるまい。否、これは變化させてはならないものである。何となればこの日本人の和の特性は、人生に於て最も大切なものであつて、人生の幸福を生み出す上に、最も必要な要素であるからである。

勿論事物には一利一害があつて、純然たる個人制度は、人をして敢爲邁進せしむる氣象を獲得するに便であり、家族制度は人をして依頼心を起さしめ、人をして懦弱に導くのがあり、或は家産を積まんとするに専念して、社會事業にこれを投ずる心を薄くするの嫌がないではない。しかし一

方には家名の爲に奮勵努力するの素因となることも亦頗る多いことも事實である。つまり所和道は人の幸福を増進せしむることに於ては第一と言ふべきである。孫子も人和を以て戰に臨む第一の條件として居る如く、我々人間が、生活の戰場に臨むに於ても、亦人和を以て第一とする。人々相和する程強いことは無く、又愉快なことではない。然らば和を行ふの道如何。第一には己の私欲を抑制せねばならぬ。第二にはこれを他に譲らなくてはならぬ。第三にはそれが爲には努力しなければならぬ。而してこの三徳の根柢をなすものは實にまごころである。この四つの徳は報徳教の四綱領即至誠推讓分度勤勞と同じ意味である。彼の報徳教は二宮尊徳翁の教であるが、これは實に我が國民特有の教と云はねばならぬ。それは我が民族性の最も優れた和道實行の關鍵である。

日本の強みは人和にある。人和の現はれの最も顯著なるは萬世一系の我が皇室に存して居る。天皇の御一行御一言はすべての争を止めしめる。日清日露の兩役に於て、犬猿の如く争つて居た兩政黨が、天皇の御詔勅によりて、すべてを忘れて、その敵に當つた様に、和の根柢は實に我が皇室に存する。友人川村理助氏は、君主政治の理想的なものは世襲の君主であると云ふ趣旨を述べたことを記憶して居るが、我が皇室はこの理想的なものの中に於ける最も理想的な世襲君主である。皇室の御安泰ならん間は我が日本民族は安泰である。皇室は實に我々の生命の根元である。

近年或が國に於て、フアツシヨの思想が大分流行して居るようであるが、これは恐らく強力な政治を必要とするの意味であらうと思はれる。しかしながら私は日本の國家組織ほど最も強い、鞏固な組織は無いと信じて居る。それは全く和道の精神によるものである。和道によりて萬世一系の皇室が確立し、天皇の一言とさへ言へば國民は如何なる場合でも、一致してこれに服従する。天皇も亦自己の便益など眼中に置かせられず、萬民の利益を自己の利益として考へさせられる。こゝに和道が成立する。人和ほど強いものは無いことは孫子が既に道破して居る所である。我國が明治大帝の御稜威によりて、固有の組織に復歸した以來實に無限の實力を蓄藏して居るのである。然るに彼のフアツシヨなるものは、僅かにムツソリニの力によりて、イタリーを統御して居るに過ぎない。若し一朝ムツソリニが失敗するが如き事件が發したならば、フアツシヨは直に崩壊するに極まつて居る。ムツソリニが出た爲にイタリーの皇帝は有れども無きが如き有様ではないか。イタリーの學校の講堂には、その正面に十字架を懸け、その左右に皇帝とムツソリニとの寫眞がかけてある。何と云ふ不遜な態度であらう。これは恰も我國の武門政治にも比すべきものである。これは已むを得ずして起るべき權道であつて、所謂大義名分から見れば、極力排撃すべきものである。今日我が國狀は實に正道に復して居る。たとひ今の内閣が弱いと言つても、それはたゞ表面上のことである。我が國ほど基礎の強固な政治形體は外には無い。英國國民も亦強い

基礎を有して居る國民であるが、それも我國には及ぶまい。何となれば彼は元來が鬭争的な性情から發したものが、今日に於ては非常に醇化して居るに過ぎないからである。争の醇化が一朝蹉跌すれば、激烈な鬭争となるからである。それは和の強化せるものには及ばない。しかしながら私は世界の事情が現在の通りであるならば、英國國民の争の醇化が蹉跌するとも思はねば、我が和の弱化をも豫想することも出来ない。鞏固な基礎の上に立つものは必發展する。近年世の識者がよく英國の勢力が落日の如きものがあると論ずるが、私はこの意見に同意することは出来ない。彼は何れの處にかその發展の餘地を見出すであらう。そして世界をリードする一勢力たることを失はないであらうと信ずる。我が國の前途は更により有望なものがある。東洋の盟主、東洋諸國民安定の大國柱となつて、更に進んで世界の文化に一大貢獻をなすに至るであらうと私は信じてゐる。否是非ともかくならねばならない。それはつまり和の大道によるものである。かゝる鞏固な基礎を有するものが、何を苦んでフアツシヨなどを我國に輸入しようなど、思ふものがあるか。我々は何處までも我が和道によりて鞏固な基礎の上に立つべきである。彼の獨逸の如きあまりに主我的な鬭争的な性情を有して居る。彼は明晰な知識と熱情と實行力とを有して居るが、英國國民の如くに、これを醇化する性情を缺乏してゐる。これ彼が統一が遅く、又世界各國から動もすれば排斥せられる所以である。つまり彼は明確な知識を有して居るけれども、賢明ではな

い。和の大道は實に賢明である。況んやファシズムの如きは問題ではない。

立憲政治は、日本とその性情を異にせる歐米人の政治形態である。然るに明治大帝は彼の有名な五條の御誓文の大趣旨に従つて、これを我國に御採用になつた。そして今日の帝國憲法を御制定になつた。この點既に歐米のそれと其の揆を一にしない。従つてその運用に於ても亦自ら違つた所がなくてはならないと思はれる。元來我が憲法は天皇が自らその主權の一部を臣民に分ち與へられたもので、その本家たる英國民が力づくで、これを主家から奪つたものと、その性質を異にして居る。然るにその運用に於ては、殆ど英國と同じく兩政黨が、相互に政權を握つて來た。されどこゝに兩國の間に冥々の裡に相違したものがあつた。それは彼にありては理を以つた合し、或は理によつて離れるのが大體普通であるが、我國の政黨はさうは行かない。それはそこに大に人情が加はるのである。我が國民は人情に厚い所があるので自然にさうなつて來る。従つて政黨が朋黨に近いものになつて來るのも止むを得ないことである。そこで今日について言へば、政友會に黨籍を置いて居る旅宿業者は、民政黨のものゝ宿泊を斷り、民政黨に籍を置いて居る理髮業者は、政友會員には理髮を斷ると云ふ所まで進んで來る。これは勿論その弊害の極端な事例に過ぎないものであるのは、言ふまでもない所であるが、こゝに大に情實が加つて政黨腐敗の因を爲す。しかもこゝにも彼の親分子分の關係が成立し、親分となれば子分の代議士何十名かを有つて居な

ければならないし、その選挙の費用には、幾十萬の金を要する所から、政商との結託を餘儀なくされる。しかも今日では投票の買収が行はれて、これに多大の資金を要する所から、一層多分の金を準備しなくてはならないので、益々その準備に所謂大きな金穴を探さなくてはならない。政治上の權力ある位置に上るには是非かくの如き親分にならなければならぬので、政治家としては單に政治的識見と手腕とを要するのみでなく、この種の子分を養ふ爲に、必要な金穴をも把握して居るだけの力量をも有して居なければならぬ。これが政黨の腐敗を來たし、所謂政商の跋扈を誘發する原因である。今日唱へられて居る選挙肅正の運動は、この弊害を除去するにまでは行かなくとも、少くともこれを輕減する上に、餘程効果を有するものと思はれる。それは政治家の負擔を大に輕減して、自然政商との結託を少からしむるからである。しかしながらこの弊害は徹底的に除去することは出來ない。何となればかゝる人情は、我が國民の有する一特徴であつて、しかもそれは我が最も誇るべき、萬世一系の皇室中心の政治形態を造り成した性情と同一な性情であるからである。これを破壊すればこの尊むべき我が國體をも破壊せねばならぬからである。しかもそれは我が國民性の最も強い性質たる以上、これを棄て去ることは殆ど不可能であると信ずる。我々は唯これらの弊害を輕減することを以つて、満足しなければならぬし、それの方がむしろ喜ぶべきであると思ふ。もしかくの如き弊害が餘りに甚しくなつて來た場合には、一時政黨政治を中止

して所謂超然内閣或は舉國一致内閣を組織して、靜かに政黨肅正の機を待つべきである。これが今日我が國の政治に實現せられて居る齋藤岡田兩内閣の任務である。今後幾年かの後、政黨が覺醒して自ら肅正されて来るならば、自然に政黨政治が實現せられて、眞の立憲政治が行はるべきであらう。我が立憲政治は、英國の政治を眞似たものであるが、それは我が國の國民性に最もよくあてはまつたものと思ふので、そして又フアツシヨや、ナチズムや、ましてかのコムミユニズムなど、違つて著しく和協的性質のものである點があるので、我が政治形態に最もよく適したものと信ずる。明治大帝がこの制度をお立てになつたことについては、我々は實にその御慧眼に嘆服すると同時に、何處までもこれを恪守すべきであると信ずる。たゞその實行上の運用に於ては、これが實現の順序が違つて居たと同様に、我が國獨特の實際方法がなくてはならぬ。最後に大和心或は大和魂について一言してこの章を終ることとする。大和心としては、彼の本居宜長の

敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花

が有名な歌であり、又大和魂としては、彼の吉田松陰の作である

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂

と云ふ歌が最も人口に膾炙して居る。今この三首の歌の意を案ずるに前者は山櫻が満開して旭日に輝き渡つた時のあの華麗な、清淨潔白な姿を讚嘆して、大和心は實にかくの如きものである。しかも一旦嵐が吹いて來れば、それが深く散つて行く、そこに何等の未練はない。恰も我々日本人が君國の大事に際會すれば、身命を賭してこれに殉ずるを惜しまない意味をも含ませたものだと見るべきであらう。こゝには清淨潔白で一點の汚塵をも受けまい姿を讚したものである。これに對して、松陰の二首は、君國の大事に處しては、身命敢へて惜しむに足らない所を強調したものである。この二つの場合に於て、その主とする所の意味は異つて居るが、その間に靈犀相通する所のあるのは、自ら分明である。即宜長の大和心の意味は平常無事の時に表はれたものであり、それが一旦君國の大事に際會した時の悲壯な決意が、松陰の大和魂に表現せられて居るのである。かの藤田東湖の日本正氣の歌は、この兩者を表顯したものである。これは實に和の精神を平時と非常時との兩時に顯現した姿を道破したもので、共に自己の私慾を適度に抑制して、共存共榮の美風を發揮し、更に時と場合とに應じては、進んで、自己のすべてを犠牲に供して、君國を守護するの精神、氣持である。

かくの如く大和心若くは大和魂を見る時はそれは當然和の精神の發露と稱すべきものである。

第四章 日本國民の自然性

第一節 風光の美

私は芳賀博士の「國民性十論」を愛讀するが、中にもその四、「草木を愛し、自然を喜ぶ」の章が、最も氣に入つて居る。でも、そこにも少しく物足らぬ所を感じる。

氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季折々の風景は誠にうつくしい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは自然である。四圍の風光客觀的に我等の前に横はるのは、すべて笑つて居る中に、住民獨り笑はずに居られぬ。Vice Versa。現世を愛し人生生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。この點に於ては、東洋諸國の民は北方歐人種などに比べれば、天の福徳を得て居るといつてよろしい。殊に我日本人が花鳥風月に親しむことは吾人の生活いづれの方面に於ても見られる。

かく冒頭して博士は例の博識を以つて、古今に涉り、多方面に涉つて、我が國民が、常に花鳥風月を樂んで自然を愛することを、滔々と、しかも面白く述べて居られる。まことに趣味横溢せる名文である。しかし私は一寸一つ物足らなさを感ずるのである。これは人間はその自然の環境に影響

せられると云ふ考から出て來たものである。人間は自然の子である。ヴァイス・ヴァーサではなくて、自然そのものである。人間と自然とを對立せしめて、自然の影響が人間に及び、人間の影響がまた自然に及ぶと云ふのではなく、我々人間が自然の一部である。私は寒氣を征服すると云ふ意味で、運動したり、私獨得の摩擦衛生法を行つたりすると云ふ風に考へて居た。所がある會合の席上で、一人の青年から、寒氣と抱擁し、その懐に抱かれて生活して居ると云ふことを聞かされて、私はなるほど感じたことがあつた。征服するとか、影響するとか言ふのでなくて、それ自身である。そのものゝ一部であるのである。我々は自然に影響せられると言ふけれども、實は我々自身が自然そのものである。されば我々はその自然を観ることにより、その國民を知ることが出来るのである。日本の有する自然を観察することによりて、日本人そのものを知ることが出来ると思ふのである。

私は嘗て一年有餘歐米の觀光に費して後、六月頃、アメリカから横濱について、汽車で東京に歸つた。その日は梅雨前の初夏のよく晴れ切つた日であつたが、車中から見れば、起伏した丘陵の上を青葉の繁つた樹木が被ひ、田畠はよく耕され、軟かい光を浴びて、見るからに心の躍るを禁じ得なかつた。あゝ何と云ふ美しい故國の姿であらう。世界の何れの國でもこんな美はしい國を見たことはない。恐らく日本の自然は世界中で一番美はしい國であらう。と云ふ感じをしみじみと抱

かせられたことがあつた。それは待望してゐた故國のことだから、自然と美しく見へたのかも知れないが、それにしてもその美しさの感じは、二十三年を経た今日に於てもなほ、眼に残つて消え去らない。これと同じく外國の人が始めて我國に訪れた時、關門海峡の風景を船上から見て、その美に感ずると云ふことであるが、何れにしても我國の風光には世界の何處でも及びもつかぬ所があると思ふ。私にはこの無比の美しさを書き現はすだけの麗筆を有たないのが遺憾であるが、しかし今は何としてもこれを必要とするので、兎にかく、これを書かねばならないのである。

斯くの如き風光の美と共に、溫和な氣候、豊饒な土地、すべてこれ等はそこに永住せる我が民族をして、この土に眷戀せしめしのみならず、更に進んでこれを育成して今日の我が民族を形成せしめたものである。我が國民が一種特別な藝術を創造し、清淨潔白の氣風を有するに至つたのは決して偶然ではないのである。特に我國の藝術は支那歐洲より輸入せられしにも拘らず、日本獨特の藝術を發展せしめたことは、この國土の美から得た賜であることは、諸所に論述した所によりて明かな所である。

第二節 氣候

日本は氣候が溫和で山水が秀麗であると、一口に言つて仕舞へば、それまでであるが、モット分解

して詳細にこれを觀察せねばならない。日本がかくの如く立派な國土であると云ふことを考へて見れば、すべてが好位置を占めて居ると云ふことに基くようである。日本の位置は今日は臺灣高雄州澎湖廳望海支廳花嶼の東經百十九度一八分から、南洋委任地たるヤルート支廳區のミレ島の同百七一度一〇分に至る間、又緯度は同南洋委任地たるボナベ支廳區グリニツチ島の北緯二度二分から、根室支廳占守郡阿頼度島の五十度五十五分の間に散布してゐるが、古來日本の本土であり、所謂大八島として固有の日本民族の住地は、殆ど全部が溫帶中に位し、そこに所謂日本文化が發展したものである。この日本國土の氣候は大抵最高攝氏三十五度、最低攝氏零下五、六度で十度以下に降る所は極めて少い。處によりては最低零下二十度以下に降り最高三十九度以上に昇る所がないでもないが、そんな所は極めて少い。概して言へば寒溫共に中帶に位し、且春夏秋冬の區別極めて明瞭である。従つて常に人心に適當の變化を與へ、風物も亦時に應じて著しく變更する。春の花夏の若葉と水秋の果實と月冬の雪霜などは言ふまでもないが、これが身體の發達にも亦同じく影響して、春より夏にかけては身長を増し、秋より冬にかけては體重を加へ、氣分も亦これと同様で、春は陽氣に、極夏にはだれ氣味になり、秋は收穫の喜びから落葉の哀れさを感じ、冬には却つて緊張して來るなど、人も亦氣候の推移に應じて變化する。文學もこれに應じて、多彩多色となり、事業も亦、これに従ひて各様各種に發展する。我が國土、我が風物、我が民族がこの氣候の變化に著し

い恩恵を受けて居ることは争はれない。かの印度の如き熱帯地方の民族が冥想に耽つた結果、遂にかの悲觀的な厭世的な、しかも偉大な佛教思想を生んだのも、つまりる所は氣候の影響が重大な原因であつて、矢張り自然の子であることに變りはない。始終温暖で人間の身心を遅緩せしめるのみならず、衣服を要せず、食物は勞せずして得られ、しかも毒蛇、猛獸、疫癘の襲撃は絶へずやつて来る。こゝに冥想と共に悲觀が彼等の常習たらざるを得ないのである。況んやあまりに無爲徒然で、耳目を娛はせるものが多いと云ふと、所謂歡樂極まつて悲哀生ずと云はれた心理で、そこに自然と悲觀厭世、出家の氣分が湧いて来るのは當然のことである。然るにこの印度の氣候が生んだ佛教思想が我が國に傳へられるや、次第に變化して、實際的な、樂天的なものとなつて來た。叡山は王城守護の靈域と化し、僧侶は加持祈禱の具として、病氣の時も、出産の時も、醫者よりも先づ僧侶を呼ぶ。早天で五穀が實らない心配があると云ふので、雨乞ひをするにも僧侶、あまりに雨天が続いて出水甚しく、又疫癘流行して國民が大に苦んだ場合にも僧侶、かくて奈良、平安朝時代の佛教は全然かくの如き實用化せられた結果が、遂に今日残存せる奈良の廣大な寺々となつたのである。かの今日に於ても、世界第一の木造建築と稱せられる大佛殿を含む東大寺の如き、總國分寺として聖武天皇の建立にかゝるものであるが、その額には「金光明四天王護國之寺」とあるが如く、天皇が國家の無事繁榮を祈念せられて、當時にありては實に一大事業である總國分寺として造營せられたもので

あつた。その目的は全く國家の守護にあつたのである。ある人の計算によれば、かの大佛殿の圓柱一本の價今日にても、貳萬圓を要する。この柱が六十本あるので、あれだけでも百貳拾萬圓、銅瓦一枚六圓としても數萬を要する。大佛の材料からその鑄造費等、恐らく數千萬圓を要するであらう。しかし今日軍艦でも戰艦なら猶數千萬圓を裕に要する。護國の寺としての大佛殿を建築せられたのは、今日軍艦を建造するのと同じ趣旨であるから、當時これらの寺を造營せられたのも、別に驚くに足らぬことであると語つたが、實際、當時の佛教思想からすれば、全く斯くの如き實際的に必要を考へられたのであらう。降つて鎌倉時代に入つて、法然親鸞、日蓮に至れば、一層實際化せられて、親鸞の獵すなどをなしつゝも、猶以つてよく安養の淨土に往生することが出来ると云ひ、善人猶以つて往生する、況んや悪人をやと諷すに至つては、實に我が佛教は實用の極に達したものである。印度に起つた佛教が、日本に於てかく特異な發展を遂げたのは、全く民族性の相違に基づくものである。日本の民族性は何處までも實際的活動的であるが、その實際的活動的なものに佛教を改鑄したのであつた。而して日本民族のこの實際的活動的な性質を生んだものは、我國の氣候その他の地理的事情によるものである。温帯地方では活動するに最も適當してゐるのみでなく、働かなければ生活することが出来ない。従つてそこに住してゐる人間を活動的ならしめ、實際的ならしめる。しかも働きさへすれば、益々その効果を大ならしむることが出来る。我が日本民族の素質を鑄造せる一つの大きな力は實にこの我國の氣候である。

一體氣候について言へば大陸の西部に位する地方が、東部にある部分よりも概して良好である。それはフランスの巴里の如き緯度の位置から言へば、我國の樺太や千島と殆ど同緯度にあるにも拘らず餘程溫暖で、殆ど我が東京と異らぬ位である。ロンドンの如きは東京よりもむしろ冬は溫暖に夏は冷涼である。特に米大陸の西海岸は氣候が良好で、我が中國地方とその緯度を同うするロスアンゼルスLos Angelesの如き常春の氣候である。ロスアンゼルスがこの二三十年の短日月の間に異常な發展を遂げたのも、一面石油の如き特異の産物を産することにもよるが、その良好な氣候に大關係を有するものである。カナダのヴァンクーヴァーVancouverの如きもよほど北寄り、殆ど五十度に近いが、それでも樺太など、比較すれば遙に溫暖である。これは主として海流の關係によるものゝやうに考へられるが、又米大陸の如きは、それに山脈の位置が特に大きな原因をなしてゐるものと思はれる。何れにしても大陸の東海岸よりも西海岸の方が、その氣候が良好であることは間違のない事實である。然るに我が國は亞細亞大陸の東部に位して居て、あまり氣候のよい方ではないのであるが、幸にして大八島は大部分黒潮暖流の影響を受けて、氣候は比較的緩和せられて居る。唯東北地方の北部から、北海道樺太千島にかけては、寒流の爲に著しく寒冷になつて居るが、概して言へば惠まれた氣候である。特にすべての土地が島嶼から成立してゐる關係から一層氣候は溫和である。従つて雨量も多く樹木の繁茂も一層盛になると云ふ状態である。努力さへすればそれ相當に惠まれることが出来る。こんな境遇に置かれて長く生活して來た民俗である我が日本

國民が活動的實際的になるのは當然過ぎるほど當然ではあるまいか。勿論我が國民性を養成した自然の環境は單に氣候のみによるものではない。これと關係を有する風雨や、これを圍繞する海洋や、又この島嶼を形成する地形やが相集つて、一種獨特な我が國民性を育成したものであることは、これから追々説明する通りのことであるが、兎にかく我が氣候が我が民俗の一大特性たる活動的實際的な氣風を育て上げたものであることは、疑のない所である。

第三節 國土の位置

次に我國の位置は亞細亞洲の東端にありて、東は太平洋の波に洗はれ、西は日本海に面し、風と潮流との關係によりて、濕氣の多い國である。これが又非常に我が國民の心身に影響して居る。我が國が樹木果實蔬菜に富んで居るのは、一つには氣候にもよるが、一つは水分を多く含んで居るからである。樹木の多いことは、我が國土の美麗な一要素をなして居る。初夏若葉の繁つた時期は至る所鬱蒼たる森林で装はれてゐる。若葉を詩歌に歌ふのみでなく、歌の題にまでも、若葉が選ばれて居る國は、恐らく我が國以外には見ることは出来ないであらう。それは春の花と殆ど同じい位に歌はれて居る。花も亦従つて多く立派な色が多い。櫻に菊は流石に我國の花の王で、春秋に各々その覇を稱へて居る、所謂國花である。其の外我々の名も知らぬ花も澤山ある。紅葉も亦我國の一名物であらう。これについても我が國民ほど花の爲に騒ぐ國民は無いようである。花見

とか紅葉狩とかで夢中になる國民は外に見たことは無い。それほど我國民の心身は、自然美の認識に敏感な様に構成せられて居る。

植物のよく繁茂するといふことは、我國を始めから農業國にした。一體人間の文化の進みとして、先づ狩獵時代から遊牧時代、それから農業時代、商工時代と進んで来るように歴史家は言ふが、我が國民は狩獵時代や遊牧時代を経過せずに、始めから農業時代の生活を營んで居たと思はれる。それは古事記や日本書紀に、天照大神の時代に、既に農耕のことや、植林のことは見へて居るが、狩獵遊牧のことは一向見へて居ない所からも推察される。我國を古くから豊葦原瑞穂國と云つた名稱から見ても、瀆佐之男命が大神のみもとで亂暴を働いた行爲に、大神の御田に、重播し、畦放ち、溝うめなどのことをしたと言はれて居ることによりても分る。狩獵に關しては、彼の日子番能通々藝能命の御子、火照命とその弟火遠理命とが、兄の命は海幸彦と呼ばれ、弟の命を山幸彦と呼びて、兄は鱧の廣物、鱧の狭物をよく獲給ひ、弟は毛の蠶物、毛の柔物を取り給ふたが、鉤と弓箭とかへて兄は山に、弟は海に行かれたと云ふ傳説がある外、一般の人民が狩獵を以つて業としたこともなく、又牧畜に關した記事も少しも無い所から見れば、狩獵遊牧などの業務は、我が古代の祖先も知らなかつたことであらう。従つて陸上動物の名稱も、鼠、馬、鹿、兎、猪などが出て来る許りで、虎、熊、狼などの猛獸の名は見へない。これから推して見れば、我が國民は大古から農業に従事して居たものである。従

つてその食料は植物性のものが多かつたと思ふ。勿論海に沿ふて居る所から魚貝の類は多く食用に供したことは當然であらう。彼の鱧の廣物、狭物など云ふたのである。勿論毛の蠶物、柔物など、獸肉も全く食用に供しないではなかつたが、これはむしろ稀に食ふ位のものであつたであらう。日本には彼の大宰の美味である羊や牛豚の丸煮は昔から無かつた。支那で君子は庖厨を遠ざくと言つたのもその理がある。それは今日神前に供ふるものが山つもの、海つものと云ふが、野菜と魚類であると同様、今日我々の食用に、供して居るものが、獸肉は餘程少いのを見ても分る。今日では西洋の食品が入つて来て、牛肉、豚肉などを多く用ひるようになったが、婦人などは今日でもこれを好まない人が多い。昔も矢張りこれと同じであつたらうと思ふ。その常用する食物が、その國民の心身に著しい影響をもつて居ることは、肉食獸と草食獸との比較によつて明瞭である。我が國民が餘程溫和で、上下相和して今日の國體をなしたことは、これらにも餘程關係があることである。つまり我々の最も主要な一民族性は、矢張り我が自然の産物であるのである。

我國の家屋と衣服とが又歐米や支那と相違して居る。日本の建築は支那や歐米から這入つた所が多いが、その純然たる日本式のもの、今日猶神社等に見ることが出来る。衣服もこれと同様で支那、印度、歐米の風を模したものが多し。しかし日本固有の服装は、その建築と同様明け放しである。出来るだけ廣く明けて、外氣のよく這入る様な家屋の構造となつて居るし、服装にしても、脚

部でも手でも廣く開けて、自由に外氣が皮膚と直接に相接する様になつて居る。これは空氣中に濕氣を含むことが多いからだと言はれて居るが、實際さうであらう。我々は陰氣な室や、ポタンで緊縛することが嫌ひである。特に夏分がさうである。かの浴衣の寛濶な服装は何處にも見られない。しかもこれに美術的な模様を染め出して、意氣な好みを十分に現はして居る所などは、實に我が國人の氣風を遺憾なく發揮して居るものである。夏の温かい空氣の裡に、障子を開け放した新しい青疊の上に、脛もあらはに、湯上りの浴衣を引つけて、無遠慮に一杯聞こし召す、しかも煮は魚の洗ひと云ふ所が、國人の趣味に最も適して居る。かの矢一博士が描き出して居る名も紅葉館の一室に、床には花鳥の墨繪、給仕の女の衣服は、花鳥の模様を染め出した派手な若い婦人が、愛想よく取り持つて呉れる、庭には植込みに蒔き水が滴つて居る圖など、又とないよい氣持ではあるまいか。王公貴人もこの碎けた態度が何よりも好む所であらう。外國では到底この氣分を味ふことは不可能である。これこそ日本獨特の氣分である。身も心も周圍もすべてが、開け放して、しかも瀟洒な磊落な態度こそ純粹の日本人のそれである。我が國民の氣風が元來は開け放して、隠す所なく、サツパリしてゐて、樂天的な所は全くこの自然の産んだ産物ではあるまいか。勿論他の一面には莊重で、豪壯で、威儀を繕うて堂々たる威風を示す場合もあつて、これに適する態度を取ることの必要なことも、我々は知つて居て、それを實現するのであるが、それはむしろ表向きのこと、その

本心ではないと思ふ。我々日本人は堂々たる豪壯な態度外観を装ふことは不得手で、四疊半式の所がその本音であると私には思はれる。従つて微細な所によく氣がついつ緻密である。私は先年英國のリバプールであつたと思ふ。ある一流の旅館に泊つて晚餐を認めるに際し、食堂に入つた。所が少し時間が遅れて中央の坐席は既に塞がつて居て、隅の壁際に着席した。この食堂は實に堂々たる圓天井の大食堂で、例の華麗な裝飾もあつて何百人と云ふ人が這入つて居て、中央には樂團が盛んに音楽を奏して居るし、舞踊もやつて居る。食卓の人々は聴き見、且味ふと云ふ風で、眞に楽しい晚餐であつた。私はフトその壁を見ると大ザツバにペンキを塗つて柱際などの粗雑な塗り方には驚いた。日本座敷から見ると雲泥の相違である。日本人の目は細かて手も亦非常に技巧に巧みである。我が國民の手指の働きの巧妙なことは、やがてその装品の織細な點に至るまでよく注意が行き届くこととなるのである。それが爲に規模は動もすれば小くなるを免れなない。我が國民の計劃がとかく小規模に流るゝは前既に述べた通りである。これと關聯して我が國民性の歐米人の氣風と表裏相反した點は、我が國民が交際上に於ても、動もすれば矢張り四疊半式に、とかく狭い範囲内に限られることを好み、歐米人の如く大きな食堂に於て、知るも知らぬも、皆一堂に會して衆と共に楽しむと云ふことを好まないと云ふ點である。一方に於ては開け放しを好むと同時に、他方に於ては、とかく小範囲に閉ぢ籠ることを好む傾向のあることは奇と言はねば

ならぬ。しかしこれは我々が手指の動きの巧妙なるが爲、とかく細部に注意が及び、その結果として、規模が動もすれば小に失すると同じ傾向で、すべてを開放することを好むことは、未知の人にまでもこれを見られることを欲しない心理から、自然四疊半式に狭い親しい範圍に局限することを好む傾向になつたこと、と思はるゝ。しかしながら今日の時代の如く、すべてが大衆的となつて来た以上、我々も亦これに順應する外は無いが、しかしその本來の趣味は決して失はれないものだと思ふ。

第四節 美を愛する心

我が國の地形が又我々を陶冶する力の非常に大きいことも争はれないことである。元來我が國は火山に富んで居るが、それはアジア大陸の東端に位し太平洋の大陥没によりて地殻の隙を生ずべき道理である上に、又他方に日本海支那海の陥没によりて、亞細亞大陸の東端を飾る一長列島をなしたものであるから、益々その摩裂を盛ならしめたものであることは想像するに難くない。されば我國の構成は所謂火山列島と云ふ性質のものでは無いが、事實それに近いものがあると思はれる。即我が國の西南より東北に貫いた一列の火山脈と、中央を貫通する火山脈とが、相交錯して、成立せるもので、我國の高山と稱すべきものは殆ど皆火山に屬するものである。従つて海中に

屹立する圓錐形の孤島が相連続して形成したかの如き形狀を成して、山と海との距離甚近く、平野が非常に狭いのも當然である。そして四面海に圍まれて、山から流出する河水と共に自然山水の美をなしてゐる。山高く、河清く、海青くして、こゝに世界に比類のない一種特別の自然美を現出して居る。一體火山は圓錐形をなして、單なる岩塊の堆積に比すれば實に優美壯麗の觀を呈するものであるが、特にそが附近の群峰に抽んで、青空を摩するに至つては、その美觀は一層の美を加ふるものである。かの我國の鎮護として仰がる、八面玲瓏の芙蓉峯としての富士の高峯は實にその一模範である。されば古來から我が國民崇拜の靈山として、淺間神社を創設し、木花之佐久夜毘賣命を主神として勸請し、天津日高日子番能邇々藝命並にその御父大山祇神を配祀した。この靈峯に配するに何故に木花之佐久夜毘賣命を以てしたかは不明であるが、しかしこの命は、その名の示した通りに端正秀麗な御貌を以つて、邇々藝命にみあいました様に、この靈峯の姿は、實に秀麗端正な無類の秀峯であるのが、よく相一致して居る。かの歐洲の名峯であるアルプスの連山は屹篇傲牙たる岩石を以つて成り、其の性質何處までも男性的であるが、我が富士の秀峯は、美人を天の一方に望むが如く、實に秀麗端正な美容を誇るものである。しかしながら、たゞ女性的な柔弱なものではなく、神威森嚴實に犯すべからざるものがある。これこそ實に我が國民性を象徴するものがある。されば古から詩歌に詠じ、畫題に供するなど、今日に至つても猶同様である。外國の人々もこの秀

峯を憧憬して、我國に渡來する一つの目標としてゐるのである。恐らく海の内外を通ずる名峯中の隨一たるべきものであらう。この富士の秀峯が代表して居る我國の山容は至る所にこれを見ることが出来る。そしてその海岸の風光も亦これと相對して明媚で、白砂青松相映じて居るかの須磨でも、三保の松原でも、明かるい柔かさを有つた風景である。かの瀬戸内海の風光は恐らく外國には見ることの出来ぬ大美景であるが、しかもそれは矢張り明かるさと柔かさを有つた風光である。瑞西のデューネーヴのレマン湖畔の風光やチューリッヒの風光がよくこれに類しては居るが、あの柔かさと明るさの感じは出て來ない。美しい内に何處となく冷たい暗い感じがある。あの深みのある深緑の水色にも我々は同じ感じを感じる。須磨や三保の風光は我が國人には人口に膾炙して居るが、しかしこんな風光は全國至る所に見られる。それは唯廣く知られて居ないと云ふのみである。特に瀬戸内海には至る所にかくの如き風光が見られる。日本三景として古來我が國民の絶賞する所の嚴島でも、松島でも、天の橋立でも、多少の感じは違ふけれども、矢張り同じ種類の風光である。小天橋小松島も諸方に見られる。この海岸の美景に對して、又山と川との美も國內至る所に認められる。これは山と平地とが相接して、その間に高原性の土地かないので、水流が急激で、清流岩を嚙んで激湍をなし、或は淀んで深淵をなし、凄蒼の氣を漲らすなど、亦我國の地形に特有な景色を呈するものである。これを西にしては耶馬溪があり、保津川があり、木曾川が

ある。しかしこれも大文豪の名筆によりて人口に膾炙しただけのもので、無名の耶馬溪無名の木曾川は國內至る所に見られるのである。これはつまり地形の然らしめる所であるからである。湖水も亦我が國の美觀を添へて居る、その數も頗る多い。抑も湖水の成因からすれば地殻變動に屬するものが多いことは湖沼學者の教ふる所であつて、彼等は略これを四つに分けて居る。即その第一は陷落湖で地殻の陷没せる凹所に水の瀦溜したものである。彼の有名な琵琶湖の如きはこれである。箱根の蘆ノ湖もその一種火山原湖に屬するものである。第二は火山湖で、死火山の舊噴火口に水の瀦溜したもの、高く山上にある湖水で、赤城小沼の如きこれである。第三は侵蝕湖であるが、この種の湖水は我國にはあまり多くは無い。第四は堰塞湖で、かの火山から流れ出づる熔岩流や泥流が溪谷の出口を壅塞してそこに水を溜めたものや、地震の爲に生じた山崩れなどにより、又は海岸から吹き寄せられた砂丘や、河流の堆積物等によりて生じたもので、この種類に屬する湖沼も亦尠くない。かくの如く我が國は地殻變動の最も多い國土なれば、あまり大きな湖水はないが、各種の湖水がその數頗る多く、そこに山水の美をたゞへて居る。彼の琵琶湖畔にある近江八景を始めとし、富士五湖と云ひ、箱根の湖水と云ひ、近頃賣り出した十和田湖と云ひ、北海道の阿寒湖と云ひ實に山水の美を極めて居る所が非常に多いのである。

以上の如き各種の美觀に恵まれた我が國民に美的情操の發達するのは當然のことである。我

が國民の文學的趣味は太古から發して居る許りでなく、廣く國民全般に及んで居る。外國では詩人と云へば、餘程専門的に研鑽を積んだ人であるが、我國では國民すべてが一廉の詩人である。勿論外國では用語が困難であつたり、作詩の法則が六かしかつたりするが、我が邦ではそれが無い。否たとひ六かしくしようと思つても、一般はこれを背じないで、一方には、これを平易にしようとする。和歌の言葉が平民に取つて六かしくなれば、彼等は最も容易な言葉でもつて俳句を作る。音樂でもさうである。我々は今日歐米人が音樂を好むので何處にでもピアノを備へて居て、誰だつてピアノを弾くと謂つて、我が國民の音樂的素養のないことを自ら嘲けつて居るが、それは大きな認識不足である。今でもさうであるが、昔は大抵の家には三味線を備へて居た。そして婦人も男子もこれを學んで居たものである。三味線の外、笛、尺八等をも學んだものである。それが近年になつて餘程少くなつたが、それと共に近頃は都會の上流人の家庭にはピアノが多く備へつけられて來た。それはたゞピアノが三味線と代つたまでのことである。昔から音樂に關する美談佳話は澤山傳はつてゐる。中にも博雅三位の琵琶に關する事實、源義光の笙に關する事實の如き、如何に彼等が音樂に關して大きな趣味を有して居たか、窺はれる。これと共に彼の義光の事實を傳へた古今著聞集に載せた管絃舞踊の部を見れば、舞踊が如何に我が國人を引きつけて居たかも知られる。其の他繪畫彫刻に就いても、我が國民が非常の趣味と技能とを有して居たかは、今日に殘

留せる作品によりて、又歴史的事實によりて知ることが出来るのであるから、こゝに詳説する必要は無い。要するに我が國民が美術に對する憧憬は著大なるものであるが、それはその自然が産んだ最も顯著な一特質である。しかもこの美術の特質が優美であり、淡泊であり、又動もすれば小型に流るゝ傾向が著しいが、この中に非常に餘韻を存して、深味を有する所は、支那歐米就中歐米の美術品と比較すれば明瞭な事實である。それは繪畫にしても、歐米のは、油繪のゴツテリした作品であるが、我國のものは極彩色のものと雖も、その材料からして、既に明るい、淡泊な、軽い材料が使用せられ、特に墨繪の如きに至つては、最も淡泊なものである。しかし其處には無限の餘韻を含んで居て所謂瀟灑な禪味を帯びて居るし、國民も亦これを非常に愛好してゐる。彫刻に於てもこの事實が見られる。かの佛像の如き大佛もあり、又普通の彫刻に於ても、相當に大きなものも無論あるにはあるが、しかしその技術は、又小品にも多く現はされて居る。彼の根付けや、刀の鐔や、その他の小品に現はされ、牙彫りとか彫金とか稱せられるものゝ中に、其の技術を發揮して居るものが多く、これ等の作品の中には飛び付くばかりの氣の利いた作品を見ることがある。されば歐米人はこれらの小品を多く買ひ集めて大事に保存して居るのを觀て、私は驚いたことがあつた。それは私が今から二十餘年前始めて歐洲に行つた時、先づ巴里に滞在して居て、諸方の觀光をした時のことであつたが、一日ブチループルに行つた時に、この根付けや鐔の牙彫りや彫金類が無數に集められて居た

のを見て非常に驚いたのであつた。我々がかく小品を好み淡白瀟洒な作品を要求するのは、自然から養はれた一つの性情によることゝも考へられるが、又一つには國民一般がこれを鑑賞したいと云ふ要求からも來て居ると思ふ。それは文藝に於て三十一文字の和歌や十七文字の俳句が要求せられると同様、國民の總べてがその自然から産みつけられた美を愛好する心を満足せしめんが爲に、しかも大作は大金を要する所から、中々手に負ひ切れないから、小さい作品でもいゝから、これを得て、聊かその愛好心を満足せしめんとする所から、作家にこれを要求し、作家も亦この傾向を察してこれを製出したものであらう。こゝにも歐米人の心理と著しく相違する我が國民の心理とを見るべき一事實がある。今日では我國に於て博物館が諸方に開設せられて、美術品が陳列せられ、大に我々の美術愛好心を養成しつゝあることは、洵に喜ばしいことであるが、この博物館の開設を慫慂する際に、我が先覺者達が提言した言葉に、歐米人は一般に美術に對する愛好心が強く、又國家は勿論、貴族富豪もその愛藏の美術品を公開して、衆と共に鑑賞する寛大な心を有して、美術館などを開設して、國民の美術愛好心を養成することを怠らないから、國民は一層よく美術心が發達するのである。然るに我が國民は一般にこの精神が乏しく、貴族富豪も美術品を秘藏してこれを他に示すことを嫌ふのは甚だ宜しからぬことである。宜しく美術館などを開いて、從來の秘藏品を公開し、一には國民一般をして、美を愛好する精神を涵養せしめ、一には貴重な美術品を保存する

の道を講ずべき所以を論じたのであつた。これらの議論によりて、今日我國では不十分ながら、美術館が各地に開設せられて居ることは喜ばしい所であるが、著者は今日に於ては、多少この議論に抗議を呈せねばならぬと思ふ。著者も當時にありては、この議論に對して、なるほど首肯した一人であるが、今にしてこれを思へば、大に議論の餘地がある。抑我が國民は自然の恵によりて、皆等しく美の愛好者として育成せられて居るのである。されば各人は各々その力に應じ、その心に從つて美術をも鑑賞するのみでなく、これを藏して居る。如何なる陋巷の貧家にも、植木鉢の一鉢位は置いてあり、額の一枚位はかゝつて居り、床の間も形ばかりのものがしつらへてある。そしてその作品としても、小品も多く、それぞれ數寄者の心を満足せしめて居る。我が國民は美術館がなくとも猶相當に美に對する愛好心は自然に養はれて居る。この點は外國人と較べものにならぬほど發達してゐる。大作名作は寺院等で多く見られる様になつてゐる。されば國民の美術心はたとひ美術館や博物館がなくとも相當に養はれて居る。勿論美術館や博物館が設けられることは最も宜しい事であるが、歐米とはこの點聊かその選を異にしてゐる。歐米でも支那でも、支那は特にさうであると思はれるが、文化は兎角上流にのみ流れて居た。今日では教育の普及によりて、次に一般化せられて居る。この教育の點に於ても我が國はその施設は餘程後れて居たが、今日に於ては、その普及力は世界何れの國にも劣らない程普及して居る。美に對する愛好心も鑑賞眼も

普及の點については恐らく我が國民ほど進んで居る國は無いではないかと思ふ。それは今日では一は教育の力によるのであるでもあらうし、各種の施設にもよることであるだらうと思ふが、しかし自然が生んで呉れた自然性がその根柢をなしてゐる。

第五節 清淨・潔白・正直

日本の自然が生んで育て、呉れた我が國民の特質は美の愛好心に止まらない。清淨・清淨・潔白を好み、正直で信用を重んずる美質なども、こゝから出發したものと思はれる。又かの樂天でしかもキビキビした所があり、勇氣があり、不惜身命等の一連の性質も亦同じく自然の所産と見られるのである。

我國の水流が清く澄んで居るのは山地から直に平地に出るからである。雨が比較的によく、常に樹木を洗ひ清め、空中の塵埃を洗ひ去るので、雨後には一碧拭ふが如き快晴の天を見るのである。所謂山青く水清く氣澄むと云ふことは我國の自然を形容した言葉であると考へられる。この自然の中に育まれた我々が清淨を愛することは當然である。我々は他の人種から見れば潔癖とまで見ゆる位である。それほど我々は清淨を愛してゐる。我々はこれを清淨・潔白と言つて居る。富士登山の行者は六根清淨と呼びつゝ登つて行く。神は不潔を受けない。神事には先づ穢

ひ清めを行ふて後、これを祀るのである。身も心も汚塵邪惡を穢ひ清めてでなければ、神はこれを受けられない。されば神事にはすべて白いもので、汚點の最もよく分るものを用ひる。かゝる習慣の本づく所は我等の祖神たる伊邪那岐命が伊邪那美命を慕ひ給ひて、黄泉の國に至りて、そこに種々の醜穢なるものを見給ひて、その汚れを打ち拂はんとて、日向の橘の小門の櫛原に到りまして、禊ぎ穢へし給ひし故事によるものとして、すべての神事を行ふ場合には、今日にても先づこのことを述べて清め穢ひの式を行ふことが、通常のこととなつて居るのは、何人もよく知つて居る所のことであるが、これは皆我が山川河海から天候空氣に至るまで盡くが、清淨な所から、自然に養成せられた氣分であらうと思ふ。我々が冬は勿論、夏時に於ても猶温浴をなし、若くは冷水に浴することをお好むこと、到底他國民の比でないことによりても知ることが出来る。實際我が國に錢湯の多いことは、到底他の國にては見られない。そして温浴が何人にも容易く爲し得る施設になつた居る。歐米にてはそれが頗る高價であるから、労働者などには、温浴を取ることが出来難い仕組になつて居るので、小學校などに浴室を設けて兒童をして、學校で温浴をなさしめる設備をした處もあるのを、我が國でも眞似てこの設備をなして居る所があるが、これはよほど特殊な貧民窟の學校でなければ、其の用をなさないものである。それは普通の人々は毎週二三回、或は日々温浴をなすことが、市民の習慣となつて居るので、學校でこれを取らしむる必要はないからである。

温浴をなす習慣は我國に温泉が多いことも源因して居ることゝ思はれる。我國は火山國であるから、従つて到る所に温泉がある。全國の温泉地の數は幾何に達して居るか不明であるが、恐らく數千に達するのではあるまいか。しかも我々が昔からよくこれを利用すると云ふよりもよくこれを樂んだものである。道後や有馬の温泉に主上が屢々遠く京師から態々御行幸になつたことは、史上によく記載せられて居る所で、何人もよく熟知する所であるが、一般人民も昔からこれを亨樂したことは、今我々がこれを樂むのと異なる所はない。唯交通の便が開けなかつた當時のことであるから、現時の如く遠くから態々出掛けるものは少かつたと思はれるのみである。出雲風土記に、同國意宇郡忌部神戶。(今八束郡) 郡家正西廿一里二百六十步。國造神吉詞奏、參向朝廷、耽御沐之忌里也。故云忌部。即川邊出湯。出場所、在兼海陸、仍男女老少、或道路駱驛、或海中沚洲、日集成市、繽紛燕樂。一濯則形容端正。再浴則萬病悉除。自古至今、無不得驗。故俗人曰神湯也。とあつて、國造が神の吉詞を朝廷に奏せんが爲に參向する時、こゝに身を清めんが爲に、御潔をしたので忌部と言つたとあり、そして國人多く集まつて入浴するので市をなすと言はれて居るほどである。又同じ風土記に海水浴のことも記してある。序なれば引用して置く。即島根郡前原崎(今八束郡)云々。即坡與海之間、東西長一百步、南北廣六步。肆松蔭蔚。濱鹵淵澄。男女隨時叢會、或愉樂歸、或耽遊忘歸。常燕喜之地矣とある。別に海水に浴することは書いてはないが、海濱に青松蔭蔚とし

げり合ひ、その下の海は澄んで淵をなして居る。そこに人皆集まつて燕樂するのである。春の終から秋の初めにかけての享樂地である。何で海水に浴せざるの理あらんやである。昔も今も別に異なる所は無いが、今は民度が進んで、衛生思想等も發達して、多く海邊に集るに至つたゞけの相違である。

以上述べた如く、我が國民が自然の環境によりて育まれて、非常に身體の清潔を好んだことが、推察せられるのであるが、この身體の清潔はやがて、精神の清淨潔白となつて現はれ、精神上の不潔から起る各種の罪罰災害をも祓除する。即道徳上法律上のすべての罪罰を祓ふのであるが、それは禊として打ち拂ふのである。禊と祓とは別事であるが、禊して祓除するのである。以前夏の祭の一つとして禊をなしたのは、かの禊ぞ夏のしるしなりけりの歌によりて知らるゝのである。これは川の端にて行つた祭事である。かく禊を重んじた結果として、かの禊教が神道の一派として生れ出た程である。禊教と云ふのは井上正鐵の創唱にかゝるもので、その意見によれば、何人も罪穢のないものは無いが、これを清むるには祓禊あるのみだと云ふのである。かの大祓の神事は六月と十二月とに行はるゝのである。それには別に禊をして祓ふ旨は記しては無いが、罪過の消滅する順序が、河から運んで海に入つて無くなるのであるから、自然その中に祓の意を含んで居るものではあるまいかと思はれる。世間一般も祓と禊とは殆ど同じ事だと思ふのが普通の様である。大

祓の祝詞によれば、人間には天つ罪と國つ罪とがある。これら無數の罪過も祝詞を宣ふれば、天つ神も國つ神もこの祝詞を聞き給ふのであらう。すると速川の瀬に居る瀬織津姫が、これを海の中に運んで行く。そこに速開津姫と云ふ神があつて、この罪過を皆呑んで仕舞ふ。次には氣吹戸主と云ふ神があつて、かく呑んで仕舞つた罪過を、根の國、底の國に吹き散らして仕舞ふ。根の國、底の國には速佐瀨良姫と云ふ神があつて、そこへ持ち行き、遂に無くすると云ふのである。まことに川と海との國とにふさはしい祓の言葉である。かくて天下四方には當日から罪過と云ふ罪過は皆消滅する。そしてこれを大川道に持ち運び、祓ひやるものは四國のト部達である。

清淨潔白を好むは實に日本人の特質で、そしてそれは矢張り自然の育んだものであることは以上述ぶる通りのことである。そしてそれは衛生上にも最も適して居るが、しかしこの點に至つては、我が國はまだ十分では無い。それは單に清淨潔白を好むと云ふのみでは不十分である。科學の研究と大きな施設とが伴はなければならぬ。それには道路や上下水の施設などが必要であるが、これには多分の費用を要するから容易に實行することは出来ない。我々のこの特質はやがてこれ等の施設をも完備せしむるに至るであらう。今日に於ても我國の衛生設備は頗る發達して居るとの評であるが、根本的にはまだ不十分なるを免れない。

清淨潔白と關聯して一言すべきは正直と云ふことである。我が國人が果して他の國民よりも

正直であるかどうかと云ふことは俄かに肯定することは出来ないと思ふ。實際種々の點に於て我々日本人として不正直な點がある。例へば納税にしても所謂胡麻化して少額にすると云ふことは、ある部類の人々には平氣で行はれて居る所である。其の他種々の事相について見れば、我々は決して正直な國民とは言へぬ。たゞしかしながら何れの國民にありても、全然虚言詐を言はぬ、行はぬと云ふ國民は無いから、我が國民がどれほど不正直な國民であると云ふことは言へないが、とにかく特に勝れて正直な國民と稱することは出来ないと思ふ。これは實に遺憾とする所であるが、しかし事實は事實である。これを曲庇することは出来ない。清淨潔白を好む國民としてはこの點よほど不釣合な所がある。

第六節 變化

日本國內を汽車で旅行することは恐らく世界の旅行者に取りては一番愉快なことであらうと思ふ。風物が始終異つて居て送迎に邊が無いと云ふ程である。山笑つて迎へるかと思ふと、水悦んで送る。人家の點々として指摘すべきものがあるかと思へば、よく耕へされた耕地が見へる。春には至る所に花笑つて媚を呈するかと思へば、夏には深緑の色濃きを望み、秋には紅葉あり、冬には白雪を見ると云ふ風に、千化萬狀常に變化を呈して居る。これを外國の旅行に比べると著しく

變化に富んでゐる。日本の汽車旅行は旅行そのものがすべて景勝地の觀光旅行である。これを大陸の汽車旅行と比較すれば著しく違つて居る。例へばシベリヤ鐵道の旅行や、以前の奉天から北京天津に至る京奉鐵道や、米國の横斷線や、デンマークからオランダ・ベルギーを通過する線など、始終同一の風光に接するのと比較すれば實に雲泥の相違である。これはつまり我が日本が小さな島で、殆ど全體が山から出來て居り、海洋がこれを取圍んで居て、平地は極めて少く、可耕地は面積の僅かに四分の一に過ぎないと云ふ状態を物語つて居るのである。スウキスの旅行が日本の旅行とよく似て居る所があるが、彼には海洋の水景を見ることが出來ないで、僅かに湖沼の水を以てこれに代ゆるに過ぎない。私は嘗て以前の京奉鐵道によりて奉天から北京に旅行したことがある。波状をなした大平野の風光に飽いて居た際、遙かの向ふに一土民の驢馬に乗つてトポトポと道行く姿を見た。その時私は思つた。かゝる廣い野原をあつて驢馬に乗つてトポトポと道行く支那の人々が、氣が長くなるのも尤だ。支那の騷亂は十年廿年續くも無理はない。彼等は敢へてこれを苦にしないのである。こんな土地に住して居ては、氣が長くなければ生活が出來ないので考へたことがある。その後北京今の北平に着いて、今日の支那の騷擾も五十年を経なければ統一は出來まいと或る人に言つた。所がその人の曰くだ。ナニ五十年？五十年所か、恐らく二百年経つても統一する所はあるまいと言つたことがあつた。我々日本人がサツ

サと事を捌いて行つて、テキパキと仕事をやつて行くのは、實に日本の地形そのものと同じだ。そして絶へず異つた風光に接する如く、絶へず新奇な事物に接しなければ氣が濟まないのである。一方から言へば、進取の氣象に富んで居るけれども、一方から言へば、一般には何となく浮華輕佻の風があつて、重厚の氣風に缺けた所がある。元來溫和な性質であるが、一方には山嶮はしく、水急なる所があつて、性急果敢、突差に事を決する特質を有して居る。加ふるに我國は火山から成つて、今猶多くの活火山を有し、地震は全國至る所に起つて居て、時としては大害を與へて居ることは言ふまでもない。かくの如き自然がその中に生れ育まるゝすべての生物に影響を及ぼさぬ筈はない。我が國民が機敏ではあるが、前に言つた通り、性急果敢突差に事を決する特質を有するのみでなく、死を恐れず、勇敢な戰士たるの資質を有することも、洵に當然であると思はるゝのである。彼の爆彈三勇士の如き、旅順の閉塞隊の如き、平壤の玄武門の破壊の如き、日清日露の戰場に於ける忠勇美談は數限りもないほど多く史乘に散見する。古くはかの調伊岐灘が新羅王我が臀肉を噉らへと叫んで殺された事實の如き、又かの膳臣巴提便が虎を手にて殺せし事實の如き、織田信長がよく寡兵を以て桶狭間に今川義元の大軍を破りし如き、其の例實に枚擧に違ないのである。日本書紀には膳臣の言を次の様に述べて居る。

膳臣巴提便還、自百濟言。臣被遣使、妻子相逐去。行至百濟濱。日晚停宿。小兒忽亡、不知所之。

其夜大雪。天曉始求有虎連跡。臣乃帶刀擐甲、尋至巖岫。拔刀曰、敬受絲綸勅、勞陸海、掃風沐雨、藉草班荊者、爲愛其子、令紹父業也。惟汝威神愛子一也。今夜兒亡。追覓至、不恐亡命、欲報爲來。既而其虎進前、開口欲噬。巴提便忽申左手執其虎舌、右手刺殺。剝取皮還。

この勇氣果敢の氣象は武士道に於て最もよく現はれて居る。日本武士の切腹は、「はらきり」と云ふ名稱を以て、歐米人には最も驚異せられて居る。實際腹を切つた上、その臟腑を掴み出して壁にぶつつける杯は、歐米人の驚くのも尤のことである。武士はその身命を主君に捧げて居る以上、何等恐るゝ所のものも無いのは當然のことである。

勇氣果敢の氣象は、當然樂天洒落の境地に導くものである。蓋人間が最後の場合を覺悟すれば、そこに心情の和平を生ずる。人生を五十と見、これを夢幻と觀ずれば、こゝに無限の勇氣を生じて、信長をして勇躍、よく寡兵を以て今川の大兵を撃破せしめた。この氣象はやがて樂天洒落の境地に導く。これが他に對する活動の場合には勇氣となり、自ら自己を律する場合には樂天洒落となる。日本人はよく覺悟と云ふ。覺悟はよいかと問ふ。この覺悟なるものは即その到達すべき境地を自覺することである。何日如何なる事件が起つて、その身命を主君の爲に捧げねばならぬ武士に取りては、この覺悟は最も必要である。「悟り」を以て第一の要諦とする禪學が日本に来て、武士の間に最もよく行はれたのは、つまりこれが爲である。禪は不立文字である、直指人心である。色即

是空である。法界は皆空と悟すれば、五十の人生は夢幻である。これを夢幻と觀ずれば、如何なることでも爲し得ないことは無い。こゝに無限の勇氣が発生し、これと同時に樂天洒落な和平な心境が現出する。こゝに日本獨特の茶道が起る。日本の茶道は世界一品である。何れの國にもこれに匹敵すべき幽玄なものは見出されない。直に樂天洒落の極地である。戰國武士がこれを受したのも當然である。秀吉が最もこれを受したことは何人もこれを知つて居る。彼は簡素幽玄な茶道を愛して、千利休などを寵したが、一面又豪華壯麗な狩野永徳の畫風を愛し、聚樂第大阪城等に描かしめ、所謂桃山時代を現出せしめた。彼の藝術的趣味はかく正に相反した様に見へるが、それは決して相反したものでは無い。活動的の方面では勇氣果敢の氣象を標榜した桃山時代の畫風を愛したものである。これは武士として當然のことである。されば永徳は信長にも愛せられ、信長が安土城を築くや、永徳に命じて、城中の障壁に畫かしめた。時人これを評して「天下無雙の壯觀也」と言つたと云ふことである。永徳の筆力の雄健なことは、彼の御物唐獅子の圖を見ても、一見して知らるゝ所である。信長秀吉の如き當時の卓越せる武將がこれを受せしことは固よりのことである。然るに秀吉が他面簡素幽玄を旨とする茶道を愛したのは、眞に矛盾のように思はるゝが、それは決してさうではない。眞の勇氣は萬法皆空と覺悟する所に起ると同時に、これを靜境に處する時には、そこに又樂天洒落の氣分が生れて来る。茶道は實に和敬靜寂を主として、そ

の奥義は悟道に存し、これを一つの藝道となしたものは、實に南都稱名寺の珠光と云へる一禪僧であつた。それは實に靜閑簡素幽玄樂天的な趣味である。秀吉の英敏なる此の兩方面を併せ得たものである。しかも彼は現實の活動に於ては國內の平定のみならず、更に朝鮮支那を併合せんとする雄大な希圖を有して居たのである。我が國人にこの樂天洒落の氣風の多分に存することは、茶道ばかりでなく、その他の藝術の方面にも十分に現はれて居る。かの一九の膝栗毛の如き圓轉滑脱の妙を極めた滑稽文學で、しかも機智縱横で才氣が喚發して居る。これと共に繪畫の方面に於ては鳥羽僧正覺猷の所謂鳥羽繪の如きものとなつて現はれて居る。これらは同じ樂天的氣分に屬して居ても、むしろ奔放な氣分が勝つて居て、かの茶道とは餘程かけ離れて居るようであるが、矢張り同じく樂天的氣分の下に始めて出来るものである。例の芳賀博士の國民性十論には面白くこのことについて記述してあるから、そんな文献上の事實は博士の流麗な筆に譲つてこゝには略して置き、私は自分の本分に歸つて、こゝに我が自然界について考察する。

我國の自然は非常に變化に富んで居るが、一方その規模は極めて狭小で、従つて全體としては極めてまとまりがよい。支那やロシアと比較すれば、殆ど比較にならない。アメリカと比較しても又雲泥の差である。今日の滿洲國は支那の一小部分に過ぎないが、それでも今日廣くなつた日本の約三倍ある。この國土の狭小と云ふことは又我々の性質に非常な影響を及ぼして居る。日本

人のやることを爲すことは皆規模が小さい。露國人や米人の企劃は何でも規模の大きいことが特色である。曾て日露戰爭の時に、露國から大連を譲り受けたが當時皆その企劃の大規模なるに驚いた。市街の構造と云ひ、築港の施設と云ひ、その大規模なるには、皆驚いて仕舞つた。しかし今日となつて、滿洲の繁榮はこの大規模も決して廣大とは見られぬまでに繁榮したのである。しかし始の内はあまりに大規模と思はれた。それほど日本人の企畫は小さい。されば大抵のものは皆後になつて小さくなる。その一番宜い例は鐵道である。日本の鐵道は狭軌であつて、荷物の運搬力も少いし、轉覆し易く、従つて十分の速力を出す譯には行かない。近年これについても研究の結果、大分速力が早くなつたが、それでも最大速力が六十哩位である。で先年廣軌に改造すべしとの議論が多かつたが、しかしこれを改造するには莫大の費用を要し、且一時に改めなければならぬ等の理由で遂に沙汰止みになつて居る。恐らく今後とも改造は六かしいであらう。元來人間そのものが小さい。但し人間が小さいからと言つて、決して何も出来ないと言ふ譯では無いが、とにかく人間までが小規模である。そしてコセコセして居る。これは狭い島國に多くの人間が住んで居て、生活がセチ辛い爲でもあるが、コセコセして居てユツタリと大まかな所が無い。これを米國人あたりの氣風と比較すると著しい相違である。米國人は何でも大まかである。先年米國を視察した時、所謂無駄排除の運動が盛であつたが、しかしその時だつて、我國と比較すれば、比較にならぬ

ほど無駄が多かつた。これは資源に富んでゐるから、そして大工業で多量生産をやるし、一方には土地の面積に比較して人口が稀薄であるから、自然人間が大様に出て来る。或日本人はアメリカを禮讃して、乳と蜜の流るゝ國だと言つたことがある。労働者も相當に遇せられて、所謂労働運動などの起ることは稀であると言はれ、彼等も亦銀行を有つてゐると言はれて居て、共産黨などは盛んにならない。唯近頃の世界大不景氣の爲に、處々に労働運動が行はるゝに至つたようであるが、概して言へばその運動は穩健であると思はれる。支那に於てもこれとは異つた意味でよほどのんびりした所がある。十數年前私が支那に旅行して北京に滞在して居た時のこと、旅宿の日本女中に日本に歸りたくありませんと答へたことがある。これは無智の少婦人の言葉ではあるが眞實を語つて居ると思ふ。それは、支那の如き政府の力の弱い、そして大抵のことは自治によりて行はれて行く國では、凡てのことが大まかでユツタリしてゐる。それに物價も土地のものを用ひさへすれば、極めて廉價であり、従つて生活も安易である。ユツタリした生活が出来る筈である。これに比すれば我が日本人が所謂かの四疊半式であり、又茶の湯には二疊式もあつたのであるが、すべてがコセコセして居るのは我々の特徴である。これは我々としては何ともすることは出来ないことであるが、今日のように世界的進出をなす際には大に心すべきことである。今少し大膽に大

きく、ユツタリとした氣分を有つて行くことに心がけねばならぬ。

第七節 團 結

しかし物には一長あれば一短があり、一短あれば一長あることは人事の免るべからざる所である。日本人がコセコセしてゐる所には、又他の一面に大きな長所を有つてゐる結果であることに注意しなくてはならぬ。それは我が國では善事があれば、すべてこの國民にこれを分つと云ふこと、即平等の原則が自然に行はれてゐると言ふことがある。フランス革命の際には、自由平等博愛の三つをモットーとして戦はれたのであるが、我が國には上古からこの平等の原則が存して居たのである。今茶道について述べたから、私は先づこれについて一言しよう。茶道の第二の祖としては紹鷗が擧げられて居る。紹鷗は茶道を廣く一般に普及させんとして、茶道に眞行の二つを作つた。それは珠光の立てた茶道の法則として、柳營十八疊を四分して、四疊半と云ふのが正式であるが、かくては誰にもこれを實行することが出来ぬので、山里の二疊の式を立て、珠光の四疊半を眞とし、この二疊を行とした。又佗草庵なども造つた。用具に於ても支那渡來の珍品を用ひることは、徒らにその價を高くして何人もこれを手にすることが出来ないので、新たに茶具を作るなどのことをして、その普及を圖つた。又第三祖は有名な千利休であるが、彼は茶式臺子の莊嚴鄭

重にして下流に適せざるを以て、これを改めて、露地草庵の制を剋めて、上下貴賤皆これを樂むを得ることゝした。かくて茶道は一般の好尚となるに至つたのである。しかしこれは茶道のみに限らない。すべてが皆出来るだけ一般に通ずることを旨として行はれたものである。かの武士道は社會の上流階級に行はれた制度であつたが、これに對して民間には俠客なるものが行はれた。昔の歌は長歌が多かつたが、誰にも容易にと云ふので、次第に短歌が行はれるようになり、その短歌も用語が一種高尚優美な堂上の人々の多く用ひるものに限られて來ると、今度は自然に、發句俳諧となり、川柳柳樽と轉化して、短い十七文字で、しかもどんな無學な人でも詩想さへあれば、詠み得る俗語が自由に使用せられるものとなり、酒屋の番頭でも、肴屋の亭主でも玩ぶことが出来るようになった。教育の如きも幕府や藩の學校で平民の學ぶことが出来ない所には、所謂私塾が出來て、町人百姓もそこに學び得ることゝなり、又寺子屋なるものが生れて、平民の子供も學び得る道が開かれ、心學道話なども行はれて、聖賢の教が普通一般の俗人の耳にも入り、俗事についてその教を應用して行く道が講ぜられた。特に今日の學校は四民平等で、華族さんの子供も、大臣宰相の子弟も、皆小學中學に學び全然同等である。やんごとなき竹の園生の末までも、平民の我々共と同じ學校に學ばせられると云ふ有様特權階級とか富豪とかでなくては入り得ない大學にも、夜間大學まで出來て、心さへあれば何人も大學の課程を修め得ることゝなつて居る。そして我々平民も亦出來る

だけ、これ等上流の人々の爲す所のことをやつて見ようと云ふ氣概が充分にある。だから教育の如きもよく普及する。今日我が國ほど教育の普及した國は、ドイツを除いては外にはない。しかも義務教育を創始したのは日も尙淺いことである。日本の文化は全體の文化であるが、これを支那の文化と比較すれば、こゝにも雲泥の相違を見るのである。支那の文化は上流文化である。下流は殆どこれに關して居ない。支那では讀書人と云へば一般上流の人々で、それらの人々によりて、その文化が形成せられて居る。國民の大多數は無學文盲である。今より少し以前は文盲者が九割以上で残りの一割足らずが、所謂讀書人で、政治にも、教育にも、文藝にも與つて居て、他の大部分の所謂大衆はこれに與らない、全然無知蒙昧であつた。近頃になつても、普通の教育を受けたものは四割に達して居ないであらう。特に苦力と稱せられる勞働者の如きは、殆ど人として遇せられて居ない有様である。今から十數年前北支那饑饉の際、私は教育の救済義捐の金を持つて北京に行つたことがあつた。その時の窮民の慘狀の如き、實に見るに忍びないものであつた。日本人としては、到底これを看過することの出來ぬものであると感じたのである。ヨーロッパの如きも、日本の様に平等ではない。そこで平等が強く叫ばれる。貴族の學校と平民の學校とは違つて居る。英國で有名なイートン學校や、ラグビーや、ハローなどは皆貴族の學校である。以前は教育は貴族のみが受けて居たが、近頃に至つて漸く一般平民の學ぶ學校が出來た。従つて小學校でも公費を

以て支辨せられて居るものは、貧民の爲の學校である。これはドイツでもフランスでも同様である。ドイツには近頃グランド・シュールが出来たが、これは四年修業で、以前の我が國の簡易小學校のようなものである。この小學四年の間は、貴族も富豪も平民と同様に、同じ基礎的教育を受けねばならぬと云ふので、基礎學校と名づけたのである。それには大に日本の小學校の制度が取り入れられて居る。即日本では小學校に於て、貴族富豪皆一様の教育を受けて、同一の學校に學ぶから、この間に上下の區別が忘れられ、貧富の差等を度外視されて來るので、他日階級闘争が大に緩和せられると云ふ所から、このグランド・シュールの案が立てられたのである。かくの如く日本ではすべてが、一般大衆に普及せしめようと云ふ所が大にあるので、そこに細かいコセコセした面倒な所が自然に出て來るのであるが、これは又已むを得ぬ所である。

我が日本人が狭い國土に密居して居る所から來る特徴を見逃がしてはならない。それは一致團結の力の強いことである。日本の國土は狭いので、まともには非常によく、我が皇室を中心としてすべてが一致協力して努力することは實に又著しい特徴である。古來日本ほどよくまとまつた國は他には見當らない。これが爲によく國土を守護して未だ曾て寸地をも失つたことはない。元寇の役には東國の兵もこれに参加して居たのは勿論であるが、平時に於ても大宰府には東國から兵士を送つた。これは史乘にも見へ、又萬葉集中にも、遠江相模駿河上總常陸下野下總武藏等の諸

國から送られた防人等の歌が十首二十首と載つて居る。かく古來から日本全國が協心戮力の結果、全國民一國となつて國家を守護し皇室に忠誠を盡して來て居る。かくの如く古昔に於て、全國民が協同一致した事實は何れの國民にも見られないであらう。唯不幸にして藤原氏時代平安朝に於て、朝紳京官の力が弱くなり、全國を統一することが出来なくなつた爲に、武門政治の出現を見るに至り、封建政治の現出となつたのであるが、それでさへも外敵と云へば、かの元寇の役の如く、京都と鎌倉とが一致して國家の守護に任じたのである。今代の如く、全國統一の政府の下に交通の便が大に開けた時代に於ては、更にこの傾向が一層強力となつて來たのは當然のことである。日本國民のこの性質は同一民族の大中心として、皇室が歴史以前から嚴乎として存在し給へるによることは無論であるが、その地勢によるものであることも亦疑ふべからざることである。特に四面環海舟行の便よろしく、これが大に統一を助けたことも争はれぬことである。これは支那國民と全然相反した性質であることは我々の深く注意せねばならぬ所である。前に述べたように、支那の國土は非常に廣大であり、従つて交通の便は宜しくないでこれを統一することは非常に困難である。それに民族も亦異つて居るし、言語も同一でない。これを一丸となすことはよほど困難である。されば支那に於ては、中央政府の威力は、政府所在の地方にのみ行はれ、邊疆にありては常に何等かの紛擾があつた。されば各地方は自ら自力を以て守つて行かなければならないよう

に習慣づけられて居る。支那人の自治的な力は到底日本人の及ぶ所では無い。我が國人は政府の威令よく行はれて、その保護が行き届いて居る所から、兎角中央政府の力に依頼する希望が強く、政府も亦好んで地方の面倒を見てやつて居る。我が國民が自治の能力に乏しく、又官僚の力の強いのはかくの如き長所に伴ふ一缺點である。我々は全然これを矯正して支那人の如く自治的能力ある國民になれと云ふのは、それは一面に於て一致團結の力を弱くせよ、中央政府の保護を撤廢せよ、否甚しきに至つては皇室中心の唯一無二の國體を葬れと云ふ亂暴極る思想と言はなければならぬ。我國民の幸福は實にこの皇室を中心とする血族的信念による一致團結の力によるものである以上、自治の力のある程度迄は弱いことも、我慢しなければならぬ。唯我々は今日この一致團結の力は、自立の力の強いことによりて強められるものであることを考へて、教育上深く考慮せねばならぬ問題である。

我が國民の一致協力性の強いことは、又今日に於てある方面に多大な障礙を來たしつゝあることをも注意せねばならぬ。これは海外發展に就いての問題である。我が國民は年々百萬に近い人口の増加をなしつゝある所から、海外移住によりて多少なりとも、その増加を緩和せんと欲し、官民共にこれを奨励しつゝある今日の現状である。しかし實際に於ては、この移住民なるものによりて、この窮狀を救済するに足らないことは明瞭である。それは年々の移民の数は僅かに萬を越

ゆるに過ぎないのみでなく、歸國移民も相當にあるので差引増加人口の百分の一にも達しないのである。即昭和元年から同八年に至る移民累年表を示せば次ぎの通りである。(毎日年鑑による)

昭和元年	移民數	歸國移民	差引
一	一六、一八四人	一四、五四九人	一、六三五人
二	一八、〇四一	一四、七三五	三、三〇六
三	一九、八五〇	一五、〇〇四	四、八四六
四	二五、七〇四	一四、〇七三	一一、六三一
五	二一、八二九	一四、五四六	七、三四六
六	二〇、三八四	一二、九六五	七、四一九
七	一九、〇三三	一三、一七〇	五、八六三
八	二七、三一七	一四、一四一	一三、一七六

かくの如く移出民と歸國移民とを差引けば、海外に止まるものは極めて少數であることはこれによりて知られる。即ち一萬以上残留せし年は昭和四年と八年の、二ヶ年に過ぎない。されば今日海外に残留せる移民並にその他の用務にて海外に滞留せるものを合するも、昭和八年十月一日の現在にて、僅かに九一八、一七七人に過ぎない。その内十萬以上の在留國は關東州の十三萬七千

餘人滿洲國の十八萬二千餘人、北米合衆國本土の十萬三千餘人、布哇の十四萬九千餘人、ブラジルの十五萬七千餘人に過ぎないのである。勿論移民の送金額は年々二千萬圓以上を越へ、多少にても海外支拂を軽減することの出来ることも考慮すべきであるが、一般から言へば、移民によりて我が人口増加を緩和せんことは事實不可能なことである。たゞしかしながらこれによりて、我が國人の海外雄飛の機運を増長すること、その氣分を鼓吹して、貿易に資する所の甚大なるものがあることは確かである。移民が移住地に於て日本品を用ひることが、たゞ自己のみでなく、移住國の人民にも次第にその品物の使用を奨むる結果ともなり、又移住民以外の人々の往來も多くなつて、自然その間に貿易促進の機運を助長するに至ることは疑ふべからざることである。されば移民によりて、人口増加を緩和せんことは、到底不可能であると思はれるけれども、それ以外の利益を暗黙の間に齎らすものなれば、我々は猶移民問題には多大の關心を有すべきものであると信ずる。然るに我が移民に關して障礙となるべき一つの大きな問題は移住國に於ける日本移民が集團をなし相團結して、移住地の國民並に他の國民とも實際少く、従つてその國民に同化せんとする意志の極めて尠いことである。これは米國に於ても問題視せられ、ブラジルに於ても排斥の口實を與へつゝあることは、同國を視察せる人の報告によりて明瞭である。かの移民の歸國數の多いことも亦これとその原因を同じくすることと思はれる。要するに我が國民の一致團結の力の強いこと

は、慥かに我が國に取りて一つの美德であることは言ふまでもないことであるが、他面この種の缺陷あることも覺悟しなければならぬことである。

以上述べ來つた各種の我が國民性は主として、我が國の自然の環境によりて、先天的に生み出され、或は後天的に育くまれた特有の性質であつて、我々はこれを如何ともすることが出来ないものである。そしてそれは我々に取つて實に貴重な美德であると同時に、又我々に取つて有害である場合も尠くないのである。前に述べたように、人事上のことは、一利一害は免れないものであるから、決してこれを悲觀せず、教育上なるべく利を多くして、その害を軽減することを考慮しなければならぬ。たゞ採長補短と云ふことは、事實上行はれ難いことで、強いて他の長を採りて我が短を補はんとする時は、遂に我が長所をも失ふ恐れがあるものであるから、このことをよく心得て、教育上適當の方法を取るべきである。

第八節 自然の大道

以上縷陳したように、我が國の自然は、日本人と云へる特殊な性格を有して居る民族を生み、これを育んで來、又日本文化と云へる特殊な文化を生出して居るが、その日本人は亦自然に親しみ自然に従つて生存して來て居る。この特性は亦我々日本人に取りて最も必要なもので、我が國體の重

要な基礎をなすものである。この思想を創見したものは、かの加茂真淵や本居宣長等の一派の純國學者達である。これらの人々は日本古代の文獻を研究して、遂にこの思想に到達したものである。その思想と云ふのは我々日本人の文化は自然に従つて發展するものであつて、故意にこれを鑄造したものではないと云ふのである。特に加茂真淵はその名著「國意考」に於てこれを詳述してゐる。真淵は國意考の第一に「儒者の愚」と云ふ題目をかゝけて、「ある人のわれは歌やうの小き事を心とはし侍らず。世の中を治めんずる漢國の道をこそと云ふ」と云へる言葉を取つて、漢國の道が果して世の中をよく治め得たるか否かを、彼の國の歴史に徴して、實際漢國はよく治つた時とは無かつたことを指摘し、我國にても儒道が渡り來つる後になりて大きな争亂が起つたものであることを論じて後、儒道は小さき理屈をよく論ずるものなれば、人心自らこれを信ずる様になるものなれども、實際はそんなに行くものではなく、自然に出で來ん道こそ眞の道であることを論じて、

かくの如く世々に亂れて治まれることも無きに儒てふ道ありとて天が下の理を解きぬ。げに打聞きたるには、言ふべう事もならざるべう覺ゆれど、いと小く理りたるものなれば、人の疾く聞き得るにぞ侍る。まづ物の専らとするは世の治まり、人の代々傳ふるをこそ責め。さる理りありとて、生きてある天が下の、同じきに似て異なる心なれば、うはべ聞きしやうにて、心に

聞かぬこと知るべし。しかるを此の國に來り傳へては、唐國にては、此の理にて治まりしやうに解くは皆空事のみなり。」云々

と言ひて儒者の愚を笑ひ、「この國は、天地の心のまにまに治め給ひて、さる小さき理りめきたることの無きまゝ」と言ひ、

凡そ世の中は、荒山荒野の有りか、おのづから道の出で來るが如く、こゝも、おのづから神代の道ひろがりて、おのづから國につけたる道の榮えば、天皇いよいよ榮えまさんものを、かへすがへす儒の道こそ其の國を亂すのみ。こゝをしもかくなし侍りぬ。しかるをよく物の心をも知らず、おもてにつきたゞかの道をのみ貴み、天が下治まるわざと思ふは、まだしきことなり。

と論じ、

凡そ物は、理に説かるゝことは、言はゞ死にたるが如し。天地と共に行はるゝおのづからの事こそ生きて働くものなれ。萬の事をも一わたり知るを惡しとにはあらねど、やゝもすればそれには偏るは、人の心の癖なり。知りて捨つるこそよけれ。

と云ひて、我國の道は天地自然の道なれば、大きく、力強く、自然に行はるゝことを説きたり、中々の見識と云ふべきである。更に第二章には「皇國の古」と云ふ題目にて、「或る人のいふ。むかし此の國には同族を妻として鳥獸と同じかりしを、唐國の道渡りて、さる事も心し侍るが如く、よろづ儒に

よりて善くなりぬ」と云ふ言葉を取りて、その愚を指摘して居る。これは彼の大宰春臺の「辨道書」に支那の儒者の勝れ、我國のこれに及ばざるを極論せるを駁したものである。春臺はその辨道書に

日本には元來道と云ふこと無之候。近きころ神道を説く者いかめしく我國の道とて、高妙なるやうに申し候へども、皆後世に言ひ出したる虚談妄説にて候。日本に道と云ふもの無き證據、仁義禮智孝悌の字に和訓無く候。凡そ日本に元來有る事には必ず和訓有之候。和訓無きは日本に元來此の事無き故にて候。禮義と云ふこと無かりし故に、神代より人皇四十代のころまでは、親子兄弟叔姪夫婦になり給ひ候。その間に異國と通路して、中華の聖人の道此の國に行はれて、天下の萬事皆中華を學び候。それより此の國の人禮義を知り、人倫の道を覺悟して、禽獸の行をなさず、今の世の賤しき輩までも、禮義に背く者を見ては、畜類の如くに思ひ候は、聖人の教の及べるにて候。日本の今の世を見るに、中華の昔に及ばずといへども、天下は全く聖人の道にて治まり候と存じ候。日本の神道はまた小さき道にて、政を助くること能はず候。畢竟諸子百家も、佛道も、神道も、堯舜の道を戴かざれば、世に立つこと能はず候。されば中華の古代も、日本の今の世も、天下はいつも堯舜の道にて治まり候。諸元百家を學ぶ者も、僧尼も、巫祝も、皆悉く王者の民にて、王法の外に出づること能はず候。もし國家を治むる人、堯舜を學ば

ずして諸子百家を喜び、或は佛道を好み、或は神道を好むは、その國家の亂るゝ場にて候。とあるを駁したものである。眞淵は今の儒者輩が、儒教を無闇に有り難がるを慨して、「いかに同姓妻らずなど教へのこまかなること善しとて、代々に位を人に奪はれ、かの卑める四方の國々に取るゝやうのことは如何に」と、立派な細かな教では天下治まらぬことを末だ思ひ知らぬ愚かなる心として彼等を罵り、しかも色々の定めあれば皆これが實行せられる如く考へて居たことの愚なるを笑ひ、

物は所につけたる定めこそ善けれ。ざるには年々に榮え給ふを儒の渡りて、やうやう亂れ行きて、終にかくなれること上に言ふ如し。

と言つて、我國に儒教渡來後の亂れを指摘したるは至極尤のことである。

そもそもかしこにも、いと上つ代には、何の事か有りし。その後、人の作りし事どもなれば、こにも作り侍るべき事と思ふにや。人の心もて作れることは違ふこと多きぞかし。かしこに物識れる人の作りしてふを見るに、天地の心にはねば、その道用ひ侍る世は無かりしなり。因りて老子てふ人の、天地のまにまに言はれし事こそ、天が下の道には叶ひ侍るめれ。そを見るに、かしこも、ただ古は直かりけり。こゝも、ただ古は直かることは、右にいふ歌の心の如し。古はただ詞も少く事も少し。事少く心直き時は、むづかしき教へは用無きことなり。教

へねども、直ければ事行くなり。それが中に人の心は様々なれば、悪き事あるを、悪き事も、直き心よりすればかくれず。隠れねば、大いなる事に至らず。たゞその一日の亂れにてやむのみ。因りて古とても善き人の教へ無きにはあらねど、軽く少しのことにて足りぬ。たゞ唐國は、心わろき國なれば、深く教へても、おもては善きやうにて、終に大いなる悪事して世を亂せり。此の國は、もとより人の直き國にて、少しの教へをよく守り侍るには、た天地のまにまに行ふこと故に、教へずしてよろしきなり。

眞淵はかの仁義禮智信の如きは「凡そ天が下に、此の五つのものは、おのづから有ること、四時をなすが如し。天が下の何處にか、さる心なからむや」と言ひ、それらは自然の道にて、何も別に異とするに足るものではない。「それを人として、別に仁義禮智などと名づくる故に、取ること狭きやうになるぞかし。たゞさる名も無くて、天地の心のまゝなるこそよけれ」と云ひ、何處までも自然の姿のまゝにてありたい意味を強調して居る。「凡そ天地のまにまに、日月を始め、おのづから有る物は皆丸し。」と言つて、物事は何でも丸きがよしとして、「此の丸きを本としてこそ治まるべけれ」と言つて、何處までも古代の素朴單純なるを貴んで居る。されば彼の老子が、道道とすべきは道にあらずと云ひ、大道廢れて仁義ありと云ふ自然主義を、皇國の古道なりとして、こゝに却つて大道の行はるべきを力説して居る。

本居宣長は「直毘靈」に於て彼れの日本哲學を闡明せるが、その説明を三章に分けて居る。第一は神道と儒教、第二は神道の盛衰、第三は神道の源流である。こゝに宣長の神道と云ふは、我國の神々の定め給ひ、與へ給ふた道と云ふ意で、その道と云ふのは本書の冒頭に、

皇大御國は、かけまくも畏き神御祖、天照大御神の御生れませる大御國にして、大御神、大御手に、天つ璽を捧げ持たして、萬千秋の長秋に、吾が御子の知らさむ國なりと、言因さし賜へりしまに、まに、天靈の向伏す限り、谷蟻のさ渡る極み、皇御孫命の大御食國と定まりて、天の下には、神ふる神も無く、まつろはぬ人もなく、千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子とましまして、天つ神の御心を大御心として、神代も今も隔てなく、神ながら安國と、平らけく知ろしめしける大御國になもありければ、古の大御世には、道といふ言擧げも更に無かりき。そはたゞ物に行く道こそ有りけれ。物の理り有るべきすべ、萬の教へ事をしも、何の道、くれの道といふことは、異國の論なり。

とあるが如く、別に名稱もなき、我國建國統治の大道を指したものである。この神の道は道と云ふ名稱さへも無き位であるから、まして其の中の、仁義禮讓孝悌忠信など云ふ名稱も無く、たゞそれらは自然に行はれて來たものである。「道てふ言はなけれど、道はありしなり」と言つて居るやうに、道は自然に行はれて居たのである。然るに儒教にては、色々の名稱を附して、「人を嚴しく教へ

趣けむとぞすなる。」しかしそれは人間のさかしらにて、「そもそも天地の理はしも、凡べて神の御所爲にして、いともいとも妙に奇しく、靈しきものにしあれば、更に人の限り有る智りを以ては測り難きわざなるを、いかでか能く究め盡して知ることあらむ。しかるに、聖人の言へることをば、何事も理の至極と信け尊み居るこそ、いと愚かなれ」と云ひ、「すべて彼國は、事毎に餘りこまかに心を著けて、かにかくに論ひ定むる故に、なべて人の心さかしたち、悪くなりて、なかなか事にしどこらかしつゝ、いよゝ國は治まり難くのみなり行くめり。されば聖人の道は、國を治めむ爲に作りて、かへりて國を亂す種ともなるものぞ」と言ひて、却つて多くの理由つけをすることによりて、國家が亂れ、人道の行はれなかつたことを論じ、

さて何わざも、大らかにして事足りぬることは、さてあるこそ善けれ。故、皇國の古は、さるこちたき教へも何も無かりしかど、下が下まで亂るゝことなく、天が下は穩かに治まりて、天つ日嗣いや遠永に傳はり來ませり。されば、かの異國の名に習ひて言はゞ、これぞ上も無き優れたる大道にして、實は道有るが故に、道てふ言なく、道てふ言はなけれども、道は有りしなり。

と論じ、かの老子道德經の道可道非道又、大道廢有仁義の論を捉らへ來つて、日本國道の自然なるを説き、その自然なるが故に、そはよく行はれて、千萬世に至るも、天下よく治まりて、皇統連綿萬世一系變らせ給ふことなき趣意を述べて居る。

かくて宣長は第二章に至り、「神道の盛衰」を論じ、「しかるを、やゝ降りて、書籍といふもの渡り參る來て、そを學び讀むこと始まりて後、その國の風俗を習ひて、やゝ萬の事に混へ用ひらるゝ御代になりてぞ」、「遂に天の下知ろしめす大御政も、専ら漢様になり果てゝ、青人草の心までぞその意に移りにける。さてこそ安けく平らけく有り來し御國の、亂りかはしきこと出で來つゝ、異國にやゝ似たることも遂には混り來にけり」と論じ、彼の中世の武門政治の起りしこと、皇室の御凌夷、戰國時代の事などを想起して、神道の衰替を慨したが、しかし流石は、神國自然の道は全然漢國の如く成り行くものでなきことを擧げて、

然れども、天照大御神、高天の原におはしまして、大御光は、いさゝかも疊りまさず、此の世を照らしましまして、天つ御璽はた放れまさず傳はりまして、事依さし給ひしまにまに、天の下は御孫の命のしろしめして、天つ日嗣の高御坐は、天地のむた、ときはに動く世は無きぞ、此の道の靈しく奇しく、異國の萬の道に勝れて、高く貴き微なりける。」

と論じ、神道の亡ぶることなく、今日に繼續したることこそ、實に靈妙にて尊貴なることを極論して居る。こゝに至りて、宣長の所謂神道なるものは、今日の所謂皇道なるもので、主として萬世一系の皇統を戴く國體を指すものであることが知らるゝのである。これについて、日本の國民道德をもその中に包含するものなることも、その説明によりて窺ひ知られる。

宣長は更に進んで、この神道即皇道の源は何れにあるかを明かにして。

そも此の道は、いかなる道ぞと尋ねるに、天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず、此の道はしも、かしこきや、高御産巢日の神の御靈によりて、神祖、伊邪那岐の大神、伊邪那美の大神の始め給ひて、天照大御神の受け給ひ、保ち給ひ、傳へ給ふ道なり。故、こゝを以て神の道とは申すぞかし。

かくて彼は神の道が天地自然の道にあらず従つてかの漢國の老莊などと、その見を異にせるを説いて居るが、しかし

人は皆産巢日の神の御靈によりて生れつるまにまに、身にあるべき限りのわざは、おのづから知りて、よく爲るものにしあれば、古の大御代には下が下まで、たゞ天皇の大御心を心として、ひたふるに大命を畏み敬ひまつろひて、大御いつくしみの御蔭にかくろひて、おのおのおの祖神を齋き祭りつゝ、ほどほどに有るべき限りのわざをして、穩ひしく、樂しく、世を渡らふ外無かりしかば、今はた道といひて、別に教へを受けて、行ふべきわざありなむや。

彼はこの註として、

世の中に生きとし生ける物、鳥虫に至るまでも、己が身のほどほどに、必ず有るべき限りのわざは、産巢日の神の御靈によりて、おのづから知りて爲す物なる中にも、人は殊に勝れたるものと

生れつれば、また、しかし勝れたる程に應ひて、知るべき限りは知り、すべき限りはするものなるに、いかでかなほその上を強ふることのあらむ。教へに依らずては得知らず、得せぬものといはゞ、人は鳥虫にも劣れりとやせん。いはゆる仁義禮讓孝悌忠信の類、皆人の必ず有るべきわざなれば、有るべき限りは、教へを借らざれども、おのづから能く知りて爲すことなるに、かの聖人の道は、もと治まり難き國を強いて治めむとして作れるものにて、人の必ず有るべき限りを過ぎて、なほ嚴しく教へ立てむとせる強い事なれば、眞の道に適はず、故、口には人皆事々しく言ひながら、まことにしか行ふ人は、世々にいと有り難きを、天理のまゝなる道と思ふはいたく遠へり。

と述べて居る。これによれば、彼は「天地のおのづからなる道にもあらず」と述べては居るが、それは矢張り天地自然の道と異なる所はない。たゞ天地といへる所を産巢日の神の御靈と言つたまでのことである。この自然の人情に従つて、自然に則が立つたのが、我が國の神の道である。故に無理がなくて自然に行はれるのである。されば直毘靈にも、「しからば神の道は漢國の老莊が意に等しきかと或る人の疑ひ問へるに」、宣長は答へて曰く、「かの老莊が徒は、儒者のさかしらるうるさみて、自然なるを尊めば、おのづから似たることあり」と承認してゐる。しかしながら、その間に根本的な相違があることを論じて、「彼等も大御神の御國ならぬ惡しき國に生れて、たゞ代々

の聖人の説をのみ聞き馴れたる者なれば、自然なりと思ふも、なほ聖人の意のおのづからなるにこそあれ、萬の事は神の御心より出で、その御所爲なることをしも得知らねば、大旨のいたくたがへるものをや」と論じて居る。然り實際上に於て、我が國道に於ける自然と、老莊の所謂自然とは、自ら相異して居ることは確かに看取せられる。老莊の自然は無爲であり、虚無であり、朕冲無漢であつて、むしろ自然に背く所があると見られるが、我が國道としての自然は、眞の自然で、生々發展を旨とする自然で、人情の自然に合ひ、生物の自然に適合して居るのである。さてこの自然の變化を起す大根源については、宣長は

すべて此の世の中の事は、春秋の行き替り、雨降り風吹く類、また國の上、人の上の吉凶萬事皆悉に神の御所爲なり。さて神には善き悪きもありて、所爲もそれに従ふなれば、大方尋常の理を以ては測り難きわざなりかし。

と云ひて、すべてを神の所爲に歸して居る。そして因果説、天命説を排して、「そもそも吉凶萬事を、異國にて、佛の道には因果とし、漢の道には天命といひて、天の爲すわざと思へり。これみなひがごととなり」と説きて、「禍律日の神の御心の荒び」については、

世間に物悪しく、そこなひなど、すべて何事も、正しき理のままには得あらずて、邪なることも多かるは、皆此の神の御心にして、いたく荒びます時は、天照大神高木の大神の大御力にも、制み

かね給ふをりもあれば、まして人の力には如何にともせむすべなし。かの善人も禍り、悪人も福ゆる類、尋常の理に逆えることの多かるも、皆此の神の所爲なるを、外國には、神代の正しき傳説なくして、此の所由を得知らざるが故に、ただ天命の説を立てて、何事も皆然るべき理を以て定めむとすること、いとをこなれ。

と云ひて、天命説、因果説を排撃してゐる。宣長が天命説や因果説を排撃したのは、あまりに古傳説に拘はれた爲ではあるが、しかし兩巨匠が相共に、我日本民族が古來自然に従ひ、故らびた作爲や人爲を避けたことを看取したのは卓見と言ふべきである。こゝに正直があり、まことがあり、素直さが存するのである。我が民族の古昔は慥かにこの點が著しい。今日に於ても、我が民族は他の民族に比較してこの點が存するように思ふ。即我が民族が割合に素直な所があり、従順で開つ放しな所がある點などから見て、私は他民族よりも作爲とか人爲とか、少いではないかと思ふ。特に建築にしても、白木造りを愛し、生花や庭園等にも自然のまゝを模せんとし、俳句等にも有りの儘を詠じ、歌風も特に飾り氣の多い作爲を排斥するなど、餘程この傾向が著しいようである。

かくの如く我が國民は、自然のまゝなるを愛する傾向が強いのは、前に述べたように、我が民族がその自然環境から育まれたことを物語ることと思ふ。我國民の三大特質、即生々發展の氣魄とその實行性と和協性との外、正直とか、潔白を好むとか、優美とか、快活とか、清朗とか云ふが如き諸特性

がある程度まで著しく認められるようであるが、これらは多く我が自然環境から養成せられたことは以前述べた通りのことである。つまり我民族はこの四面海を環らした豊饒な島々に定住して、他民族から侵略を試られることなく、長年の間平和な生活を樂み、その間に自らその自然の感化を受け得たものであらうと思ふ。然るに世界列國は動もすれば我が國民を目して好戰國民となすのは、實は本當に我が國民を知らないからである。我々は元來平和な國民である。たゞ日清日露の戰を敢行し、しかも勇武を以てこの兩戰に勝利を博したと云ふ所から、とかく好戰國民と稱するのであらうが、それは楯の一面のみを見て、他面を見ないからのことである。我が國の自然は我が國民を育成して平和な國民としたのである。が、しかし、今日にありては我が自然は、動もすれば我々を驅つて外部にまでも伸びしめんとしつゝあるのである。それは我が國土は今日の我が國民の生活には、極めて貧弱な資源しか與へて呉れないし、しかもその國土も、榮え行く我が國民を養ふにはあまりに狭小であるからである。

かくの如く見來る時は、我が國民の特性を育み來つたものは、たゞに我國土の自然環境のみではない。海を隔てた亞細亞大陸の自然や、そこに住せる民族との關係も概略考へて見る必要が生じて來た。つまり我が民族の特性を養ひ來つたものは、勿論我が國土の自然であるが、又一面大陸のそれが、我が民族にも大なる影響を及ぼしたことも看過すべからざる所である。

第九節 我が民族的傳統と社會環境

すべて民俗はその居住する國土の自然的環境によりて生み出され、育て上げられることは、前節に述べた通りであるが、これと共に、人的要素、即その民族的傳統と、周圍に住居する他民族との關係換言すればその社界的環境によりても、亦、非常に重大な影響を受くるものであることは、猶個人の發達と少しも異なる所は無い。民族的傳統はこれを二つに分ける。その一はその民族の有する信仰と、その間に自然に發達した風俗習慣とがこれである。次にその民族の周圍に住する他民族との交渉は、戰爭或は平和な交通によりて、その民族の發展に大に影響せられるものである。

さて我が日本民族の傳統的信仰は如何と云ふに、そはその發達に極めて良好な傳統を有して居るものと考へられる。我が民族の傳統と云ふのは、所謂神の道なるもので、古事記・日本書紀・祝詞・風土記等に存し、又實際には、皇室は勿論、諸國の神社及びその祭式等に存せるを、北畠親房を始めとし、加茂眞淵本居宣長等の熱心な大研究家が闡明せる所のものである。神の道の信仰の第一は、「日本は神國なり」と云ふ信仰である。「大日本は神國なり。天祖始て基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此の事あり、異朝には其の類なし。此の故に神國とは云ふなり」と北畠親房が、神皇正統記の冒頭に喝破せる言葉は、實に我が國民の根本信仰を表白せる大宣言であつた。我國の傳

説は國常立尊から始まつて、諸冊二神に及び、更に天照大御神から瓊々杵尊の御降臨となり、神武天皇の御東征となり、傳へて百二十三代今上天皇に至らせ給ふて居る。我國の神々は即これら國家經營の大任に當らせ給ふた我が皇室の大祖先であり、御歴代の天皇は現神として尊崇の的とならせ給ひ、勅命は即神の御言として、神聖犯すべからざるものとなつた。遠勅と云ふことは、神人共にこれを許さざる重大犯罪と見るに至つた。その傳統は帝國憲法の「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」となり、「天皇ハ神聖ニシテ犯スベカラズ」となつたものである。この一大信仰は、今後と雖も、變更あるべからざるもので、萬世の下、天壤と共に窮りなきものである。この信念こそ實に我が立國の大根柢たり大基礎たるべきものである。この動かすべからざる傳統的信仰が即帝國萬代不動の基である。

神の道の第二の信仰は、我が國土山川草木すべては我が皇室の大祖先たる諸冊二神の生み給ふたものであると云ふことである。これは記紀並に舊事本記古語拾遺等に記せる所で、その記する所、各々相異せるも、大體に於てはこれらの舊記傳説皆同じ事である。よりにこの信仰は世々を通じて我が國民の信せる所で、たとひその傳説が、事理に合はぬ所あるも、これを信仰として固く保持して來たのである。彼の親房の神皇正統記は、卿が東國の邊陲にありて、軍旅に勞せし間、世人をして神國の由來と天皇正統の相承とを正しく知らしめ、以て他日興復の事業に資せんとして作つた

ものであるが、それは群書類從本の奥書に「此の記は延元四年秋成る。童蒙に示す爲に老筆を馳する所なり。旅宿の間、一卷の文書を蓄へず。纔に最略の皇代記を尋ね得て、彼の編目に任せ、粗、子細を勒し了る。其後再び見る事能はず、已に五年に及ぶ。聞く展轉書寫の輩ありと。驚いて之れを披見する處、錯亂多端なり。興國四年癸未の秋七月、聊修治を加へ、此れを以て本とすべし。以前披覽の人嘲弄する事なきのみ」とあるさうである。(日本文學叢書神皇正統記解題) 延元四年は後醍醐天皇崩御後村上天皇御即位の歳で、史には北畠親房神皇正統記を奉るとあつて、それは神武紀元一千九百九拾九年に相當して居る。この永い年月の間、この諸冊二神の我が國土山川草木等萬物創造の信仰を保持して來たものである。親房卿は博學多識、學古今に通じ内外兩典を兼ねたる人であることは、この書を讀んだものの等しく知る所のことであるが、この人にして、この信仰を有せることなれば、この書を讀む程の人は、皆これを信じたことは勿論のことである。勿論、紀記等の古書に記したる傳説を文字通りに信じたかどうかと云ふことは、多少疑ふべき所が無いでもないとした所で、少くとも、近頃の學者が用ひるように、二神の國土經營と云ふ意味に於ては、親房卿ならずとも、すべての人々が堅く信じた所であらう。我々近世科學によりて教育せられた人間に於ても、この二神の我が國土を經營せられたこと、並に我が皇室の大祖先であらせられたことは、共に何等疑ふべき餘地なきものとして、深くこれを信ずるものである。この信仰は我々日本國民に

取りては、實に重大なる信仰である。即我が日本の國土山川草木の末に至るまで、我等共同の祖神たる伊弉諾尊伊弉冊尊の兩祖神によりて、具さに探檢せられ、開發せられ、統治せられたもので、我々が三千年以前からこれを保持した國土であると云ふことは何等の疑念をその間に挟むべき餘地を有しない。されば日本書紀にも、

伊弉諾尊神功既畢、靈運當遷。是以構幽宮於淡路之洲、寂然長隱者也。亦曰、伊弉尊功既至矣。德亦大矣。於是登天報命。仍留宅於日之少宮矣。

とありて、その功業惠徳の偉大であつたことが記されて居る。古事紀には唯、「故其の伊邪那岐大御神は淡海の多賀にも坐します」と例の平淡な記事で片付けてあるのみであるが、しかし以上の如き考で、この古事記を読んだならば、如何に二神の功業の偉大であつたかは、想像せられるのである。

この信念は勿論我が國民の愛國心の強烈な所以である。此の國土山川草木は皆我が大祖先たる諸冊二神の苦辛して生み成し給へるもので、寸土たりとも、これを他に委すべきものではないと言ふ信念の起る所である。我が祖先の建てたこの家屋でさへも、これを人手に渡すことは、その家に取りて實に一大事とせられるのである。況んやこの善美な國土山川を、尺寸たりともこれを他人の手に委すべきものかとは云ふのが、實に我が國民の意氣であつた。そして實際我が國民は三

千年の間よくこれを確保し來つたのである。若しこの國土を他人に渡さねばならぬ時があつたとしたならば、その時こそは、國民が皆一人も残らず、その生命を捨つべき時であるのである。我が國民は實にかくの如き意氣を有して居る。これこそ實に我が國民の一大信仰である。そして諸冊二神が大八洲を生み給ひ、天照大御神が我が國民全體の大祖神として伊勢に鎮座ましまし、しかもその間の傳説は皆生々發展快活勇壯潔白熱慮協議等、皆明朗そのものゝ歷程であつて、恐怖悲哀怨恨衰弱等、陰鬱な徴候の見るべきものはない。かの諸冊二神の國生みの傳説の如何に生氣に満てるか、又伊邪那岐命の黄泉比良坂にて、桃子に告り給ひし御言、「汝、吾を助けしが如、葦原中國に、所有顯しき青人草の苦瀬に落ちて患惚まむ時に、助けてよ」と言ふが如き、又同じ時に、伊邪那美命の「愛しき我那勢命、如此爲給はゞ、汝の國の人草、一日に、千頭絞り殺さむ」と申し給ふた時に、伊邪那岐命「愛しき我が那邇妹命、汝、然爲給はゞ、吾はや、一日に、千五百産屋立てむ」と答へさせ給ふた傳説の如き、いかに生々發展の信仰を物語つて居ることよ。又かの同じ命の「吾は可厭醜め醜めき穢き國に到りて在りけり。故、吾は、大御身の禊爲な」と詔り給ひて、筑紫の日向の橘の小門の櫛原に到り坐して禊祓へ給ひき」とあるが如き清淨潔白の姿を顯はし、又天照大御神の岩戸隠りの傳説にあるあの神樂の一節の、如何に快活な愉悅の態度を現はし給ひしか。又かの須佐男命の八岐の巨蛇の傳説の如何に勇壯に、如何に人情の濃やかなるかを示したものであり、又天祖降臨國讓りの傳説

の如何に協力と謙讓の美德とを示せるか。すべて我が神の道はかくの如く、生氣に満ちた、しかも和協と清淨潔白とを旨としたものであつたが、この信仰が久しく我が祖先の精神を支配し來つたことは、實に我が國の一大幸福であつた。我が國民は祖先を崇拜し、各氏族皆各々その祖先を祭り、以て子孫の繁榮を祈つたものであり、これによりてその氏族を教育し來つたことは、前既に述べ來つた通りのもので、かの皇室に於かせられては、「まつりこと」が國政の大部分をなし、遂に政治を以て、「まつりこと」と訓ずるに至つたほど、祖先の祭祀を重んぜられ、各氏族もこれに習つて、各々その氏族の祖先を敬重したのである。

この生氣の充満した、所謂生々發展の意氣が、我が國民の信仰となり、我が國民を支配して居た時代は、我が國家は次第に發展の一路を辿つて來たことは、以前述べた通りのものである。然るに佛教と儒教とが這入つて來てから、この信仰に著しく動搖を與へたことは事實である。佛教が熱帯地方の所産であり、樹下の清涼な所に結跏趺坐して冥想に耽り、現世を悲觀して未來の幸福を欣求し、出家得道を以て無上道と心得、佛法僧を三法と稱し、僧を非常に尊貴なもの信じ、遂に主上までも入道遊ばされたのであるが、この思想は、我が國民の發展に一大障礙を與へたのである。勿論佛教が我が國民の思想を豊富ならしめ、我が國民の思索を促がしてこれを深化し、又他の一方には、美術文學を發達せしめ、繪畫彫刻文章和歌等に貢献した効果は、實に非常なものであつたことは十分

にこれを認められるが、國民の意氣を阻喪せしめたことは亦著しいものであつた。これは文學上に顯著に現はれて居ることで、かの萬葉時代の歌風と、源氏物語以下古今以降の歌風とが、著しく相異して居るのはこの影響が著しいものであつたと思はれる。これが爲に、平安朝の懦弱な氣風を馴致し、遂に武門政治を出現せしむるに至り、數百年の間、我國の文化の發展を阻止するに至つたことは、何としてもこれを認めなければならぬ。勿論かくの如き結果を生じた一つの重大な原因としては、私は以前に擧げた通り、支那の教育法の一大缺點が、著しくその弊を現はして居るを信ずるのであるが、佛教のこれに及ぼした弊も亦相當に大きなものであつたことが想像せられる。加茂真淵は、その「國意考」の第三章に於て、「文武の徳」なる一章を設け、佛教が生物を殺すを戒め、若し生物を殺した時は、罪報を被るべしと言へを嗤笑し、遂には「蠅蚊を殺すゝらもいらぬことよと言ふようになりて、僧にも狸にもばかされるれ」と論じ、大に武徳の修むべきことを論せるが、その論中には首肯すべからざる點もあれど、とにかく佛教が人心を弱くしたことは疑ふべからざる所である。特に婦人の如きに至つては、西方淨土を希願して、何等の理由もなく、その生を棄つるものすらあるに至つたこともある。これと同時に佛教が禁欲主義を實行する所から、國運發展の方面から見れば、種々の弊害を生じたことも、亦當然と言はなくてはならぬ。其の第一は、肉食妻帯を禁止する所から、所謂名僧智識と稱せられる人々の、子孫を絶滅せることである。これら名僧智識は、皆

その當時の優秀なる人々であるが、それ等の子孫を絶滅することは、その國運の發展の阻礙を及ぼすことは言ふまでも無い所である。彼の歐洲中世紀に於て、僧院制度の盛んな時に於て、多くの優秀な人々が、この生活に入つた爲、その優秀な子孫を絶滅して、歐洲の發達を阻害したことが甚しかつたと言はれて居るが、我が國に於ても、左程まで重大な結果を生じたかどうかと云ふことは、勿論明かならぬことであるが、平安朝時代、特にその末期に於ては、僧界多くの人傑を出した。かの玄昉・道鏡の如きも、人物としては中々有数のものであつたが、降つて最澄・空海・義真・圓仁・圓珍・良源・實然・源心・慈圓・榮西・親鸞・道元・日蓮等皆有数の人物であつた。これらの外、奈良京都を始めとして、地方の名刹には多くの僧侶があつて、法運を隆昌ならしめた。加ふるに宮中を始め、攝關名家の人々の落飾するもの多く、爲に有爲有能の士が出家して、その名を爲さんとするものが、多かつたに相違ない。従つてこれらの僧侶は、皆國民としては、優秀な部に屬するものであることは想像せられる。それらの多數の人々が、その子孫を残さないことは、國家として、決して喜ばしいことではない。第二には僧徒の横暴である。禁欲主義の信仰が一旦其の殻を破る時は、却つて横暴に至らざる所なく、遂にはその制御に苦しむに至るものである。奈良朝以來平安朝にかけて、宮中並に權門勢家の佛教の歸依尊信非常に甚しく、自ら落飾して佛門に歸するもの多く、従つて國中の俊髦多く出家し、朝野官民の歸依愈々盛にして、寺塔を建て、土地を寄進し、物資を施入するものなど續出し、爲に寺門の權勢

隆々たるものがあつた。特に平安朝の末葉に於ては、治平久しく、文弱の弊上下を風靡し、中央政府の威令行はれず、盜賊横行せるも、これを鎮定することが出来なかつた。然るに京都奈良等の諸大寺に於ては、その所屬の財寶土地を保護する必要より、在寺の僧侶に武装せしめ、或は地方無賴の徒の來り投ずるものを迎えて、兵器を供給し、甚しきに至りては、其の領内の壯丁を招募して僧兵となすなどして、こゝに所謂山法師の名稱が出来、僧兵なるものが起つた。彼の叡山・天臺・座主・良源が言つた様に、「李世澆薄、世人佛法を尊ばず。仍つて兵力を藉らざれば佛法を保護すべからず」と言ふ理由を附し、又恐らく佛法外護の四天王、金剛力士の如き強力武器を擁するものが、佛法を守護したことに、その存置の説明を求めんとしたものであらうと思はれるが、とにかく斯くの如くして各大寺には數千の僧兵を備へて、常に相争ひ、又嗾訴掠奪をなし、世人をして嚙齧せしめたことは、史上に顯著なことである。かくて遂に叡山は信長の討伐を蒙り、根來寺は秀吉と戦ふなど、兇暴なる俗人と少しも異なる所なきまでに至つた。されば白河法皇は叡山の衆徒の凶暴を悪んで、朕が意の如くならざるもの三つある。鴨川の水と、双六の賽と、山法師だと嘆ぜられたほどであつた。

之に比すれば、我が國の神の道の信仰は、實に健全なもので、既に前に述べたように、清明快活、生々發展を旨として、祖孫相續、子孫繁昌を慶祝して、佛教渡來前既に千二百年以上に及んでゐる長い間、我が國民の信仰を支配し來つたことは、實に我が國民の幸福であつた。佛教渡來後に於ても、この

深い信仰は繼續して居た爲に、佛教の信仰を抑制したことは著しいものであつた。かの宮中の御落飾又は權門勢家の入道も、人生の仕事を一通り終つてからのことゝなつて居るのは、恐らく我國特有の風習であらう。これは恐らく、佛教の信仰を得た後とても、我が國大古からの祖孫相續の信仰を棄却することが出来ず、一通りその義務を盡した後、始めて佛教の信仰に従つて、出家するの風習を醸成したものと思ふ。それにしても決して本當の出家でなく、猶在家のまゝ、しかも一層俗事に汲々として、家門の發達の爲に離齋せる清盛入道の如きがある許りでなく、宮中に於かせられては、御落飾法皇として、始めて政權を執らせ給ふことが、常例となつて居た御時代もあらせ給ふたのである。しかもこの信仰は、今日に至るも、猶衰へず、深く我が國民の心裡にその根柢を下ろして居ることは、實に我が國の幸福と言はねばならぬ。特にそれが、明治維新の王政復古と共に、生々發展の思想となり、人口の増加、國運發展の基礎をなしたことは、最も喜ぶべき社會傳統と言ふべきである。

一國民の自然環境と云ふのはたゞその國の自然のみではない。それに近接する諸地方の自然や、そこに住する民族から影響を受くることが非常に多いことを忘れてはならない。我國が一葦帶水を隔つる亞細亞大陸、及そこに住する民族から受けた文化の影響の大きいことは、何人も熟知して居る所であるが、民族性についても亦相當の影響があつたことゝ思ふので、これについても少し考察して見たい。

朝鮮半島は實に我が國と大陸との通路である。特に古代はさうであつた。古代の勇壯活潑な冒險好きの人々が、一葦の扁舟に乗つて、對馬海峽を往來して居たことは想像に難からぬのである。舟は我國の太古からあつた。諸冊二神の蛭子を生み給ふた時に、三歳も脚が立たなかつたので、天の磐檣樟船に載せて風のまにまに放ち棄てきとある。我が海國には當然のことである。仲哀天皇が朝鮮のあることを知らし召さなかつたようであるが、しかし實際は太古の時代から互に相交通して居たことは、考古學人類學の教ゆる所である。我々は今これらの學說をこゝに吟味せんとするものではない。たゞ大陸諸國との交通が朝鮮を経て行はれて居たと云ふ事實を語ればそれで十分である。従つて大陸文化が初の程は朝鮮を経て我國に這入つて來て居つたことは、我國史にも明記されて居る。そしてそれは文字も、文學も、儒教も、佛教も、織工も、瓦工も、鍛冶工も、音樂も、彫刻も、繪畫も、建築も、筆も、墨も、紙も、すべて朝鮮から輸入せられて、我國在來の技術を改良進歩せしめたことは著しいことであつた。されば神功皇后の朝鮮征伐は、實に我が文化發展の上に一時期を劃するものと言ふべきである。我が國史はこの時代以後その面目を一新して居る。然るにその後支那と直接に交通を開始して、その優秀な文明を輸入するに至つて、我が國の文化は更に第二の發展を示した。そして奈良平安の二朝の燦爛たる文化を展開せしめたことは、我が國史の上に、花

々しい光を放つて居る。しかしそこには又拭ふべからざる一大汚點を印した。かの武門政治の源因はこゝに胚胎して居たのである。しかしながら、人間の事業は一方に燦爛たる光輝があればあるほど、他方には暗黒な陰影があるのは免るべからざる數である以上、我々は奈良・平安兩朝の約貳百四五十年間、あの燦爛たる文化の花を開いた後に於て、約六七百年間の退嬰を餘儀なくせられしことも已むを得ぬことであると考へなければならぬ。唯我々はその犠牲のあまりに大きかつたことを痛むのみである。しかし、とにかく、大陸に支那印度の如き文化の花が咲いて、それを我國に移入したことは、勿論我が民族が、これら文化を消化吸収するだけの素地を有して居たからのことであるが、一方から言つたならば、我國がこれらの文明國を隣邦として有して居たことは幸福であつたと言はなければならぬ。加之、これら諸國の文化が我國に輸入せられて、奈良・平安兩朝の文化を進めたのみでなく、その後、に於ても猶絶へず、徐々ではあるが、支那の文化を輸入せしことは、何人も知る所である。とにかく、我が隣邦に支那印度を有したことは、我々の幸福とする所である。今日に於てこそ我々は、支那の不統一の爲に隨分苦んで居るが、それでも通商上の關係から言へば、兩者相依存して居る。即我が國は支那の廣大な版圖から種々の原料を供せられ、我が技術の結果たる成品を、あの四億民衆の需要に俟つことを稱するのである。

相近接せる民族は、たゞに文化の上にて相補益するに止まらず、時としては干戈を交ゆるに至る

ことあるは、當然のことである。この點から我が國と亞細亞大陸諸國との關係は、何人も熟知する通り、我國の地勢と、我が國民の一致せる傳統的な忠君愛國の精神の旺盛なることによりて、かの元寇以外には、何等脅威をも受けなかつたことは、小學兒童さへも、その誇とする所である。これは、新開國を除いては、恐らく世界に類例の無いことであらう。神功皇后の朝鮮征伐以來、一二の小事實はあるも、皆大したことは無かつた。たゞ我が國の上下を震撼せしめたのは、かの元寇であつた。元は有名な成吉思汗が、外蒙古に立國し、亞歐を攻略して、一大帝國を建設し、第五世忽必烈に至つて、遂に宋を滅し、國號を元と號したものであつた。忽必烈は西域を平げ、南は廣東・ビルマまでも征服し、東は滿洲朝鮮を降し、その餘威を以て、我が日本を屈服せしめんとしたけれども、我が國は毅然として、これに従はなかつたので、遂に文永十一年並に弘安四年の兩度に涉つて、大兵を派遣して、これを脅かした。しかし、兩度とも、大敗に歸して、這々の體にて引き上げたことは、何人もよく知る所である。此の兩役共に大風の爲に船艦覆没して、大敗を招いたのであるが、それは我が國が支那大陸から離れて居た關係上、是非とも船艦を要する。又颱風の多い我が國のことなれば、航海の利便今日の如くならぬ當時にありては、我國の攻略には非常の困難の伴ふことは、當然のことである。されば破竹の勢を有する忽必烈汗も、高麗の援助手引きも、何等の効果を齎らすことが出来なかつたのである。然るに當時のあの兩度の颱風を、神風として我が國民は讚嘆して居るけれども、しかし

あの颱風がなかつたとした所で、元軍は到底敗戦を免れなかつたものと思はざるを得ないのである。それは我が國民の愛國の至情に燃え、一致協力、國土を守護せんとの意氣込みと、その武勇の精神とには、到底元の大軍も、久しく抵抗することは出来なかつたに相違ない。思ふに弘安の役には、朝鮮の馬山浦即合浦から來襲せる北軍と、支那南方から來た江南軍とを合したならば、その兵數は恐らく廿四五萬を越ゆるであらう。これだけの大軍を養ふには、軍器糧食被服等の供給に非常の困難を感ずるであらう。糧を敵に取ると言つても、軍器や被服等まで盡く敵地で自らこれを供給することは出来ないことである。されば絶えずこれをその本國から船舶を以て輸送しなければならぬ。當時我が國には水軍は發達して居なかつたが、商船や海賊船は、盛に大陸の沿岸を徘徊して居たのであるから、相當の船は作り得られたのである。これらの船を以て、輸送に従事して居る元の船を脅かせば、元軍は非常に困難を感じたことであらう。そして我が國では協力一致、武勇絶倫の將士が、鎌倉の指令に従つて奮戦し、加ふるに皇威神佑を確信する我が將兵が、愛國の至情を以つてせば、元軍如何に多數なればとて、到底これに敵することは出来なかつたに相違ない。否その兵數が多ければ多い程、困難を感じたことであらう。現に當時の戦史を觀れば、元軍は常にその船を顧慮して、陸上深く浸入することが出来なかつたのみでなく、我が勇敢なる將卒は彼の船艦内に突入してこれを襲撃した。肥後の竹崎季長、天草の大矢野種保、同種村の如きがあり、又對馬の守護

宗助國は僅か八十騎の寡兵を以て、元の大軍中に突入して、潔く戦死を遂げて居るなど、その勇敢な事實は千載の下人をして感奮興起させるものがある。況んやかゝる遠征軍の常として、疫癘の爲に困められることもあらう。現に弘安の役には、元軍には悪疫が盛に流行して居たのである。こんな狀況であるので、たとひ颱風が襲つて來なくとも、元軍には到底勝目は無かつたことは確實である。されど若しこの颱風の襲來が無かつたならば、戦争は長引き、我國も亦大に困つたことであつたらうと思はるゝことも確實である。しかしながら我國の地勢は、實にこの颱風の衝に當つて居るので、この元寇の難を軽減したのである。颱風は實に我國に取りては神風である。それは第一には、外敵を防禦するの一大障壁である。第二には、我が民心を刺戟して絶えず自ら警むる所ありしむる。第三には、濕潤を齎らして我が國土に草木を繁茂せしめ、我が國土に美觀を添え、我が國民の穀菜を豊給し、よつて以つてこの溫和な人情を育成するの基礎をなすものである。されば颱風は實に我々に取りては神の息吹である。勿論颱風の我が國土國民に課する損害も多大であることは言ふまでもない所である。年々堤防を損し、家屋を破り、人畜を傷害し、作物を荒らす、その損害の多大なことは何人もよく承知して居る所である。その損害は恐らく年々數千萬圓を下ることはあるまい。しかしながら、これを前記の如き利益、特に國體の基礎を形作り、その信仰の對象となるの洪益に至つては、到底前記の弊害と比較にはならないのである。藥物の有効なるは暈眩する

所にあると同様、颯風の有効なるは、これらの害を伴ふ所にあることを思へば、その害の如きは我々は忍んでこれを受くべきである。況んやこれ等の弊害も我々の努力によりて、大部分これを免るることが出来るに於てをやだ。即山林を培ひ、堤防を堅固ならしめ、家屋を堅牢にして置きさへすれば、その暴威を退くする餘地なからしむることが出来る。こゝにも颯風の刺戟性によりて、我々を鞭撻して呉れる恩徳が感ぜられる。斯くの如き理由によりて私は颯風の讚美者である。神風論者である。

元寇の役後、外國と事を構へたことは例の豊臣秀吉の朝鮮征伐がある。朝鮮征伐は天正十九年に發令せられ、翌文祿元年正月に進發を始め、慶長三年八月秀吉の薨去によりて、軍を還へすに至るまで、前後七年に涉りたる大事業であつたが、その結果は比較的に尠少であつた。秀吉のこの役を始めたのは天正十九年の冬であつた。しかしその企てはそれより前、即天正十五年九州征伐の時からであつたと言ふことである。當時西歐諸國では、所謂地理上の發見の餘勢を受けて、盛に未開地方に植民地を作らんとし、又宗教改革の後を受けて、舊教徒が布教地をこれらの未開地に求むる運動と伴ひ、我が國にも多くの宣教師を派遣せられ、元龜二年には、大村純忠は、葡萄牙人の爲に、長崎を開港し、九州各地には、天主教が盛に行はれ、天正九年には、西班牙船も來航し、同十年には、大村有馬、大友三氏は、使を羅馬に遣はし、又朝鮮からも屢々使者が來朝し、支那南洋との交通も漸く盛ならん

とする氣運に向ひ、我が國人の海外發展の雄志が動き始めた時代であつた。一方天正十五年には、秀吉の九州征伐も、案外早く終結し、更に天正十八年には、小田原城も陥り、北條氏直降を請ひて關東平定し、海内全く秀吉の命下に動くに至つたのであつた。こゝに於て秀吉は朝鮮を征服し、進んで支那を従がへ、以て我國の國威を海外に輝かさんと試みたのである。勿論廣大な土地を略取して、各種有形無形の利を獲得しようとして云ふ考もあり、又多年養ひ來つた諸將の兵を、何等用ひる所なく、その儘に棄て置く時は、却つて騷擾の基をなして、禍亂を惹起するに至るべければ、その勢力のはけ口を、朝鮮支那に求めたことも、恐らくこの征韓役を起した一大原因をなしたのであるまいかと思はれるのである。然るに慶長三年八月、秀吉の薨去は一切を解消して、徳川家康と前田利家との協議によりて、秀吉の遺命と稱して、征討の師を還さしめたのであつた。されば二十八萬の大軍を起して前後七ヶ年を費したこの征韓軍も、殆ど何等の得る所なく歸還するの已むなきに至つたのであつたが、これをかの元寇の役と比較する時は、その間に雲泥の相違のあることを見るのである。元寇の役に於ては、忽必烈の常勝軍を以つてして、高麗蒙古南蠻の兵二十四萬を以つてして、殆ど寸地を奪取すること能はず、遂に兩回とも颯風の爲に全滅の悲惨を嘗めなければならなかつたのであるが、この征韓の役に於ては、無事全軍を上陸せしめたのみでなく、その首都京城を奪取し、遠く平壤を陥れ、明の援軍を破つて、明軍をして和を請はしむるなど、到底元寇當時の戦況と日を同うして

語るべきではなかつた。それは全く愛國の至情と士氣の旺盛なことが、この相違を來した大原因であると思はれる。しかしながらこの役と明治時代に行はれた日清戦役、日露戦役と比較して、この役が何等の効果を齎らさず、煙火の如き觀を呈した所以は、明治時代の兩役は、我が國の死活問題として、必死の活動であつたが、征韓役はかくの如き位置でなく、言はゞたゞ物好きに動かした兵であつたからの相違に基くものであるからである。

猶一つ和寇のことについて一言せねばならぬ。和寇は主として明時代に九州地方の武士、商人が朝鮮から支那沿岸地方を掠奪したもので、一時は朝鮮明人をして戦慄せしめたのである。始めは高麗の豊饒な地方を荒らし、次で北支那に及び、更に南支那に及んだもので、その起源は鎌倉幕府時代にある。當時の武士の食祿に離れたものが九州四國等に流浪して海賊等をなし、次第に朝鮮北支那に及び、高麗朝を苦めて、その滅亡を促がし、支那に於ては明朝が起つて隣國との互市を禁ずるに及び、日本の商人等は兵力を以て物資の掠奪を擅にしたものである。蓋當時日本に於ては南北朝に分れて、諸所に戦争が起つて居たので、國民はその生産に安んずることが出來ず、物資は非常に缺乏して居たので、これが補給を支那朝鮮に求めたものであらう。特に明に於て貿易を禁止したことは我國に取つて經濟上の打撃となつたので、止むを得ず兵力に訴へて掠奪したものであらう。此の時代、明朝鮮から屢々使を遣はして禁寇を請ふたけれども、それは何等の効果が無かつた

のはむしろ當然のことである。蓋し、一方に於ては政府の威令行はれず、一方に於ては内戦の爲に物資の生産に不足を來した爲に、勇敢な商人、武士がかゝる舉に出たものである。足利氏時代に至り國內稍靜平となるに及び、明は使を遣はして義滿を日本國王に封じて朝貢の名義に於て、互市を許し、一方には和寇を禁止せしめたので、その前後に於ては和寇は稍靜平を保つに至つた。この時代において、貿易は勘定符を受けて、それによりて行はれ、朝鮮に對しては、各々年々隻數を定めて行つたものであつた。然るにその後、我が國は再び亂れて遂に戰國の世となつたので、和寇は再び猖獗を極めたものであつたが、豊臣秀吉から徳川氏の時代に至つて所謂御朱印船の制となつて、外國貿易は統制せられ、遂に和寇はその跡を絶つに至つたのである。

斯くの如くにして和寇はその跡を絶つに至つたけれども、我が國民の勇敢な氣質は海外雄飛の壯志は衰へず、臺灣、シャム、フィリッピンに發展し、山田長政、高砂徳兵衛、濱田彌兵衛などの諸豪を輩出するに至つた。

以上の如き諸事實を案するに、我が國民が支那朝鮮その他の民族と海を隔て、相隣接して居たと云ふことは、政治的にも文化的にも非常に深い關係を有して居たことは、前に述べた通りのことであるが、更に我が國民性にも相當の影響を與へたものである。つまりこれらの勤勉な、富な、しかも温順な民族を對岸に有した我が國民は、平常これら國民と交通して、その進歩した文化を受け

納れ、我が文化の發展を助長し、又時としては兵力を以つて相見ゆるに至つた結果、こゝに我が國民をして内には強固なる團結心を促がして、我が國土を愛し、我が傳統を尊ぶ、至情を養成せしめ、外に對しては勇敢、敢爲の氣象を助長し、特に我が民族の實力はこれら大陸の諸民族敢えて恐るゝに足らざることを意識せしめて、國民としての自信を高めしめた効果は實に偉大なものであつたと思ふ。たゞ一時文化的に支那思想の爲に征服せられんとする傾向はあつたが、これさへも國學者の一團の爲に破碎せられて、何等の悔恨をも残さなかつたのは幸ひであつた。

第五章 心理學的に見た日本民族性

第一節 性格と民族

以上の所説は主として歴史的材料によりて立論したものであるが、更にこれを心理學的に研究した結果を紹介することは、以上の所説を髓むる爲に大に重要である。而してこの方面からの研究によるも、我が國民の優秀性は實行的性質と和協性とをもつて生々發展の道に躰進するに存することを示して居るのである。私のこの所論は主として、エス・デイ・ボルチウス並にその助手マジヨリー・イー・パブコック兩氏の共著になる、「性格と民族」(テムペラメント・エンド・レース)と名く

る書を主とし、他は我國實驗心理學の權威たる田中寛一博士の名著、「日本民族の將來」とを參案して記述したものである。ボルチウス氏は嘗ては濠洲メルボーン大學の實驗教育學の講師兼教育的人類學解剖學部實驗室の指導者であつたが、現今では米國ヴァインランド師範學校心理學實驗室の主任で、ハワイ大學の臨床心理學教授を兼ね、心理學並に精神病學の臨床講義部長を兼ねて居る學者である。ハワイはあの狭小な諸島嶼の中に、各種民族を包含して居るので、氏はその助手たるパブコック氏と協力して、これら民族の特質を研究してこの書を著はしたものであるが、田中博士の著述にも屢々引用せられて居る。特に補遺ではあるが、「ハワイは於ける諸民族の氣質」には詳しく引用してある。

ボルチウスは各種の方面からハワイに於ける諸民族の特質を研究して、その結果を記述して居るが、先づ最初に同島に於ける在住各民族の歴史的な略述をなして後、四つの方面から研究を進めて居る。即第一に民族の社會的解剖、第二には腦の發達、第三は民族の心理狀態、第四は民族の總合精神力の特徵の四つである。しかもこれは、ハワイ在住のハワイ民族、支那民族、日本民族、ボルチウスガ爾民族、フィリッピン民族、及ポルトリコの六種族についての比較研究であり、間々英米國民の研究結果を挿入して、一層廣い比較の基礎を供給せんとして居る。就中私の特に注意したいのは、民族の社會的解剖と總合精神力の特徵との二章である。先づ社會的解剖について氏の説を記述し

て見よう。

第二節 民族の社會的解剖

ボルチウスは先づ氏の設定した「ボルチウスの社會的採點尺」なるものを考案し、これによりて各民族比較の標準を定めて居る。それは元來氏の精神薄弱兒の研究によりて得た標準であるが、氏はこれを普通の人々は勿論、民族の諸性質の比較標準として使用すべきものであることを信じて、この標準をハワイ在住の民族比較に使用したのである。ボルチウスの社會採點尺なるものゝ第一に置かれたものは、計劃力で、次には暗示に對する自信力、第三は衝動に對する熟慮性、第四は決斷力、第五は感情に對する自制力、第六は興味の繼續、第七は協調性であるが、今一目に見易くする爲にこれを表示すれば次の通りである。但しその上に列記したものは積極的なもので、下段はその缺點とすべきものである。

社會採點尺

- | | |
|--------|------|
| 1. 計劃力 | 無計劃 |
| 2. 自信力 | 被暗示性 |
| 3. 熟慮性 | 衝動的 |

- | | |
|------------------|------|
| 4. 決斷力 | 優柔不斷 |
| 5. 自制力 | 感動性 |
| 6. 持續性 | 浮動性 |
| 7. 協調性 (氣轉のきく性質) | 無遠慮 |

ボルチウスがこれらの性質を選んだのは、個人或は民族がその社會に適應して、相當な地位を占むるに必要なものを主としたので、美的性質の如き藝術的な方面は度外に置いたものである。とにかくこれら性質について、どうして各民族の性質を測定するかと言ふと、彼は主として社會的測定法を使用してゐるが、他面また心理的測定法をも採用して居る。後者は迷路による概括的測定であつて、前記の如き分解的なものには無い。たゞしそれは後に記述することゝして、今は右に列舉した社會適應性の各種類を如何にして測定したかについて、その方法と結果とを記述しよう。彼の測定は、これら各種の民族に、永らくの間、直接に親密に接觸しつゝある人々に、左記の如き説明的質問書を送つて、その採點を請求したのである。

1. 團體としての計劃力

今調査せんとする六民族について、何れの民族が最も多く計劃力あるを示すか。常に前方を遠く見て、未來の爲に最もよく準備するか。貴下は、個人としての儉約節儉について考慮され

なければならぬが、しかし團體として先見ある計劃を立てこの自的の爲に相應せる方法手段を講ずる傾向を考慮して下さい。(點數5)

何れの民族が眼前のことに氣を取られて、未來の計劃よりは寧ろ現在の事に齷齪として居るか。(點數1)

2. 暗示に抵抗する力、即自信力

何れの團體が最も暗示的であるか。即彼等が最も近く談話した人々の意見に左右せられて、その行動を決する傾向があるか。(點數1)

之に反して、何の民族が最も自信力に富んで居るか。即萬事自分に考へ出す傾があるか。何れが新たな行動を取り或は新たな意見を作るに當りて、最も堅實な理路によりて自己を導くに傾いて居るか。(點數5)

3. 衝動制止、即熟慮

何れの團體が最も衝動的であるか。即適當な考慮なくして行動に突入するか。(點數1)

何の民族が思慮の熟するまで、その行爲を延ばす傾向があるか。即彼等が活動する前に慎重に熟慮するか。(點數5)

4. 我慢力—忍耐力

困難又は危険に面するに當つて、何れの民族が最も我慢力が強い。その仕事や地位が六かしくなつて來た時に、これを放棄する傾向が最も少いか。(點數5)

どの團體が困難な位置にありて、辛抱力が最も少いか。(點數1)

5. 自制

團體としてその感情を自制することの最も強い傾向を示すものは何れの團體であるか。非常時に於て最も冷靜にその頭を保つのは何の團體であるか。(點數5)

不慮の出來事に際して最も興奮して便りにならない民族は何れであるか。(點數1)

6. 興味の持続

どの團體がある一つの目的に粘り強く固定して、着々とこれを實行し、不變の態度を持續するか。(點數5)

常にその興味が變化し、始終その目的が變つて、今これをやつて居るかと思へば、次には他の事柄を追求して居ると云ふ風に、變つて行く團體はどれか。(點數1)

7. 協調的態度—呼吸を呑み込んで居ること

その目的を達せんが爲に取る手段によりて、最も多く他人を激せしめ、そしてその大望を達せんとするに當つて、その道路に立つて居る他人のことを少しも考へない民族は何れの民族で

あるか。(點數1)

何れの民族的團體が最も懐柔的であり、他人の呼吸を呑み込んで居て、他の民族の反感をそゝらないか。(點數5)

8. 信頼性

何れの團體が最も信頼するに足るべきか。それは日常の小事に止まらず、よく信用を保ち、約束と義務とに生きる民族は何れの團體であるか。(點數5)

何れの民族が何か香ばしからぬ利益が目前に現はれて來る時でさへも、これを取らんと努め従つて最も信頼することの出來ない團體であるか。(點數1)

以上の如き民族的特性を現はす言葉としては勿論不正確な點もあるし、又重複した點もあるが、一般の人々に依拠して採點して貰ふ場合にはこれは已むを得ぬことである。ボルチウスの依拠して採點せしめた人々は、其の人数廿五名であつた。その中の十六人は農園の管理者で、残りは社會事業の主任者と、農園の醫師と、教師とであつた。農園の管理者は各國から來る労働者と最も密接な關係を有し、丁度親子の様な状態にあるのみでなく、一農園には各國の移民を包含して、恰も縮少せる世界の觀を呈してゐる。さればこの農園の管理者には、各國民の特質が浮彫の様によく現はれて見ゆるものである。彼が最も多くそれらの人々を選んだのはこんな理由によるものであ

る。かくて彼の製出した表と圖とについて、先ボルチウスの意見の概要を紹介して置く。日本人は計劃力と我慢力とに於ては斷然諸他の民族に超越して居る。興味の持続についても第一に位して居る。衝動禁止と自制とについては支那人と相等的だが、暗示性についてはこれよりも稍低く、信頼については著しく劣つて居る。されど日本人に對する最悪の得點は攻撃的なことで、他の民族的團體の中で、日本人はその目的を達せんとする方法に對して一番熱烈な反對を惹起する傾向がある。即協調性の非常に乏しいと云ふことである。しかしこの點については多少割引して見なければならぬとボルチウスは言つて居る。それは人数が多いのと、日本人は一般に恐れられて居るからである。

支那人はこの採點表について見ると、暗示性の最も少い、そして最も多く信頼すべき人間である。その協調性はハワイ民族に次いで、最も卓越して居る。彼等の計劃力は、團體としては、遙に日本人に劣つて居る。彼等の計劃力は主として個人的なものである。彼等は他の民族の態度にはむしろ冷淡であり、共同の活動にはあまりに関心を有つて居ない。そして保守的で回顧的であり、且最も利己的な性質を有し、その點については非常に我慢力があり、忍耐力を有して居る。従つて儉約で、吝嗇で、自己中心主義に陥ると云ふのである。これに對して「日本人は勤勉で、霸氣があつて、企業心に富んで居て、常に前方に着眼し、直接の利益を一層大きな目的の爲に先行することを望んで

居る」とボルチウスは言つて居る。

日本人の特質と支那人とのそれが、他の民族に遙に卓越して居ることは、以上の所説を見れば、一目瞭然たるものであるから、この上説明を加へる必要は無い。唯私はこゝにこの卓越せる日本人の特質について意見を加へる必要があると思ふ。それは從來述べ來つた我が特質とこのボルチウスの研究との比較である。ボルチウスの表によれば我が國民が最も勝れて居る點は、計劃力であり、その得點は5即滿點である。しかもこれについては、判者の意見が全然一致して居て、5即スタンダード・デヴィエーションが零である。このスタンダード・デヴィエーションとは各人の判定の誤差を示すもので、この誤差の少いほど、その判定の一致せることを示すものである。而して日本人の計劃力に於けるこの判定の誤差は零であつて、即各判者の意見が完全に一致せることを示すものである。この性格は日本民族としても最も顯著に發達せるものと云ふべきである。この計劃力に次いで、我民族の最も優れた性質は、我慢力、即困難に面してもその志操を變へない性質で、その得點は四點八四、即殆滿點であり、しかも誤差も亦極めて少く、僅に〇・三七となつて居る。第三位に來て居るものは興味、の持續で、一旦計劃し着手したことは、何處までも持續してこれを遂行せんとする性質で、その得點は四點六八であり、その誤差も亦僅に〇・四七に過ぎない。第四に勝れた得點を與へられたものは自制力である。これは四點四四となり、誤差もまた少く、僅かに〇・七〇

となつて居る。熟慮に至つては支那民族に少し劣つて居るが、それでも猶四點二四となつて居り、誤差も増しては居るが、それでも〇・八六に過ぎない。第六に來るものは暗示に反抗する力、即自信力で、これは支那民族より多少劣つて居て、彼の四點二八に對して我は四點を示し、誤差も亦〇・八七となつて居る。常識から見ると、この第五第六の兩性格については、支那民族の守舊的なるに比して、我が進歩的なる性質は、これに對して多少の劣勢を示すは當然と云ふべきであらう。しかしこれとても他民族に比すれば斷然優位を示して居る。さて第一より第四までの性質の如何なるものなるかを考へるに、それは何事にも拘らず、その民族若くは個人の發展の爲に、事業を遂行する上に最も必要な性質であつて、就中、計劃、我慢、持續の三性質はその最も重要なものである。俗に運、根と言つて、事業成功の三要素として居るが、運はその人の運命で、必しも計劃の良否にはよらぬことを言つたものであるが、これは別論として、鈍とはこの興味、の持續を云ひ、根とは根氣、即我慢力の強いことを意味せるものである。この三性質は進取的に事をなす場合には最も重要な性質であるが、それが我が進取的民族の最も優秀性として判者の認めたのは頗る適當のこと、言はねばならぬ。その次に來て居る自制力、熟慮、自信力等は、むしろ消極的性質として、保守的な傾向を有するものであるが、勿論事業遂行の上には、積極的な性質のみでは十分でないことも言ふまでも無い。従つてそれが積極的進取的な日本民族の第二性質として現はされて居ることは當然のこと、思

はれる。これに反して、それが保守的なことに於て、最も卓越せる支那民族の第一優秀性をなして居ることも尤も至極なことである。しかもこの保守的卓越性に於ても支那民族と大體相同じと云ふべく、他の民族に比較すれば斷然優位を保つて居る。

以上の説明と從來私が本書に於て強調し來つた、我が民族の特有の基調をなせる性格、即發展性と實行性とに比較すれば、自ら一致して居ることが明瞭であらうと思ふ。ボルチウスは民族の社會適應性としては日本人は遙に支那人に卓越して居るが、學者としてはむしろ支那人の方が適して居るかと思はれる様に考へて居る。それは彼の國に孔子孟子、朱熹陽明等の聖賢碩學を輩出せる點に於ては、或はボルチウスの言が當つて居るかも知れないが、しかしそれは必しも知力の卓越性を示すものであるとは言はれない。この點に關しては更に後に説明する所があるが、兎にかく日本人としては、何處までも實行的、實踐的、進歩的な國民であることは、このボルチウスの研究にも、最も明瞭に痛切に表現せられて居る。

然るに私の擧げた我が國民の最も優ぐれた一大特質は和にあると云ふことを強調したのであるが、ボルチウスの研究によれば、この點正に相反する性質を現はして居るかのようには思はれる。即ボルチウスの表によれば最後に擧げられて居るタクト即氣轉が利くと云ふ性質は、他民族と協調性を有すること、更に換言すれば、その目的の遂行に當つて他人を刺戟せず、他人の事情をよく考

慮してやつて行くと云ふ點については、我が民族は最も低い評點を與へられて居て、一點八八となつて居り、支那民族の三點九六に比して、非常に劣つて居るのみでなく、ハワイ民族が最も優秀性を示して居て、四點二八と云ふ高點が與へられて居ると云ふ所から見れば、我が民族のこの點に關する性質は一番劣つて居るのである。しかしこれは大に觀點を異にせる所から、かくの如き結果を示すに至つたことを深く考へなければならぬ。元來私の意見によれば、我が民族の和協性は萬國に比類のない我が國體の基礎であつて、その實行性と共に、我が民族の二大支柱であると、私は論じて來たのである。然るにボルチウスの表によれば、これが最劣の計數を示して居るのは、實に不可思議と言はなければならぬ。然るにこの一見相反するが如き事實も、更に深く考慮する時は、その反對は自ら消滅して、却つて緊密に相一致することを發見するであらう。抑も和と云ふことは、ある一團内のことであつて、その團體以外のものに對する時は、この精神は變じて排撃的のものとなる。我が民族が内自ら融和して、協心戮力、以て我國の國體を形成し、進んで國運の隆昌を希圖して來たことは、所謂生々發展の一大事實にこれを見ることが出来るが、しかし今日の世界の趨勢は、各國相對峙して居て、相協調する状態とはなつて居ない。否、世界はむしろ他國を排擠して自國の繁榮を期することを第一として居る。これは經濟的にも、政治的にも、特に軍事的に最も顯著な事實であつて、恐らく今後永久にこの人性は變化を受くることはあるまい。唯我々はどうか戦争と云

ふ慘禍から免れたいと希望して、世界各國の協調を熱望して居たが、それさへも今は却つて軍備競争時代を現出せんとしつゝあるのである。かくの如く各民族は各々自己の民族の發展を圖らんと爲には、内自ら和調協力して外に當らなければならぬ。換言すれば他民族に對して強いものは、内にては和協の力が強い。和協と排撃とはかくて相一致する。日本民族ほど和協心の強い民族はない。彼は和協の爲には如何なる犠牲をも決して辭する所ではない。しかし事一たび敵國に關する如き場合には、彼は亦死力を盡してこれと抗争するを辭しないのである。外に向つて抗争力の強いものほど、内に對しては和協の力も亦強いものである。外に對して何等反抗の力のないものは、内に對して協力一致の力は無い。現にボルチウスも日本民族の協同性については十分にこれを認めて居り、支那民族の非協同性についても亦十分にこれを承認して居る。今彼の言葉を引用して見よう。彼はハワイに於ける日本人とアメリカ本土に於ける日本人との比較の一節に於て、次ぎの如く言つて居る。

本土の日本人は全般の利益の爲に容易に結合し計劃する力、それはハワイに於ても彼等の傾向の一として承認せられて居る。彼等は、力を以つて、共同の取引によりて、高率の賃金を得ること、に於て、種々の利益を得て居る。生産業に地歩を得んが爲には、彼等は最初には極めて低い賃金に満足して居るが、これに對抗する丈の労働者が無くなる時を見計つて、彼等は結合

してその賃金の値上げを強要する。かゝる先見の明は又彼等をして自作農たるの地歩を作らしめた。彼等は協力によりて、以前は不毛の地であつたものを獲得して、その生計の資となすことを得たのである。中略。これと同じく彼等はその組織と協力とによりて、漁業の支配權をも得た。

日本民族はかくの如く共同一致して組織計劃を立て、他に對抗してよく勝を占むることが出来るのである。換言すれば排他的なるだけそれだけ他の一面に於ては協調的である。他の民族から見ればそれは排他的であらうが、内部に於ては最も協調的である。他に對抗してこれに打ち勝つ爲には、内部に於ては人の和を第一とする。孫子の所謂地の利よりも人の和が第一と云ふのである。我々日本人ほど親切な國民はない。しかし若し競争の相手と見れば、我々は何處までも死力を盡してこれと争ふて勝を制せねば已まないものであるが、内にありては努めて協心戮力するのが我々の特徴である。この點は支那の民族と正に相反するのである。ボルチウスはこの點を強調して、

我々は支那人の主として日本人に劣つて居る所は、團體的結合の感じの不足する所にあると思ふ。この感じは民族的に計劃の豊富と團體組織の能力との基礎をなすものである。

と論じて、此の點に關して日本民族が支那人に比して非常に結合の力の強いことを述べ、日支兩國

人の差異の一番大きな所はこの點にあると言つて居る。日本人の非協調的と云ふのは、一面卓越せる和協の美德を最も多く備へて居ることを忘れてはならない。たゞその境遇が異なる所から、攻撃的性質が遺憾なく發揮せられるのである。特に彼の移民なるものは、各國より各種の民族が集つて來て、各々自己の運命を開拓せんが爲に、眞鍮になつて活動して居るので、自然その態度が自己に不利なる他民族の排撃を企てねばならぬことになる。これはその境遇上實に已むを得ない所であると言はねばならぬ。恐らくボルチウスの判者達が、我が本國に來て、我が國民の辛抱強い和協的態度を見たならば、その相違の甚しきに驚くであらう。

斯く言へばとて我々は、日本民族が他の民族と協調することが出來ぬと云ふのではない。若し日本民族が他の民族と手を握る場合は彼等は何處までも己を虚うしてこれと緊密な協調を保つであらうことは、彼の日英同盟に於て、如何に彼等が協調的であつたかを見れば明瞭であらう。もし世界が擧つて協調して行くと云ふ氣運に向へば、彼等は全力を盡して、その實を擧ぐることは、彼の國際聯盟に對して彼等が如何に忠實であつたかを見れば明瞭である。不幸にして聯盟が我等とその認識を異にした爲に、彼等は敢然としてこれを脱退したのである。しかしその後にも彼等は猶これと協力することを惜しまないのである。彼等は自己の存在に脅威を感ずるが如き場合には、千萬人と雖も、我邁かむと云ふ氣概を以て、敢然としてこれに對抗することを辭しないの

である。たゞ正理正道を守る場合に於ては、彼等は萬事を犠牲に供してもこれと協調して行く。彼等には和を以つてその一特質として居ることはこれによりても知られるのである。

我が國民が如何に實行的で進取的であるかについて、今一つの事實を擧げねばならぬ。それは信頼性についての問題である。ボルチウスの表によれば、信頼性については他民族よりは遙かに勝つて居るとは言へ、支那民族に比して相當の劣りを示して居ることは、これも元來の進歩的性質から、又已むを得ないことと言はねばなるまい。我々は時と場合によりては國法を破ることも辭しない。自己の發展を計ることを主とする移民の場合に於ては、これも已むを得ないと思ふであらう。保守的で唯僅かに自分さへ立てば宜しいと考へて居る支那人、ボルチウスの所謂女性的な支那人にありては、専ら己を守る爲に、信用約束等を主として尊重するであらうが、進歩的な我が國民にとりては、それよりも一層重しとする何物かを目的として居るが爲に、すべてをこの目的の爲に犠牲とする。これが爲には、遺憾ながら多少信義を失することもあるであらうし、國法を破ることも偶にはあるであらう。勿論信義を守ることの必要なことは、我が日本人は十分に知つて居るし、又これを實行し得る。それが爲には生命をも捧ぐることを辭さない。されど陛下の爲とか、國家の爲とか、他に重大目的の存する場合には、實に已むを得ないこととして、自己の名譽をも信用をも犠牲に供するを辭しないのである。これは實行力ある我が國民が、多少信頼性に於て、缺くる所あ

る一原因であると思ふ。

ボルチウスは、ハワイに於ける各民族中にありて、日本民族の總體的に最も優秀なることを認むる一事實として、以上挙げた民族性の各に輕重の配點を行ふて居る。元來ボルチウスがこの社會評點尺を工夫せるは、氏が低能兒に關する精密な觀察から導き出された考であるが、氏の考の根本的な點は、精神缺陷者の日々の行動の觀察は心理調査に於けるよりも、その社會的無能を一層明かに示すものであると云ふ考に歸するのである。換言すれば、若し低能者がある一定時日の間、専門觀察者の觀察の下にあるならば、その檢診については、別に精神檢査を必要としないと云ふ信念から、進んでこれを常人に及ぼし、遂に民族にまでも及ぼして、前記の如き結果を得たものである。氏はこれによりて個人全體の優劣を定むる爲に、各性質の輕重を附することを考へ、遂に民族の優劣を全體的に決定する數字を示して居る。この輕重を附した氏の評點が果して適當なりや否やは、人によりて議論の餘地は十分にあるであらうと思はれるが、氏の配點は次の通りである。

特性 一	計劃力	6
同 二	暗示に抵抗力する力	3
同 三	衝動の制止	2
同 四	我慢力	2

同 五	感情の抑制	2
同 六	協調性	2
同 七	興味の持続	1

以上の外に信頼性を2とし、各特性の滿點5に各の配點を乗じたものゝ和は即百點となる。百點となればそれこそ理想的民族である。これによりて各民族の優劣の等差を附すれば次の通りとなる。

日本民族	八十五點五分
支那民族	八十二點六分
ポルトガル人	六十點
ハワイ人	五十一點四分
フィリッピン人	三十三點
ポルトリコ人	三十三點三分

次にボルチウスはその特性の優劣が、知能の優劣よりも大切であるとして、ハワイに於ける實際上の事實に徴して、これ等の得點の誤診でない事實を二三示して居る。

ボルチウスの挙げた第一の事實は少年犯罪者の比率である。これは少年犯罪者の數をその在

住人員の數に比して算出した率であるが、その比率は左の通りである。

日 本 人	〇・五八
支 那 人	二・二二
ポルトガル人	三・一
ハワイ人	五・〇
他 民 族	七・一

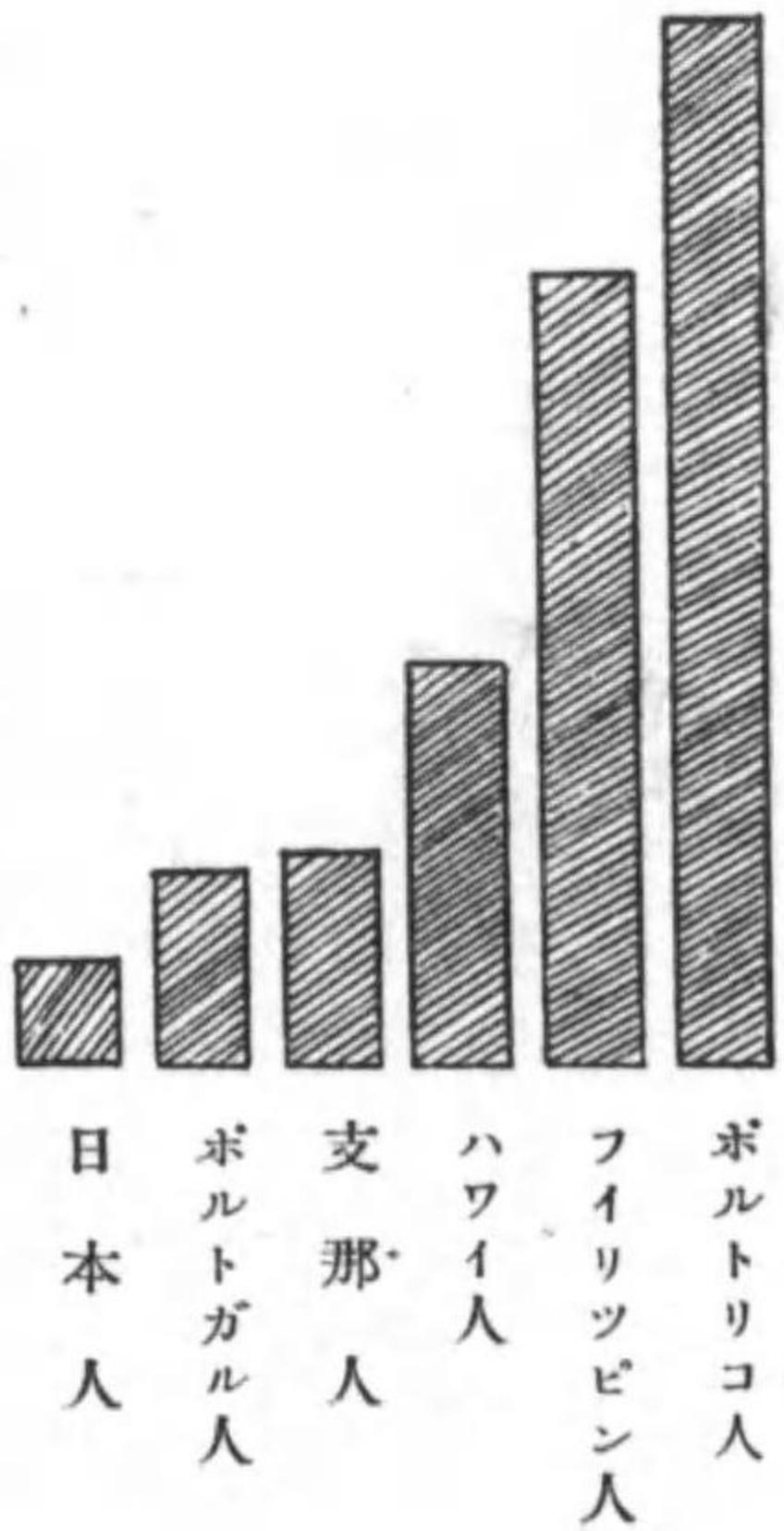
これは數年次に涉つて調査した結果が殆ど同一である。これによつて日本少年が自制の念に富み、その家庭の躰方の優良さを雄辯に語つて居るとボルチウスは言つて居る。第二に擧げて居るのは犯罪人の數及比率である。即次ぎの通り。

ハワイに於ける監獄在監者と人口との比率、

民 族	ハワイに於ける全人口	一九二二年に於ける在 監 者 數	千人に對する在 監 者 の 數
日 本 人	一一七、〇四七	六九	〇・五九
支 那 人	一二二、七四五	三六	一・五八
ポルトガル人	二六、〇九三	四〇	一・五三
ハワイ人	四〇、六〇六	一四五	三・五七

ポルトリコ人	六、三二九	五九	九・三二
フィリッピン人	三〇、七六三	二一八	七・〇八

右の表を圖にて現はせば次の通り、



第三には學校生徒について擧げて居る。その中の一は特待生の數である。

知能特待生と民族

國 籍	件 數	ソルンダイク得點	特待生の比率	英語試験得點
白 人	六五	七〇・二	一九・九	一〇・八七
日 本 人	六〇	六一・六	二一・九	七・四

支那人 四三 五九七 一八六 七七七

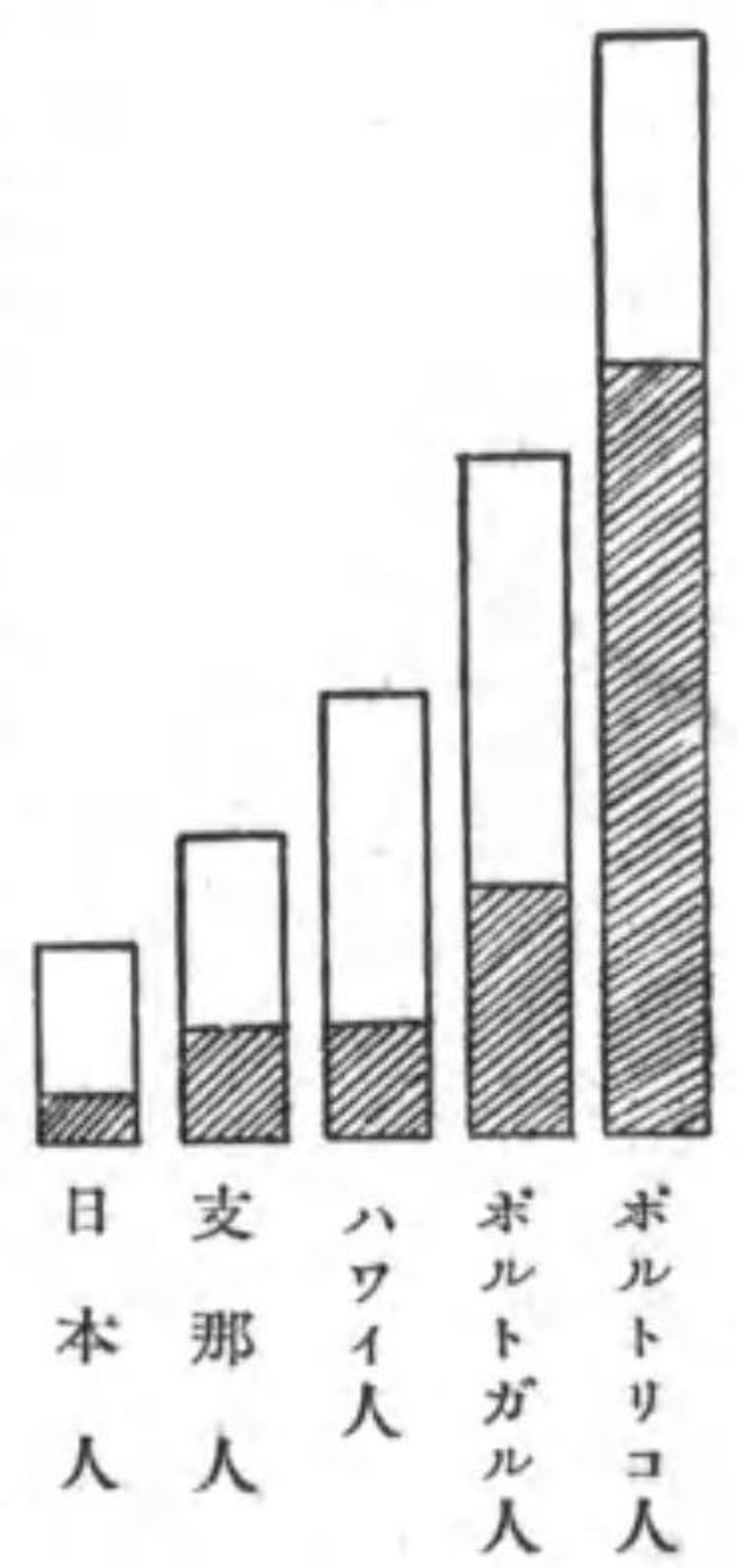
右に關してボルチウスは粘着力辛抱力勤勉の諸性質が如何に心理試験の缺點を補うて餘りあるものであるかを雄辯に語るものだと云つて居る。

他の學校成績の一つは、各國民の兒童の精神發達の後れたるものゝ比率の比較である。

精神發育遅延兒と民族

民族	在籍數	試験したる數	千分比	遅延兒	千分比
日本人	一三、六二四	六一	二・五八	一五	〇・六三五
支那人	四、七三六	二五	五・二八	九	一・九
フリッツピン人	一、五九〇	一一	六・九二	八	五・〇三
ハワイ人	八、八四六	七四	八・三七	一八	三・〇三
ポルトガル人	五、八九四	七八	一三・二二	三九	六・六
ポルトリコ人	一、二四七	二九	二三・二	二〇	一六・〇

この表の中第三段目の試験したる數と云ふのは、學業成績が劣等で、精神薄弱の疑があるので、心理試験を施した數であり、第五段目はその結果低能兒と決定したものの數を示し、第四第六の兩段は各その千分比を示したものである。これを圖示すれば次の通りである。



陰影を施した部分は精神薄弱兒

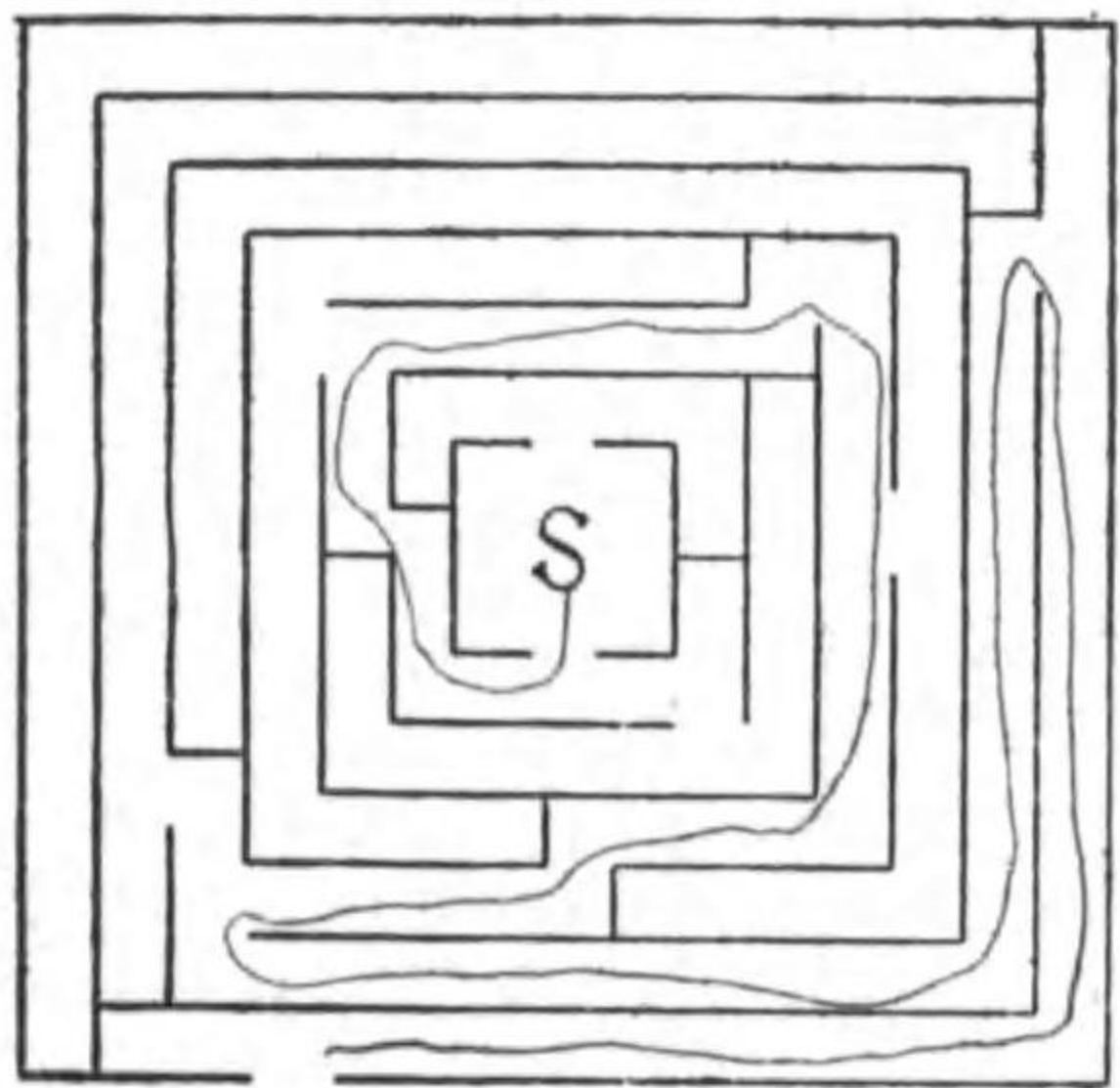
最後にボルチウスは經濟的發展に關して各民族の比較をなして居るが、それはあまりに複雑した事情が纏綿して居る爲に、一目瞭然たらしむることが出来ないから、これを省略する。

第三節 性格的検査

以上ボルチウスは社會的に日本民族の特徴を検討して、その優秀なことを證明して居るが、氏は更に精神検査の方面からこれと同様な結論に到達して居る。ボルチウスの精神検査は、知能検査と性格検査との二つに分けて居るが、知能検査については後の説明に譲り、こゝには性格検査について氏の試みた方法及その結果について説明する。氏は先づ知能の優秀性のみでは人生に處する上に極めて不十分であると考へ、従つて知能検査の結果のみではその人或はその國民の將來性を語るに足りない。それには更に他の要素を加ふる必要がある。ボルチウスの考によれば、性格

と特殊の技能である。そしてこの兩者は兒童期に於けるよりも、その後發達する。中にも性格は青年期に最もよく現はれ、特殊技能は壯年期に最も發達すると考へて居るが、氏はこの性格の重要なことを強調したとひ學習能力は優秀であつても、その性格が優秀でない場合には、世の中に立つて成功することは出来ない。民族としてもこれと同様である。民族全體としての知能は勝れて居ても、その民族性に於て多くの缺陷を有する時は、その民族の發展は期せられない。それは個人に於ても全く同様であると云ふ考から、この性格の検討に非常に慎重に考慮を廻らして居る。そして遂にその検査の方法としてメイズ法を採用した。メイズと云ふのは、紙上に上圖の如く、線を以つて迷路を描き、その中心より出發して礙りなく外に出ることが出来れば、それで成功とせられるのである。

迷路検査用紙の例(大)
(田中氏による)



メイズと云ふ語と迷路と云ふ語は音がよく似て居るから、我が國では迷路と呼ばれて居る。この迷路による検査が何故に個人若くは民族の性格を現はすこととなるかと言へば、元來前に述べた計劃力を始めとし、暗示性に動かされず、衝動を抑壓し、十分の慎重さを以つて、辛抱強く、遂にその出

口を求めて安全に外部に脱出すると云ふことは、勿論知能にも關係して居ることではあるが、その成否はむしろ意志と感情とに關するものが多い。而して性格なるものは、多分に意志と感情との所産に歸すべきである。ボルチウスが迷路検査を以てその性格を検する方法であるとしたのは、こゝにあるのである。これに關してボルチウスは次の如く言つて居る。

メイズを精神検査用を使用するについては性格の傾向を測定するに最も適當して居ると考へられる。メイズには種々の段階があつて易より難に及ぶようになつて居るが、始めてのものには先づその最も容易なものを與へ、次第に六かしいものに及ぼす。このメイズに對して最も賢明な對策は、その問題を前以つて研究して通過すべき道路を考案して置くことが一番必要である。如何に複雑な迷路と雖も、注意深い豫備的研究さへあれば容易に解決せられる。如何にしてこの迷路を複雑にするかの一般的觀念さへ得らるれば、その後はこの豫定された方案を注意して實行すれば宜しいので、被検査者は各曲り角や出口に遭遇する毎に、その記憶を新たにして、正しい道を進んで行けば宜しいのである云々。メイズ検査の性質はまた過誤に陥つた場合に起る性格的の傾向を考へることによりて明かにせられる。ある子供は新たなテストの提出によりて、容易く困惑を感じしめられる。一たび過誤を犯す時は、更に他の過誤をなす傾が多い兒もある。暗示性の強いものは開いた道の誘惑に抵抗することが出来ない

し、又これに反してあまりに自信強きものは、困難を輕視して、必要な觀察をも行はない。衝動的な兒童は屢惡路を擇び、然る後彼の行動を考へる爲に停止する。かゝる子供は一つのテストからの經驗を次ぎのテストに利用することの出來ぬものである。神經的な困惑は男兒よりも女兒の場合に多い。女兒は男兒よりもあまりに眞面目に考へ過ぎる。そしてその自然の衝動性や、暗示性や、神經質的な點が、その失敗の原因となつて來る。

テストの採點には仕事の速さを計算に入れない。被檢者が時間を計られて居ることを氣付くや否や、テストは慎重さと豫見とのテストたる性質を失つて、たゞ敏捷さをテストすることになつて仕舞ふ。出口を早く見付け、或はその過誤を速かに發見するものは、慎重な注意深い子供よりもいゝ點を得ることになる。このテストに於てはこの方面のことを特に考へてその重要さを無視したのであるが、特別に敏捷さをテストする爲には、別に他の多くの行動的なテストがある。

被檢者がその經驗をその方法修正に利用する程度を測定する爲に、このテストには遣り直し法を取つて居る。即過誤を犯した時には始めから遣り直させる。この遣り直すと云ふことは過誤の結果を自覺せしむるに役立つものである。如何なる過誤を犯した時でも、檢者はこれについて何等の説明をも與へない。たゞ犯した過誤に對しては減點する。そしてその總

結果は精神年齢で現はす。そしてこのテストを數千の兒童に試みた結果、これを標準化した。これらのテストでは計劃力は勿論檢することは出來ない。それは色々の仕事の場合で、この計劃の能力は相違するからである。軍陣に於ける計劃と、碁將棋に於けるそれとは、橋をかけたり、書籍を著述する計劃とは異つて居る。されどこのテストに於ては、固よりこれらの高い程度に於ける計劃力を測定する考でなく、たゞ簡単な具體的な仕事に應用せらるべき力を試すのみである。低度な計劃力を現はす人は、必ずその日常の仕事に於ても、確かにこれを示すであらう。多少年取つたものに對するこのテストは、かゝる能力を測定するのではなく、むしろ新事情に應じて豫見をなす個人的な傾向を測定せんとして計劃せられて居る。一口に言へば精神能力よりも性格を評價せんとするものである。

さればこれら一連のテストは、注意慎重豫見感情の平靜困難に對する辛抱力暗示に對する抵抗經驗を利用する力、優勝の希望等がその要素であることが容易に承認せられるであらう。我々はこれらのテストで、複雑な仕事に於て、これらの諸性質の強さを判定することは出來ないが、少くともこれらの性質をかゝる簡単な仕事に於て示すことの出來ないものは、日々の仕事を處理して行く時に際して、かゝる力を自分の欲するまゝに驅使して行くことが出來ないことだけは最も確かなことである。

以上はボルチウスの述べた所のものを意譯したものであるが、これによりて、大體このテストの如何なる性質のものであり、如何なる性格をテストしようと試てゐるものであるかを、知る事が出来ると思ふ。一言にいへば、各民族或は各個人が世に處して、事業遂行の力、換言すれば實行力をテストせんとするものであることを領會することが出来るであらう。そしてボルチウスはこのテストを發表して以來、これを採用した心理學者が諸方に於て非常に多くなつたと言つて居る。つまり以上述べた諸性能を一々に互りて、精密に測定することは、固より不可能であるが、これらの諸性能の合力によりて成立する各民族又は各個人の實行力の全體、換言すればその民族又は個人の性格を検討するものである。ボルチウスはこの力を總合精神力 (Psychomotor) と名づけて居る。ボルチウスがこのテストで檢した子供は、前にビネー法を多少かへた方法で檢査したもの、並に三百七十二人の日本人、支那人の十歳十一歳十二歳十三歳の男兒及女兒、並に百八十二人の九歳から十四歳に至るアメリカの男兒であつた。ボルチウスが以前用ひたビネー法によりては、顯著な差異は發見せられなかつた。たゞ白人の兒童のみが言語上の利益の爲に最も高い評點を得たことが明かにされたのみであつた。ポルトガル人、支那人及日本人については極少しかり支那人が勝つて居ること、並に男女兒については、何等顯著な差異も認められなかつたのである。然るにこのメイズの方法によると、これら民族の間に現はれた相違は一層明瞭である。その結果は第一

表第二表の通りである。

アメリカ男兒—182人 平均 I. Q. 99.2						
年齢	數	平均メーヅ	平均I.Q.	中間メーヅ	標準誤差	P.E.
9	30	9.4	99.5	9.33	1.49	.13
10	30	10.93	104.5	11.42	2.37	.21
11	31	11.38	99.5	11.63	1.84	.16
12	32	12.16	97.5	12.41	1.46	.12
13	31	13.03	97.0	13.40	1.88	.16
14	28	13.6	97.0	13.75	2.01	.18
支那男兒—200人 平均 I. Q. 95.3						
9	33	10.21	108.	10.33	1.85	.15
10	27	10.5	100.	10.875	2.49	.23
11	35	10.8	94.	10.81	2.0	.16
12	37	11.34	91.	11.625	2.02	.16
13	32	11.92	88.5	11.875	1.75	.15
14	36	12.9	92.	12.91	1.77	.14
日本男兒—208人 平均 I. Q. 101.9						
9	39	10.22	108.	9.83	1.7	.13
10	27	11.44	109.5	11.0	1.92	.18
11	37	12.03	105.	12.0	2.06	.16
12	36	12.4	100.	12.55	1.71	.14
13	27	12.77	95.	13.0	2.15	.20
14	42	13.35	95.	13.15	1.63	.12
ポルトガル男兒—97人 平均 I. Q. 91.5						
9	31	9.14	96.5	9.165	1.78	.153
12	32	11.22	90.	11.415	1.77	.149
14	34	12.4	88.5	12.417	2.02	.165

右表によりて先づ支那の男兒と日本の男兒とを比較すれば、九歳に於ては殆ど相等しいが、以後十・十一・十二・十三・十四の四ヶ年に於ては、日本男兒の方斷然優秀な成績を示して居る。これは中間數に於ても同様である。ポルトガルは唯九・十二・十四の三年しか得られなかつたが、何れの年齢に於ても、支那人よりも劣つた成績である。アメリカ男兒と日本男兒と比較すれば、九・十一・十二の四歳に於ては、日本の方が優秀であるが、十三・十四の兩年に於ては、アメリカ男兒の方が優つて居る。しかし爾後の得點が果してどうなるかは全く不明で、興味ある今後の研究としてこれを期待するとポルチウスは言つて居る。

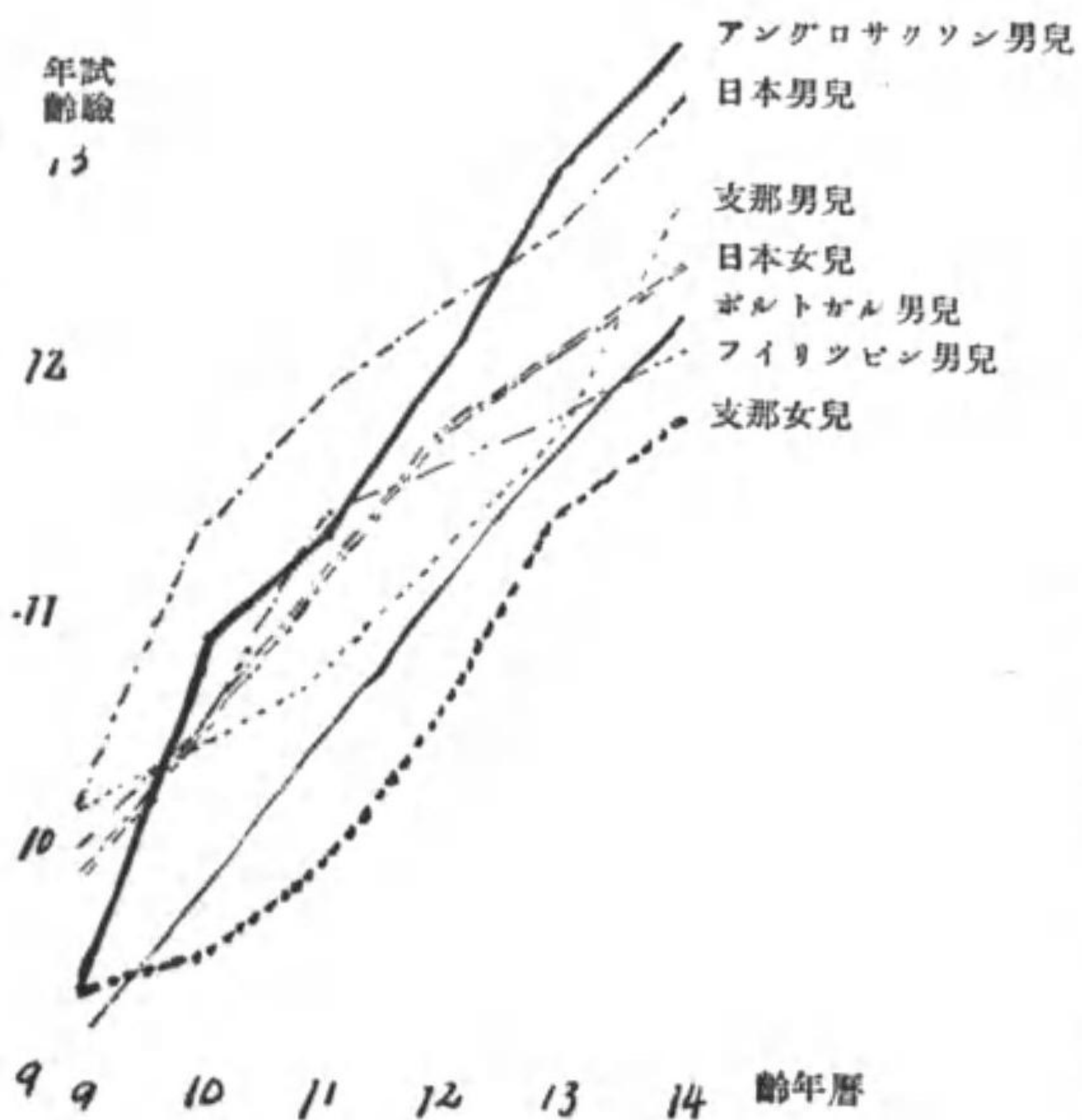
ポルチウスは又混血ハワイの男兒、支那日本の女兒及フィリッピンの男兒の檢定成績を次の如く發表して居る。

左表を檢するに日本女兒は何れの點に於ても支那女兒に遙かに優つて居り、フィリッピン男兒に比するも或は優り、或は劣り、通じて伯仲の間にあると言はねばならぬ。これを日本の男兒と比較すれば平均中間とも各年齢に於て少しづつ劣つて居る。

混血ハワイ男兒—95人 平均 I. Q. 100.14						
年齢	數	平均メーズ	平均I.Q.	中間メーズ	標準誤差	P.E.
9	29	10.53	111.5	10.68	1.77	.157
12	33	12.07	97.	12.3	1.81	.15
14	33	13.06	93.3	13.375	1.75	.175
支那女兒—188人 平均 I. Q. 88.9						
9	29	9.43	100.	9.0	2.11	.187
10	32	9.58	91.5	9.25	1.75	.148
11	31	9.95	87.	10.125	2.14	.183
12	35	10.61	86.5	10.90	2.37	.191
13	30	11.53	85.5	11.75	2.37	.206
14	31	11.95	85.	11.93	2.18	.186
日本女兒—198人 平均 I. Q. 96.8						
9	29	9.76	103.5	9.875	3.1	.19
10	34	10.21	98.	10.415	2.91	.18
11	33	11.74	102.5	11.665	2.36	.196
12	39	11.8	95.	11.8	1.91	.146
13	27	12.17	90.5	12.166	1.95	.179
14	36	12.85	92.	12.65	1.93	.154
フィリッピン男兒—156人 平均 I. Q. 97.67						
9	23	9.61	101.	9.375	1.62	.161
10	25	11.06	105.	11.25	1.8	.172
11	25	11.70	102.	12.187	1.98	.189
12	24	11.73	94.	11.65	1.77	.172
13	20	11.725	87.	12.0	1.82	.194
14 及以上	23	12.46	89.	13.68	2.30	.228

支那女兒に至つては、何れの點に於ても日本女兒に劣り、フィリッピン男兒と比較しても、これと

同様の結果を示して居る。



この表に於て最も面白いのは混血ハワイ男児である。即日本及アメリカ男児の得點と殆ど相

若くものであるが、それは主として九歳に於ける得點がこの兩者よりも著しく優れてゐるに基く。一般に混血ハワイ男児は、米支兩國人の長所とハワイ民族の長所とを併せ傳へた爲であらうと考へられて居る。

ボルチウスの今一つ興味ある統計は優・中・劣三得點者數の配布である。これは日本男児を標準とし、その中間數以上の百分比と、七十五パーセント以上優者の百分比(これをQ²とする)と、二十五パーセント以下の劣者の百分比(これをQ¹とする)とを比較したものと

である。即その結果は次表の通りである。

民族名	數	下位百分比 Q ¹	中間百分比	優位百分比 Q ²
アメリカ男児	182	28.	50.	22.6
支那男児	200	37.5	35.4	19.
ポルトガル男児	97	47.5	28.8	14.9
ハワイ男児	95	26.3	48.5	27.4
日本女児	198	37.4	42.	23.8
支那女児	188	51.	29.8	13.8

37.4 と稍隔つた數字を現はして居るのは、男女の間に於て固より當然のことと言ふべきであるが、日本の兩性に於て相近似した數字を示したことは、非常に喜ぶべきことである。

ボルチウスのサイコシナージック・トレイツと命名したのは、以前に私は總合精神力と譯して置

いたが、それはモット常識的な言葉で言ひ表はしたならば、私はこれを実行力と言ふべきものであると思ふ。私は日本民族の一つの特性を実行性としたのであるが、この実行性なるものは決して單純な力では無いのである。実行性の包含する諸性能を私は嘗て、計劃力、勇氣、忍耐力（持久力）、自制力（不動性）の四性能を含むものとしたのであるが、彼のボルチウスの社會評點標準に擧げた諸性能と相等しきもので、此は主としてこれを心理學的に述べたものである。そしてその關する所は知能と意志と感情とが皆相協力して始めて成立する力である。さればボルチウスがこれを總合精神力と命名したのも洵に適當な名稱である。ボルチウスは更に進んで、このテストに對する各國の兒童に對する態度に言及して、日本兒童が他民族の兒童に對して、遙かに優秀な成績を示したことの決して偶然でないことを指摘して居る。「これらの諸性質は唯單に數的に表明せられて居るのみでなく、テストに對する子供各個の反應の性質によりても現はされて居る。日本兒童の反動は大體極めて眞面目な態度で特徴つけられて居る。前以つて熟慮することが殆どすべてに於ける規則であつた。問題を解決する成功は、多くの場合、犬の如き執着力に歸せられたことは否むべくもなかつた。幼兒にありても、與へられた境遇にありて失敗が宣せられた時には、その仕事を遺棄することを厭ふ狀がありありと認められる。過失を犯す場合にも、一層の慎重さと注意とを以て、次ぎの問題を解決せんとする明瞭な決心を表はすものが多く、落膽の狀態を現はすものは

あまり多くはない。日本兒童はその心の敏捷さに於て、支那兒童と同様と見られることはない。も拘らず、その成功はその一層優良な性格的な平均性に歸せられるのである。支那の兒童はその感情を現はすこと多く、その失敗はある場合には、明かに混亂失望の兆ある時に起つて居る。過失は日本兒童に慎重さを促がすに反して、支那兒童には感亂を誘ひ、その結果に相違を來たさしむる。反省は支那女兒に對しては一層困難である。これに對して日本兒童は魯鈍な様に見える。しかしながら、久しく觀察して居ると、それは魯鈍ではなく、堅實であるとの決論に到達せざるを得ない。彼等の眞面目な態度は唯成功せんとする決意の表出である。」と論じて居る。これは實に日本兒童従つて日本民族の特性を最もよく道破したものである。

不幸にしてボルチウスは日本民族の第二の特性たる和の性については、何等檢定の方法を案出することがなかつた。否却つて調和性の最も乏しい民族であることを社會評點に於て證明してゐることは前既に説明した通りである。しかしながら當時私の述べた通り、それは外部に對する競争の場合に於ける態度であつて、その反面に於ては、強い和協性の存在を見逃がしたものである。これは東洋の二大民族として最も優秀を誇る日支兩民族について、ボルチウスの論ぜし所の中にも、支那人の利己的で非協力的であるに反して、日本民族が非常に和協的であることを言つて居る所に、この特性は十分に現はれて居るのである。唯それが民族として他の民族に對する場合に著

しく侵略的になつて來るのである。これは當然の理である目的を遂行せんとする場合に、他民族に對しては自然にこれを打倒せんと努力するに至ることは已むを得ないことである。たゞしかならぬ事柄である。米國に於ては、日本民族は非常に畏れられ、米國人が日本人を排斥するのは、その賤劣なるが爲でなく、その力あることを恐れるが爲である。米國のみでなく日本の植民地のある地方では皆同じく排斥を受けてゐる。これは日本民族發展の爲には大なる障礙ではあるが、しかし一面から見れば、我が民族の優秀性を語るものである。唯我々としては、出来るだけ他民族と調和を保つことに注意し、露骨に侵略的な言説態度を現はすことを避け、他民族の利益を圖ることを心掛け、目前の小利小益よりも、永久の大利益を受得するを主とすべきである。

日本國民の特性を論ずる上に見逃がすべからざるものは、その國民の知能に關する事柄である。我が國民の實行性に關しては、心理學的に十分に證明せられたのであるが、その知識については未だ何等の検討を経て居ない。我が國民の知能は果してどんな程度のものであらうか。これは須らく各種の方面から検討しなければならぬ大問題である。

實行には知能を要することは言ふまでも無い。如何に意志が強くとも、體力があつても、知能が優れてゐなければ決して大事業を遂行することは出来ない。さればボルチウスもその社會適應

性を測定する各性質の第一に計劃力を置いて居る所以である。計劃力とは將來の事情を考へ、現今の境遇からこれを推測して、これに適應する様に、その組織方法を工夫する性能を言ふものである。従つてそこには多分の知的性質を要するものである。勿論これを遂行して行く爲には、心の靜平なること、困難に堪ゆること、これを克服する力を要すること等、多くの特別の性質を要する譯であるが、その始めに於ては計劃的な知能を必要とする所以である。のみならずボルチウスは特にこの知能の力を重んじ、これが配點に6を與へ、その他の性質には3・2・1點を與へて居るに過ぎない。これによりてもある事柄を遂行して行く上に、如何に知能が重要な位置を占むるかを推知すべきである。

日本人の知能について學術的に検討したものはその数があまり多くはない。特に今日最も優秀な知能を有してゐると考へられて居る歐米人、就中北歐人と比較研究したものは甚だ尠い。上來引用し來つたボルチウスも民族的に知能比較をなして居るが、それは主として東洋民族についてであり、歐米民族との比較をなした點は甚だ尠い。この點に特に重きを置いて研究したものは、我が田中寛一博士の名著「日本民族の將來」であると思ふ。よつて私はこれらの研究を主として、我が日本民族の知能について研究の結果を總合して見たい。

第四節 日本國民の知能

民族の知能を検定するには中々困難であるが幸にして田中寛一博士の「日本民族の將來」と題する名著の中には、多くの測定と社會統計とが擧げられて居るので、私は博士の承諾を得て、その材料を自由に使用させて頂くこととした。これと共にボルチウスの著書中にも種々参考となるべき材料があるので、これらを併せ考へてこの節を記述したいと思ふ。

「日本民族の將來」の第十章第五節に、「日本人の知能」と題する一節がある。これは米國加州にあるスタンフォード大學教授ターマン氏が、同大學助教授ダーシー氏と共同して、日本兒童男二百九十二名、女二百七十六名、合計五百六十八名について、その知能を検査し、これを他國のそれと比較したもので、これらの兒童は皆四ヶ年米國の學校で教育を受けた、十歳から十五歳の兒童に限られたものである。元來米國には世界各國の人々が移住して來て居るので、これらの比較研究をなすには最も都合がよい。従つて種々の材料が多く蓄積せられて居るから、これらの比較が容易に出来るのである。このターマン・ダーシーの研究は日本人の最も多く移住して居る米國西部で特に行はれて居るもので最も多く信頼するに足る研究である。そしてその研究の方法は、スタンフォード大學の改訂案によるビネー法であるが、一部分には米國陸軍の採用せるペーター法をも併

用してゐる。

ビネー法による検査の結果は、平均知能率男兒九〇・五、女兒八九・四、總平均九〇・二となつて居る。この結果による時は、南歐人並に東歐人には遙かに優つて居るけれども、北歐人には餘程及ばないことになつてゐる。しかしこれを大都市、小都市、町村に分けて比較する時は、北歐人と殆ど伯仲の成績である。即次表の通り

地方別による知能率比較

民 族	大都市	小都市	町及村
日 本 人	99.3	87.6	86.3
北 歐 人	100.3
フィンランド人	90.3
ス ラ ブ 人	85.6
南 伊 太 利 人	77.5

のそれに近く、南歐東歐のそれよりも遙に優秀であることが示されてゐる。

上表の大都市と云ふのは、桑港、オークランド、ロスアンゼルス、三市であり、小都市と云ふのは、プレスノ、サクラメント、スタクトンの三市であり、町及村と云ふのは、その他の田舎に住んで居る兒童である。蓋し大都市に住する父母は才幹の優れたものでなくてはならないし、小都市に住するものは、これに次ぎ、町及村に住するものは競争の少い静かな所だから、自然左まで才幹の優れたるないものが住する様になる。従つてその子女に於ても、その遺傳と家庭の躰が餘程影響を及ぼして、大都會に住する兒童の知能率は高くなるのであらう。何れにしても、日本人の知能は北歐人

次に父母の職業によつて、その子女の智能率に差異があることが、従来の智能検査に於て示されてゐる。ダーシーもこの點に留意して、兒童の父の職業を五類に別ちて、その智能率を求め、これを米國兒童と比較してゐる。即左表の通りである。

父の職業別による智能率の比較
(ダーシー)

父の職業	日 本 兒 童	米 國 兒 童
1. 専門家又は大實業の支配人	110 (8.4)	115
2. 小實業の支配人	94 (26.1)	96
3. 熟練を要する職業	91 (8.4)	81
4. 多少熟練を要する職業	88 (40.9)	74
5. 熟練を要しない職業	82 (16.8)	71

表中日本兒童の項の括弧内にある數字はその職業に従事せるものゝ百分比を示したものである。又表中に於て専門家と云ふのは法律家、技師、醫師を含み、又小實業家と云ふのは小規模の商業、製造業、旅館經營者等で、3の熟練を要する職業とは裁縫師、大工、技手等を指し、4の多少熟練を要する職業と云ふのは給仕、入門、衛理、髮師、小農園の經營者を含み、熟練を要しない職業とは單なる小作人、労働者を指すものである。

以上の表によれば第一二の兩群に於ては日本兒童は純粹の米人兒童に比しては多少劣つては居るが、殆ど伯仲の間にあると言つてもよい。第三四五の三群にありては斷然優つて居ることを見るであらう。それはこれらの人々は今後の發展の基礎を定めんが爲に、これらの職業に従事して居るものが多いと想像せられるから、優秀な智能を有するものが多く混入して居るのである。

然るに米國民のそれらには斯くの如き優秀な人間の混入が無いのであることを思へば、この相違は當然のことである。

右の二調査は大體ビネー法によりて施した成績で、その方法は主として英語を用ひ、しかもこれを検査したものは米人であるから、日本兒童としては不利な立場にあることは言ふまでもない。

何となれば、日本兒童は米國に生れたものではあり、四年間も米國の學校に於て、米國流の教育を受けたものではあるが、それでも、家庭にありては、その父母は常に日本語を用ゆるのみでなく、米國の學校から歸つては、又日本の語學校に通つて、二時間許りも日本語の教授を受くることを例として居るものなれば、英語の使用に於て不利なるを免れないし、又日々の課程に於ても、過重の負擔を負はせられて居る。従つて検査の成績に於ても不利な點があるであらうと想像せられる。さればダーシーは此の點を察して、英語を用ひない検査の方法、即米國陸軍で用ひて居るペーター法を使用して、検査した結果は、上表の如き成績を示して居る。

日本人と白人との智能の比較
(ダーシー)

年齢	日本人	米國人	伊太利人	西班牙人	葡萄牙人
10	60.2	60.5	—	—	—
11	70.0	66.0	—	—	—
12	79.5	68.3	54.0	52.7	52.5
13	82.0	—	—	—	—
14	82.0	—	—	—	—
15	84.0	—	—	—	—

右の表による時は、十歳に於て日本人は米國人よりも少しく劣つて居るがその差は僅少である。然るにその他の年齢に於ては斷然米國人を壓倒して居る。たゞ十三歳以上に於ては、米國人についての調査が無い。その他の南歐諸國についてはたゞ十二歳の検査成績があるのみである。しかしこの年齢に於ける成績を比較して見れば、日本人は南歐諸國民よりも斷然頭角を顯はして居る。これはこの他の諸検査についてもこれと相似た成績を示して居る所から見れば、日本國民が南歐諸國民に比して、その智能及その他の諸性格に於て遙に優秀であることは毫も疑ふべき餘地は無い。

かくてダーシーの結論は次の四項目に要約せられて居る。

- 一、日本兒童は言語が重要な役目を演ずるテストでは著しく米國の兒童に劣つて居る。
- 二、言語をあまり必要としないテストでは、日本兒童は米國兒童と等しい成績を示すか、又は優つて居る。
- 三、推理のテストでは日本兒童は米國兒童と優劣がない。
- 四、速かな學習に關するテストでは、日本兒童は米國兒童よりも著しく優つて居る。

この四項目の結論は最も正しい結論と思はれる。純然たる精神上の作用に於ては、我が國人は米國人と略相等しいと思はれるが、動作に於ては慥かに彼等よりも敏捷であり、精神上の動作に於

ても敏捷であることは、我々の常に觀察してゐた所である。それは第四項目が明かにこれを示してゐる。たゞ持続力の問題になると、體力に關する所が多いから、我々の不利に歸する様に思はれる。

ダーシーは更に四百有餘名の受持教師が、各兒童について日常觀察せる結果を總合し、米國兒童と比較して、次のように述べてゐる。

- 一、學習態度に於て日本兒童は米國兒童に比して著しく勝つてゐる。
- 二、圖畫音樂書方綴字算術體操に於ては、稍優つてゐる。
- 三、讀方歴史地理科に於ては劣つてゐる。

この教師の觀察の結果は當然である。學習態度に就いては、日本人の仕事に對する態度の眞剣なるに準じて、米國人のすべてに對して自由なるに比して、當然眞剣であるべきことは想像に難くない。しかしあまりに窮屈になり易い弊を伴ふことも注意せねばならない。第二項は動作に關するものが大部分を占めてゐるので、日本兒童の優るのは當然である。綴字算術に關しても存外多く動作に關する所があることをも注意せねばならぬ。そしてこれは共に多く言語を要しないものである。第三項に挙げた各科目は主として英語を必要とするものなれば、日本兒童の劣るのは固より當然のこと、言はねばならぬ。

ボルチウスは以上に引用したダーシーの豫備報告について、ダーシーが日本兒童に有利な報告をしたのは、日本兒童が學校に於て柔順で、勉強好きで、その目的に専心な所から、教員達に好かれてゐる自然測定の場合にもこの心が働いて、多少その測定が有利になつてゐるのでは無いかと考へてゐる。かくてボルチウスは諸他の研究を総合した結果を次の如く歸納してゐる。

これらの研究から我々の到達し得る一般的結論は、學校成績の基礎をなす所の能力に於て、北歐人は南歐人に勝つてゐる。この北歐民族と他の歐洲人との間の差は明確に決定することは出来ない。それは色々の要素がその結果をばかすからである。しかしながら一方向を指す數個の研究は上の事實を確定することは、殆ど争ふの要なきが如く思はれる。

歐洲の兒童と東洋兒童(註主として日本と支那とを指してゐる。)との間には斯くの如き相違が明確ではない。東洋の兒童には言葉の上の不利があるにも拘らず、その得點は斷然南歐の諸民族の平均以上にある。然るにアメリカ生來の白人種及北歐種の兒童に比すれば極めて僅かにその下位にある。彼等の米國の學校課程の要求に適合する程度は白人兒童にほんの少し許り劣つてゐる。そしてその長所は明かにその記憶力の優秀なる點に存してゐる。米本國の研究によれば學習能力に於ては日支兩國の間には何等著しい相違は無いが若しあるとしたならば、支那人の方に多少歩がある位のことであらう。

これはボルチウスが種々の研究を総合しての判斷であるが、しかしそれは彼自身の研究からも、これと同様の結論を抽出することが出来ると思はれる。勿論ボルチウスのこの結論は彼自身の用語にも明かな様に、兒童の學習能力に限られて居るもので、廣く民族の社會適應性のそれでないことには、一應注意を喚起して置くを要する。ボルチウスはかくてこの學習能力の民族的比較について各種の方面から彼自身の研究を進めて行つて居るが、その第一はビネー法に多少の變改を加へた方法、第二は診斷的方法、第三は學校に於ける進級年齢の研究、第四は形態と集合テストと名けたものである。勿論これら四方法の何れに涉つても、その方法なり、結果について詳細な紹介をなすことは不可能なことであるから、たゞその概要を引用するに止める。

ボルチウスのビネー法による検査の民族は日本、支那、ポルトガル、ハワイの四民族であり、男女については、日支兩民族は男女兒共に含んで居るが、ポルトガルとハワイの兩民族は男兒のみである。その測定の成績は次表の通りである。

ひ知ることが出来るると云ふのである。次の表は日本支那・ポルトガル・ハワイの男兒の教育率を比較したものである。

年齢	人数	民族性	男兒
9歳	42	日本男兒	93.3
	35	支那男兒	91.8
	35	ポルトガル男兒	88.4
	35	ハワイ男兒	91.4
12歳	37	日本男兒	87.4
	37	支那男兒	89.3
	35	ポルトガル男兒	86.3
	35	ハワイ男兒	85
14歳	39	日本男兒	85
	35	支那男兒	85.3
	35	ポルトガル男兒	84.2
	35	ハワイ男兒	82.9

註 教育率 = $\frac{\text{標準年齢}}{\text{暦年}}$

右の表によれば九歳の場合に於ては、日本男兒の率が多少高いが、十二歳・十四歳の場合にありては、支那男兒の方が少しく高率を示して居る。

更に形態集拾テストと稱するものによりて各民族の知能を測定して居る。これは主として機敏の度を検するに適するものとされて居る。其の成績を示せば次の通りである。

民族性	数	男兒	数	女兒
ハワイ人	268	102.4	263	94.2
支那人	118	102	158	95
日本人	207	101	131	101.6
アメリカ人	724	100.8	795	96.8
ポルトガル人	102	91.6	143	92.3

上のテストによれば男兒に於てはハワイ人が最高位を占め、支那人・日本人・米人が少數の差を以てそれぞれ相次ぎ、ポルトガル人は大差を以て最後に來てゐる。女兒にありては日本女兒が最高位を占め、米・支・ハワイと相次ぎ、ポルトガル女兒が比較的、大差を以て矢張り最後に來て居る。最後にポルトガル人はホーグ博士の未發表の調査表を引用して居る。それによればアメリカ人の1007を最高とし、支那人これにつぎて、朝鮮人は、以つてその次に來り、日本・ポルトガル・ハワイ少差を以て相次ぎ、フィリピン・ポルトガル人は著しい差を以て最後に來て居る。但これはハワイの公立學校の生徒について檢したものであるが、その中米人生徒は優秀な準備學校の生徒をも含んだものである。

ポルトウスはこれらの測定を概括して、各民族間の差別は顯著でないが、日本人と支那人との比較に於ては共に優秀な得點を示して居る。しかしその間に於ては、多少支那人の方に歩が、いゝ所がある。しかしながら氏が最初に指示した社會適應性に於て、日本人の顯著な優秀性は、かゝる學校に於ける學習能力の極めて輕微な差異を以て説明すべからざる事柄である。又腦容量に於いても日本兒童の示した優秀性を説明することは出来ない。されば我々は所謂一般知能檢査の如

きもの以外に觀點を發見して、以て日本民族の社會適應性を研究しなければならないと云ふので、かの總合精神力に關する學說を發表し、メーズ測定法を案出したのである。その測定の結果は既に述べた通りである。

勿論ボルチウスは前記ダーシーのカリフォルニアに於ける測定を引用し、これと自己の測定とを比較して、ダーシーがカリフォルニアに於て得た結果と我々がハワイに於て得た結果との相違は甚しいものではない。ダーシーの日本人について得た田舎地方の得點は82.6で、ハワイに於て得たものは85.1である。されど大都市並に市街を含むダーシーの結果は80.8に上つて、ハワイの成績より遙に上位にあり、特に大都市のものは88.8得點で斷然ハワイの成績に優つて居る。しかしそれは恐らく環境の相違に歸せられるであらう。たとへばハワイの大都市に住して居るものはアメリカに長く住んで居ると云ふ様な關係が影響して居るだらうと言つて居る。しかしそれよりも田中寛一博士の遺傳的素質によることが大なる爲であらうと云ふ意見の方が適當であらう。蓋し大都市に活動し得るものは比較的知能の優れた父母が多いからである。しかし何れにしても知能率は支那人に比しても、又北歐民族に比しても、我が民族が斷然優つて居るとは思はれない。従つてこれを以つて我が日本民族の特徴として擧ぐることは不適當であると自分は思ふ。但我が日本民族の三大特徴として私の擧げた、生々發展の氣魄による進歩性と、これに伴ふ實

行性と和協性とは共に賢明な知能を要することは最も明かなことであるが、この點については、我が日本民族は世界優秀民族の知能と相伍するに足ることは、一般知能の測定の結果によりて斷言することが出来る。

第三編 新教育概説

第一章 知識の收得の二要素

第一節 總 説

我々は第一編に於て教育が我が國の歴史に如何なる影響を及ぼしたかを觀た。次で第二編に於て我が日本民族の特徴は何れにあるかを觀察した。その中には、心理學的に考察した研究の結果をも包含せしめて置いた。この目的は我が日本民族の教育を如何にせば可なりやと云ふ國家的一大問題を解決せんが爲である。されば本編に於ては先づ正しい教育とは如何なるものなるかを考察し、然る後我が日本民族に最も適當せる教育の方法について論究して見たいと思ふ。

教育は人間の存する所には必ず存して居る。それは人間が次代の我を立派な我に育て上げんとする自然の慾望に基くものである。たゞ主として教育を行ふべき場所即學校なるものは、ある程度の文化の進歩した後でなくては現はれて來ない。それは特に文字が發明せられ書籍が出來

た後のことである。現に歐米の學校なるものは、ギリシヤにその端を發するものであるが、これはギリシヤ市民が奴隸を使用する様になつて、閑暇を見出した爲に、ある人々が其處に集まつて、書籍を読み講義を聽いてゐたものが、次第に發達して、遂に今日の様な學校となつたものであると言はれて居る。従つて英語の所謂スクールと云ふ言葉は、閑暇の意を有するギリシヤ語から轉用せられた言葉だと説明されて居る。かくて學校なるものは書籍を読み講義を聽く場所であると考へられるに至つたことは自然のことである。されどこの學校なるものが、幼者青年に對して教育を行ふ場所と考へられるようになつて、こゝに第一の變化をなし、特にそれが一般化せられるに至つて、更にその意義を異にするようになつて來た。それは初めの學校は上流階級の市民の、一種の娛樂として書籍を読み講義を聽くと云ふのであつたが、進んで兒童青年を教育すると云ふこと、更にこれを廣く一般の庶民の爲にする教育場とするようになつて來たので、こゝにその内容に非常に相違を來たしたのである。つまり一種の娛樂場であつた學校が、實用化せられ、一般化せられた結果として所謂教育改革家と稱せられる人々が現はれて、その内容方法に變改を加ふるに至つたものである。若し學校を從來の如く富有な上流階級の人々が、その趣味の爲の消閑の具たらしめたならば、別にこれを變改する必要は無かつたのである。然るに兒童等を收容してこれを教育するの結果として先づコメニユース等の圖畫の輸入となり、或は實物の觀察となり、これにソクラテス

の問答法を應用して、ペスタロッチの開發教授法が唱導せられ、更に小學校が一般民衆の教育所となるに從つて、心身發育上の原理と生活上の實用主義とが結合して、遂に今日の最も進歩した活動主義或は勤勞主義若くは體驗主義などの生活教育の學説が擡頭するに至つたのである。しかしこれは未だ實際上、學校教育の全貌を變改するまでには發展して居ない。今後の教育上一つの大問題として、如何にこれらの教育精神を實現せしむべきか、我々教育者の研究の對象として殘されるであらう。

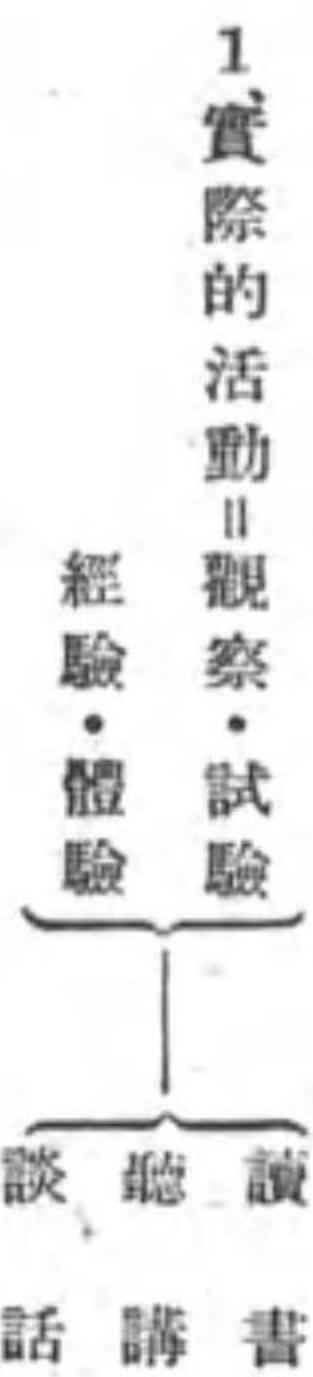
實際多くの經驗を積んだ大人にとりては、讀書も講義も、大變有益であり、又興味もある。しかし何等經驗のない幼少な兒童に取りては、讀書や講義よりも、むしろ實際經驗の方がどれだけ大切なのか知れない。幼ければ幼いほど、實際經驗が必要である。ルソーのエミールの様に、書籍は十五歳に至るまでは用ひなかつたと云ふのは少し極端かも知れないが、しかしそれほど實際活動を教育上に重用したことは、實に非常な卓見と言はなければならぬ。何となれば人間が眞の知識を得る唯一の方法は、自ら心身を活らかして外事外物に接觸する以外にはないからである。文字や言語を通じて得る知識は間接の知識であつて、從つて眞の知識でも無ければ、幼者に取りては、全く意味の無いものである。唯經驗のある大人に取りては、短時間に廣い知識が得られるのみでなく、種々の指導や暗示を受けることが出来るので、非常に調法なものである。教育者は大人であるか

ら、自己の經驗を幼者にあてはめようとして、教育上文字言語を以て、殆ど唯一の方法であるが如く考へ來つたことは已むを得ないことではあるが、しかし幼者の心身發達の原則を遵守するものは、あまりに早く文字言語の教育方法を取ることは危険と考へざるを得ないのである。今知識收得の方法について、以上の所論を要約すれば、次ぎの如き圖表が得られる。

知識收得の方法

直接方法

間接方法



2, 思考

第二節 直接方法

支那に百聞不如一見と云ふ言葉があるが、これは實際よく得識の方法について道破したもので、觀察の重んずべきことを述べたものである。されど一見と云ふのも、實は唯眼ばかりを使用する意味のものでなく、あらゆる身體上の機關を役して、外界事物に直接に接觸してこれを識得せねば

ならぬと云ふ意味に解しなければならぬ。観察と云ふ語もこれと同様で、観と云ふのは眼をもつて事物をよく観ると云ふ意味であるが、しかしながら外物はたゞ眼でもつて観たゞけでは不十分である。事物の性質は視覚によるだけのものではなく、重量、粗滑、硬軟、嗅味、音響等種々の性質を有して居る。我々が外物を識得すると云ふのは、これらの諸性質について知る所がなければならぬ。さすればたゞ眼をもつて観ると云ふことのみでは十分でないことは言ふまでもない所である。あらゆる覺官を勞してその諸性質を知らねばならぬ。さうすれば観ると云ふことは單に眼をもつてするのみに止まらず、耳をもつて聞き、舌をもつて味ひ、鼻をもつて嗅ぎ、手をもつて觸れ、動かし、切り、割き、併せ、つなぎ、組み立てる等のことをも爲さねばならぬ。こゝに至つては観ると云ふことは爲すと云ふことを意味せねばならぬ。爲さねば本當に外物を知ることには出來ない。観ることは在るまゝを觀るのみでなく、その内部をも觀、又更にその變化をも觀ねばならぬ。こゝに至つては積極的にこれを變化せしめて觀ねばならぬ。眞に觀ることは爲すことではなければならぬ。換言すれば觀ると云ふことの中には爲すと云ふことを當然に含んでゐるのである。試ると云ふことがこれである。試るが爲には爲さねばならぬのである。爲すことなくして試ることは出來るものではない。試験と云ふこともかくて觀察の一種である。しかし試験と云ふことは觀る爲に爲すと云ふことであるが、この故意に觀んが爲に爲すと云ふことから進んで、屢々これを繰りかへ

して爲す、即觀る爲でなくして、爲す爲に爲すと云ふことになつたものが經驗である。しかしながら事物はいつも同様の變化を爲すものではない。その事情に應じて變化の状態も常に異なるものである。それは同じ事或は類似せることを繰りかへし繰りかへし爲すことによりてこれを知ることが出来る。つまり經驗がこれを教へて呉れるのである。されば眞に事物を知る爲には、たゞ一二回これを試ると云ふのでは、極めて不十分である。度々これをくりかへして遣つて見なければならぬ。そこに一層深い、一層確實な、一層精密な知識が得られる。これが更に進んで來れば所謂體得の位置に達し、口言ふべからず、筆記すべからざる微妙な妙境をも、我が身體上にこれを識得して、何日にも實現し得ることが出来ることゝなるのである。

されどこゝでは既に單純な身體的活動に止まらないで、思考の範圍に侵入してゐる。如何に單純な身體的活動と雖も、その一面には、精神的活動を含んでゐないものはないけれども、試験に至つては頗る高尚な思考を含んで居る。試ると云ふことは、むしろ思考の結果であると言ひ得るのである。これに比すれば經驗と云ふことは、單純な作爲と異なる所はないが、それでもこれを總合して考へる場合には、深い思考の對象となるのである。かくて諸覺官から進んで記憶、想像、推理、概活斷定等の諸勢力が發動し、練磨せられ、これと共に多くの思想がその心裡の庫内に蓄積せられる。

第三節 間接方法

かくの如くにして、我々は覺官を通じて外界を知り、更に我々の全身體を通じてその秘奥を識得するに至る。こゝに我々の精神界は確實で精細な知識を以て充さるゝに至り、我が環境を形する世界を知り得るに至り、これに對して自己を如何に處すべきかの知識と技術とを獲得して、所謂生活上の知識技能を獲得するのである。されどかくて得たる知識技能なるものは遙かに狹隘なるを免れない。宇宙は時間的にも空間的にも無限に廣く、且永い。自己の一生の如きは蜉蝣の一生の如きものである。その短い狭い經驗と活動とを以てこの無限の外界を知らんとするのはあまりに無謀と言はなければならぬ。これ古人が書籍の必要を感じ、講義を聽くことの趣味を覺ゆるに至つたものである。これは人間自然の要求であつて、我々の生活に少しの餘暇を有するに至れば、かのギリシャの市民と同じく、讀書講義に便なる場所を求め、こゝに集まつて來るのは當然であり、又卓越した知能を有する人々が、その經驗を記載し、若くはその體驗を語り、青年等に對して親切な指導を與へんと志すに至ることも、亦實に自然のことである。

言語が人間に發生したことは、勿論人間の優秀なることを示すものであり、又益々發達すべき武器を與へられたものであることは言ふまでもないことである。彼等はこの優秀な武器を以て自己の思想感情を語りて、互に相益し、相喜び、相同情するのであるが、權力者はこの武器を使用して命令を傳へ、その部下をして自己の意の如く活動せしむる爲の要具となし、又長老は幼者青年に對して、その行動の方向を示し、その業務の方法を指導し、その處世の心得を訓諭する等、教育上あらゆる要具としてこれを利用するに至ることは當然である。

されど言語は一時的にして消え去るものである。人間の記憶は誠に微力なもので、見聞した所のものを何日までも精密にこれを記憶し得るものではない。これを再現する場合にも時間の経過と共に、その細目を次第に忘却し去り、遂には事件そのものまでも全然これを忘失するに至るのが普通である。この缺陷を補はんが爲に、人間が自然に案出したものが文字である。この文字は初めは象形的のもので、支那では蝌蚪の文字と稱せられ、埃及では楔形をなしたものであつた。それが次第に簡單化せられて、これを書するにも容易となり、以前は單に備忘録様のものゝみに使用せられた文字が、遂には進んでその思想なり感情なりを記録し置くまでに發達し、しかもある人々はその趣味によりて、氣長くこれを記録し、ある場合には特に後代に遺さんが爲に、これを記録するに至り、遂にこゝに書籍なるものが生出するに至つたものである。何れにしても、この書籍なるものが生出するに至つて、廣く他人の經驗を知り、その思想を知り、こゝに大に自己の見聞を擴大せしむることが出来るに至る。かくの如き記録を書することも、ある人々の趣味であ

り得ると同時に、これを読むことも、人々の好奇心を満足せしめて、これを書ると同じく、大きな趣味となり得るのである。今日の青年は動もすれば書籍を読むことを嫌忌するものが多いが、これはむしろこれを強いる所から來るのである。勿論これを嫌忌するものゝあることは當然であるが、これを読んで大に趣味を感じるものゝ多いのも亦當然のことである。

かくて言語文字は、談話となり、講義となり、書籍となりて教育上に利用せられ、それが活動の指導となり、生活の訓戒となり、思想の延長擴大となりて、大に我々を發達せしめ、助長せしむるに役立つものである。しかしながら之が我々に役立つ爲には、我々にこれを役立たしむる所のものがないてはならぬ。書籍講義は我々に對して非常に有益なものであるには相違ないが、これを有益ならしむる爲には、我々にその素養がなくてはならぬ。それは我々の實際的經驗から得た眞實の知識であり、自ら得た思想であり、更に我々の旺盛な求知心であり、發展せんとする活動欲である。書籍講義は一種の附牒の羅列に過ぎないので、そのまゝのものでは無意味なものである。これをして意義あらしめる爲には、その附牒に内容を與へることが必要である。その内容を與へると云ふことは自己の經驗、自己の思想を以てこれを翻譯することである。これがこの符牒に意味を與へることゝなるのである。されば書籍を読み、講義を聽いて眞に役立つ爲には、自己にそれだけの經驗的知識と思想とを有して居なければならぬ。若しそこに燃ゆるが如き求知心と、熾烈な活動欲と

があれば、それは更にその光輝と價值とを増して一層多く利用せられるものである。されば書籍講義は相當な素養あり、經驗ある大人に取りては測り知られざる利益あるものなれども、幼者青年に取りてはさほどに有効ではない。特に幼者に取りては高尚な書籍、例へば論語の如き、キリスト教の聖書の如きは、所謂猫に小判の如きものである。彼等には彼等の經驗、彼等の想像の範圍内にあるお伽話の類こそ、彼等の興味を喚起するに足りるものである。されば今日の幼者青年の如きものを教育せんが爲には、主としてその手段を實際的活動に求め、これを基礎とした思想、即反省や簡単な思索を要求するが如き心的活動を練磨せしむる機會を與ふることが最も重要である。書籍講義の如き方法は青年以上のものに始めて有効である。

今日の青年教育に於ては彼等に對してあまりに多くを求むるが爲に、あまりに困難な思考上の問題を課して居る。そして實際社會に處しては殆ど用ひる所のない種類も頗る多い。これらの知識を青年に授けて彼等を苦むるよりも、むしろ實際的活動に従事せしむることが、彼等に取りてどれほど利益であるか分らない。

第二章 性格と活動

第一節 性格とは何か

人の世に處するや、知能の優秀が重大な關係を有することは言ふまでも無いが、その性格の優劣がこれに勝るとも決して劣らないだけの關係を有するものである。知能の點に於ては多少劣つて居ても、その性格が優つて居れば、知能優秀なものよりも、その社會適應上遙かに優秀な成績を收むることが出来る。例を擧げて言へば、前に述べた日本兒童と支那兒童との比較について、知能の點から言へば、強ち日本兒童が勝れて居るとは言へない。ボルチウスの如きは、學習能力に於てはむしろ支那兒童の方が勝れて居るとさへ言つて居るのに、その社會的成功については、到底同日の談ではないのである。政治上に於ても、軍事上に於ても、産業上に於ても、學術上に於ても、教育上に於ても、財政上に於ても、この半世紀間の進歩の相違は實に著しいものである。これはこの兩民族に於ける性格の相違に基くものである。學校に於ても、同一學級に於いて、學科成績として上位にあるものが、卒業後社會に立つに當りては、その成功の上に、却つて劣つて來ることがあるのは、一般に認められて居る事實である。學校に於て優良な學科成績を示したものが卒業後却つて停頓する

ものがあるかと思へば、在學中には人目に付かなかつたものが、卒業後相當の位置に進むものがあることは、我々教育に従事するものゝ常に見る所である。然るに世人は唯學校に於ては専ら知能の獲得にのみ焦慮して、其他を顧る邊がない有様であるのは、入學試験の弊に源因するとは言へ、あまりに知能の收得に急にして、更に重要な性格の教養に無頓着なるに驚かざるを得ないのである。教育上に於ては宜しくこの性格の方面に多大の努力を拂ふことが、今後最も注意すべき事柄である。性格とは如何なるものなりやと云ふことについては、古來より種々の意見があつて一定した説は無いようであるが、私はこれを定義して、その人の活動を導く傾向と力とであると言ひたい。人間の活動を導くものには、その自然の性質によるものと、これと最も親密な關係はあるが、しかしその人の見識とでも言ふべき意識的に、自分がかくの如き方向に進みたいと欲すると云ふ考を、最も明確に描いて、これによりてその活動を導かんとする故意のものとを含んで居るので、私は特にこれを傾向なる語を以て表現して居るのである。この自然の性質と識見による計劃とは相結合して、各人の行動を指導するものであるが、有意的な計劃が表面上には頗る有力な、所謂指導精神となるものであることは、何人もよくこれを認めて居る所であるにも拘らず、自然の性質、即各人の本然の稟性は、冥々の間に、我々の活動を支配する力も存外有力なものであることを忘れてはならない。我々は常に斯く爲さん斯くありたいと思ひながら、何時の間にかその反對の方向に進んで居るこ

とは、何人にもよく有り勝ちのことである。かゝる際には我々は常に反省して勇氣を鼓して當然の道に引き戻して進まなくてはならない。特にこれは青壯年の間にはよく有り勝ちのことである。この指導的傾向と共に、これを實現するに要する力か、又實にその人の性格を形づくる要素として必要なものである。この力には體力も加はり精神力も無論加はつて居る。かの自信力と云ひ、不動心と云ひ、克己力と云ひ、忍耐力と云ひ、或は勇氣と云ひ、闘争力と云ひ、或は又包容力と云ひ、協調性と名づくるもの等は皆この性格の有する力である。さればこの性格なるものは知能の要素を多分に包含するけれども、これを組成して居る成分は主として意志と感情とである。その結果として現はれて来る性格として、古くから行はれて居る四氣質、即神經質、粘液質、膽汁質、多血質とがあり、近來では又種々の區別をなすものが無いでは無いが、今の所この性格を完全に現はすものとして、十分に首肯せらるべき意見は無いようである。しかし我々は今この性格そのものに對する研究に深入りすることが目的ではない。この場合、教育上、この性格の教養が非常に重要であり、そしてそれは知能の教養よりもむしろ重要であると云ふことゝ、如何にしてこれを教育すべきかと云ふことを述べるのが最も重要である。

第二節 性格の修養

性格の修養は無論言説によりて出来るものではない。世人はよくその缺點を指摘してこれを教訓すれば、善良な性格を養ふことが出来るように考へて居るけれども、それは非常な誤りである。性格はかくの如き手軽なことで修養せらるべきものではない。身心の上に本然の稟性として賦與せられたものを、唯言説の末でこれを改めることが出来れば、洵に有り難いことであるが、それは實際殆ど何等の効果なきものと言つてよいのである。本當に性格を修めんとするならば、體質の上にも、又精神上にも影響を及ぼさねばならぬことであるから、唯訓諭、教訓等、口舌の上のみで出来るものではない。それは先づ自らかゝる性格を教養せんとする考を起して、これに適當なる活動を反復練習する以外に方法は無い。即實行によりて修養するより外に道は無いのである。されど幼者少年の如く、自らかくかくの性格を養成せんとする考を起すことの出来ない年頃では、父母教師が留意して、かくの如き活動を誘致し、日々これを反復して遂に習慣を形成せしむるのである。習慣は第二の天性である。或は氏より育ちと云ふ言葉のあるのはこれを言ふたのである。されば若教育を以て言語文字による仕事であるとしたならば、更に極言すれば、教育は文字文章を記憶せしむるにあるとしたならば、それはよほど成長して後に、始めらるべきであるが、性格の修養と共に知能の本質を教養する爲の實行的活動を旨とするならば、それは實に生後直に始めらるべきものである。かのナーゼリ、スクールや幼稚園の教育の如き實にその根本思想をこゝに置いて考

へなければならぬ。それは恰も植物の幼芽はこれを自由に曲げ得ると同様に、幼児にありても、習慣をつけ易いのであるから、なるべく幼少の時からこの性格の教養を始めねばならない。この點から考へるならば、ナーサリー・スクールや幼稚園の教育が如何に重要な任務を有するか、知られるのである。性格の良否は後日の成功に重大な關係を有して居る。そしてそれは言語や文字の末によりて教養せらるべきものでなく、日々の行動の反復によりてのみ遂行せらるべきことを考へるならば、その任務の重要さは直に知得せらるべきである。従來の教育はこの點が殆ど考へられて居なかつた。たゞ成るが儘に任かせられたものである。我々は自然に従はなければならぬことは言ふまでもないが、たゞ成るが儘に打ち任せて構はないと云ふのでは、そこには何等の教育はないのである。そしてそれは却つて人生の自然に戻るものである。我々人間の自然は理性を用ひて、この自然を正しい道に進ませることが即自然の要求である。人間を中心としての自然の道を歩ませなくてはならぬ。こゝに幼児教育の極意が存するのである。その任務の重要さが存するのである。そしてそれは行動によりて實際的に教育すべきである。少しく成長すれば、これを自覺的に自己の力によりて爲さしむることが最も有効である。外からこれを強いてやらせてもその効果はない。訓戒や誨告が存外効果を持たぬのはこれが爲である。自らその必要を感じて自ら實行する所にこそ、實に教育の至大な効果があるのである。換言すれば興味を感じ

て活動する所にこそ大きな効果がある。これをまとめて言へば、兒童青年の教育にありては、自ら爲さんと欲して爲す行動が最も有効な教育的活動である。たゞ此の際注意すべきは心身の發達に有害な活動は、嚴に之を抑制すべきことは勿論のことである。なかんづく性格の教育には實際活動こそ最も有効なものであることを忘れてはならない。

第三章 技能に關する教育

第一節 藝術と工藝

人間の世に處するや知能性格と共に必要なものは技能である。何れの業務に従事するに拘らず多少の技能を必要とするものであるが、就中最も技能を要するものは、藝術と工藝とである。藝術と稱するのは繪畫、彫刻、音樂、演劇、建築、文藝、書道等を總稱するもので、工藝と云ふのは、これら純藝術とは離れて各種の工作を總稱するものである。が、その中には殆ど純藝術に近い所謂美術工藝なるものもあり、又一見、殆ど藝術とは關係しない大工、左官、石工、家具工等各種の機械工作に屬するものもある。しかしこれら工作に屬するものと雖も、幾分藝術と共通性を有するものである。た

實用性が主要成分をなして居ることには言ふまでもない。けれども、又形状美・色彩美・鈞合美等がこれと共に多分に包含せられて居る。そしてこれらの技能は一面に於ては精神的要素が卓越して居ると同時に、他面に於ては手技が頗る重要な位置を占むることも勿論である。純藝術に至るに従つて技巧よりも精神的要素が益々重きをなして居る。即精神的美から形状・色彩・調和等の諸美點を認識する力と共に、これらの美性を製出する手指身體の力を要するのである。

第二節 技能の養成

さてこれらの力は如何にして人間に生れて来るか。勿論その種子は天稟として賦與せられるであらうが、しかしその生長・發達は生後の事情によるものである。即生後美の環境中に置かれて、日夜これに接觸するのみでなく、自ら進んでこれを製出する所に、技巧も上達し、眼識も次第に高くなつて来る。即技能的な活動によりて始めてその力が發達して来るものである。

技能の發達はかくの如く全然活動によりてのみ發達するもので、到底口舌や文字の力によるものでないことは一層明かなことである。知能はある程度まで書籍講義の力によりて發達せしむることが出来るが、技能の發達に至つてはこれらの力は殆ど無力と言はなければならぬ。

技能の發達は感情と意志とに關すること、猶性格の修養と同じであるが、亦知能の發達による所

も決して少々ではない。然るに今日の學校教育にありては、すべてを知能の發達にのみ捧げ、しかもその知能たるや僅かに一部分の發展のみにつとめ、人間にとりて最も必要な感情の陶冶と意志の鍛錬には殆ど關係しない様に思はれる。これ今日の教育の最も著しい缺點である。教育は人間全體として發達せしめねばならぬ。勿論各個人各々その長所を有してそれに主力を注ぐべきは、むしろ有利なことであるが、始めからすべてこれら技能の教育を棄て、顧みないのは、非常に誤つた教育の方針である。眞の教育は宜しくこの誤つた傾向を是正して進まなければならぬ。それが爲にはこの技能の教育が教育の上にて相當の地位を占むることは大に必要なことである。これ我が教育界に於て全人教育が強く主張せられる所以である。全人教育と云ふのは、今日の教育が僅か一部分の知能に偏重せられて居るのに反抗して、感情や意志の教養にも大に力を用ひねばならぬ。従つて技能の教養にも、性格の修養にも盡すべきことを主張するもので、我が新教育に於ける有力なる一主張である。

第三節 大藝術家

技能の教育に於て誤つた意見と實行とがあつて、この方面の教養を害ふて居る。それはこの方面は感情によるものであると云ふ所から何等の規律も節制も無視し、唯情に任かせて行動するを

以て藝術家當然の行爲と信ずるものが多い。されどそれは決して許すべからざる事である。如何なる大藝術家と雖も、無節制、無規律に自駄落な生活によりて、かゝる大藝術家の位置に到達したものは無い。否却つて優秀な素質の上に、修養に修養を積み、いやが上にも活動に活動を重ねて後、始めて大藝術家の域に到達したものである。決して無爲徒然にしてこの位置に達したものでなく、苦心慘憺の結果としてこの位置に到達したものであることは、大藝術家の傳記を見ても明瞭なことである。彼等はその修養の爲に大意力を發揮したものである。又感情そのもの、陶冶に於ても、激情の動く儘に生活するのでは、高尚な感情生活と云ふことは出来ない。高尚な感情生活は宇宙の真相を識得して、そこに偉大な感情を味得し、更に各個物の中にこの感情を見、この大感情の下にこれを調和せしめる所に、すべての藝術を表現するにあるのである。かくて始めてすべての藝術が高尚偉大な藝術として鑑賞せられるのである。即本當に高尚偉大な感情の陶冶が出来、その人の表現した技能が、これを観る人に、この高尚偉大な感情の琴線に觸れしむる所に、大藝術家の大藝術たる所を發揮するものである。されば大藝術品を製作せんが爲には、その藝術家自身が先づ高尚偉大な感情を修得せねばならぬ。高尚偉大な感情は、勝手氣儘な無規律無節制な感情ではない。大宇宙の活動の如く、靜なること山の如く、動くことは風の如く、波の如く、しかもその間に一定の規律秩序があり、點々たる春光の如く、烈々たる秋霜の如きものでなくてはならない。此處には

藝術家自身が天稟の資質に加ふるに、精進修養を積んで始めて到達せらるべき境地である。されば技能の修養に向つても、その他の方面と同様に努力研鑽を必要とすること勿論のことである。體育上の運動も亦藝術の一種と見ることが出来る。舞踊の如きは純藝術である。その他の運動の技術の如き、微妙な所に達すれば、純藝術と殆ど異なる所が無いのである。例へばテニス・ベースボール・柔道・剣道の如き皆同様である。従つてその修養についても、かの繪畫・彫刻等の技能の修養と多く異なる所は無い。たゞ特に全身體上の活動が著しいのである。その結果として身體の健康を維持し増進せられる所以であるので、特にこれを體育として指稱せられ、かの藝術と區別せられる所以である。しかし少しくその内容について考へて見れば、藝術的技能と全然同一であると言つてよいのである。換言すれば體育上の技能の修養も、亦心身の兩方面の活動を基礎とするものである。しかも體育上の技能の修養は身體の活動が特に目立つて來る所に、體育の意味が十分に現はれて來る。

第四節 發達の原則

以上人間の成長發達とその社會に處する上に於て十分な適應力を獲得する爲には、何れも皆心身の活動をその根柢とすることを知るべきである。つまり生物全體の一大鐵則に支配せられる

のである。換言すれば活動は發達の根柢であると云ふことに外ならない。活動はその部分の強健を増進し、その器官の分化をも來たすのみでなく、全體の發達をも齎らたすものである。活動なき部分は次第に消滅することは人の知る所である。全體としても遂に死滅を免れない。これは心身何れにも適する法則であるが、たゞこの活動はその個人に取りても、社會に取りても、有益なものたるべきは勿論のことである。そして全體に對してある部分のみがあまりに活動する場合に、遂に不均衡を來たし、全體としても不利を招くものである。つまり教育と云ふのは、幼者青年達はこの活動を適當に指導して行くことに外ならない。そして彼等の心身は自然に發達するのである。されば教育は授くべきものでなく導くべきものである。そしてその發達は活動の結果として自然に行はるべきものである。

活動の種類は非常に多く、又年齢に應じて器能の發達を異にすると共に、その活動の種類を異にし、その方式を異にすることは當然のことである。教育者はこの自然の發達を本としてその活動の種類方式を考へ、その材料を供給すべきを以つてその任務とする。舊來の教育はそのあらゆる種類の人間活動の中の知能の收得を以て能事終れりとし、しかもその知能は既知のものゝみを、文字言語によつてこれを授與するものと考へ、これを以つて教育全體であると考へて居た所に、非常な過誤を含んでゐる。今日我々の主張する教育は幼者青年の實際活動によつてその知識を收得

せしめ、その器能の發達を來たさしめ、以つて後來社會に立つて適當な活動をなし得る素地を與へんとするものであり、その關する範圍は非常に廣く、しかも常に動いて息まない生々發展的なものである。それは實にわが民族の性格とよく相一致して居る。我が民族性の主要な一つは活動であり、生々發展であつた。そして眞の教育も亦實に各種の活動であり、生々發展的なものである。徒らに固定的回顧的なものであつてはならない。そしてモット自由であり、しかも自然であり、又調和的なものでなければならぬ。我々は進んでこれらの諸方面を吟味しなければならぬ。

第四章 個性尊重

第一節 世は様々

從來述べ來つた所の教育上の原則は、人間の發達に關して極めて大局的に概説したものであるが、しかし各個人の發達は皆決して一様ではない。各々それぞれ相違して居ることは、その面の異なることによつて察知せられるのである。この各個の相違を觀ずして、全體を一様な方法によつて律せんとするは無理なことであるのみでなく、又極めて不利益なことである。萬物は各々相異

ることによつて各種各様の用途に供せられる。若しすべてのものが一樣であつたならば、世界は無味乾燥なもので、我々は一日と雖もこれに堪え切れぬであらう。然るに世界の事物は大小形状・色彩・寒暖・粗滑・輕重・賢愚・強弱・美醜等實に千差萬別なる所に無数の變化が起り、變化は惰氣を消散し、活氣を喚び、そこに大調和・大活動の世界を現出する。人間に於ても亦然り、賢愚・肯不肯・強弱等があつて、そこに努力が生れ、奮勵が現はれて、人生に無限の活氣が横溢することとなる。されば世界を大きく見れば、賢も世を益し、不賢も亦世を益して居る。強もよく、弱もよく、徳人勿論貴むべく、不徳人亦強ちに惡むべからざる所がある。詐偽・泥棒も亦世の一役を買つたものである。そして人は皆賢ならんと欲し、強からんと志し、富まんと欲し、貴まれんと欲する所に、努力・奮勵が生まれて来る。

第二節 適者即優者

我々が奮勵努力するは、自己を高め、自己を大にせんと欲する所から来るものであることは言ふ迄もない所であるが、それが場合によつては、全く無効に終り、或は却つて自己を破滅に導くこともある。あまりに非望を起して、牝牛の大と拮頰しようとした蛙の腹は破裂する。鐵や鉛は徒らに金にならうとして、鍍金せられるよりも、むしろ鐵鉛の本質をその儘に磨いて行く所に、その貴重さが

ある。瓦礫はどんなにあせつて見ても苦勞して見ても珠玉となることは出来ない。むしろ瓦礫は瓦礫としてその本分を盡す所にその價打が現はれて来る。人は各々その所を得さへすれば皆満足すべきである。そして各人をして各々その所を得させるのは教育者である。教育者は人世の建築家である。人をして各々その所を得させる人である。大小の器材は各々その用所がある。大なるものは棟梁の材となし、小なるものは楔や栓に遣はれる。楔や栓も亦必要である。そこに楔や栓としてよくその任務を盡す様に導くのが教育者の任務である。瓦礫を黄金たらしむることとは出来得べき事でもなく、また望むべき事でもない。鐵は鐵としてなくてはならぬ金屬であり、鉛は鉛として非常に貴いものである。新教育聯盟の選任した試験問題に關する研究委員會の報告書中にル・レイ氏の「我々は何れの所にも優者を要する。そして如何なる社會的事業に於てもこの優者を有せねばならぬし、又これを有することが出来る」と言ふ語を引用し、又英國の心理學者スピーマン教授の「我々が若し何物かを發見するならば、何人もある事に於ては優者たることが出来る」と云ふ言葉と共に、これを解説せんが爲に、ジャッド教授の語つた小話を引證して居る。大戰中ある人事關係の士官が、騎兵隊の一司令官によつて、若干人の厩卒を要求せられた。が、通常の徵募兵ではこれに適するものが無いことを附言せられた。そこでこの人事關係の士官は、一夜寝ないで考へた末、知力の低劣なものが動物に對して大なる趣味を有するものであると云ふこ

とを考へついたので、彼は知能検査に於て最も低劣な五人の若者を送つてやつた。數日を経て後、この人事係の士官は、更に五十人を送るべしと云ふ熱心な注文を受取つたと云ふことである。ジャッド教授は、彼は實にある社會的業務についての優者を發見したのであると附言してゐる。實に人は用ひ所に於て優者たり得るのである。要はたゞその最も適した所を發見するにあるのである。教育者は各個人はこの特徴を發見して、それを益々練磨して遣らねばならぬ。各個人は必その特徴を有して居て、これを發揮すればその事については優者たり得るのである。特に今日の如く社會的業務が非常に増加して、苟も一藝一能あるものは、何等かその社會に一役を果すことが出来る社會に於ては、特に然りである。されば教育上に於いても各個人の個性を尊重し、これを善導することが非常に重要である。

第三節 平を得ざれば鳴る

個性を無視した社會は、如何なる方面に於ても、すべてが凝滞して、憂鬱な社會とならざるを得ない。その極途にその社會の紛擾を來たすが如きことが生出するに至る。勿論社會の發展に害あるが如き個性はこれを抑壓しなければならぬが、しかし單にこれを壓伏して伸ぶる機會を得せしめないのは決して得策ではない。これを善導することによりて、その個性をして却つて社會の

發達に貢獻せしむるに至るものである。かの明治天皇の「人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス」と五條の御誓文中に詔らせ給へるのは實にこの精神に外ならないのである。それは各人各々その欲する所を論じて、遂に衆議に一決してこれらを遵奉するに至る。これ即萬機公論に決して、人心が倦んで來ない秘訣である。人心が倦んで來なければ、皆それぞれ自己の得意とする所、即自己の個性を發揮して、その國家社會に貢獻するに至るべきは當然のことに屬する。明治天皇の御英明に涉らせ給ふたのは、あの維新時代の英雄を自由に驅使して、各々その長所を發揮させ給ふた所にある。そして遂に全國民をして、皆それぞれその所思を發表せしむる所に、人心をして萎縮せしめず、何所までもその長所を伸展せしめんとし給ふたのである。つまり各個人をしてその個性を發揮せしむる機會を與へ給ふたのである。これは實に社會の生々發展の基礎である。すべて物はその所を得なければ納まらない。これを小にしては不幸不満をならべ、大にしては社會の反亂を來たす。各人をしてその個性を伸ばすことを得しむれば、この不平も紛擾も來さず、社會は次第に發達するに極まつて居る。されば教育上に於ても、この個性を尊重してこれを伸展善導することは、その人をして全體的に發達せしめる。つまり人は自己の特徴を發見すれば、そこに満足を感じて全體の意氣を發揚することが出来るからである。

第四節 個性の發見

各個人の個性は如何にして發見せられるか、又重要な問題となつて来る。それにはなるべく各個人の性行について深く觀察することを怠つてはならないが、又その境遇をして個性を發揮するの自由を得しむることが大切である。この個性發揮の自由が與へられなければ、苟かに他の所に於てこれを發揮せんとするので教師の眼に觸れることが出来ない。されば學校に於ても家庭に於ても、兒童青年の教育場たる所には出来るだけ各種の施設をなし置くことを要する。學校に於て單に上級學校入學の試験の準備のみを行ふことを主とする時は、その目的の爲には最も適當して居るけれども、廣く教育的の見地からすれば極めて不適當なるを免れない。そしてあまりに強くこれを強行すれば所謂不良生を生出することゝなる。されば學校にありては唯單に國語・漢文・數學・英語以外、各種の教科を課するのみでなく、博物・理科・地理・歴史は勿論のこと、手工・音樂・圖畫・體操等の諸學科を課し、且それらの教科を一様に尊重し、その長所を有するものをも十分にこれを認めてやらなくてはならぬ。加之學科以外の仕事をも、つとめてこれを彼等の實行に委ね、彼等の手腕を練磨するの具に供せねばならぬ。例へば運動部・音樂部・演劇部から購買部の經營、學校内外に於ける風紀の取締等の事業に至る各種の仕事をなさしめ、その趣味の傾く所に従つて、これを教養

すべきである。そしてその成績は皆これら各方面の成績を參案して決定すべきである。今日の學校に於ては、學科の成績のみで、その及落を決し、就中國・漢語・數學を以て主要科目と稱し、これによりてその成績を決定せんとして居るので、兒童青年等は専らその勢力をこゝに集中し、これらの學科に不得意なものは、自ら卑下すると云ふ風であるのは、教育上から見ても極めて不適當なことゝ言はなければならぬ。教育に於ては提供し得べきあらゆる作業を提供してこれを練磨せしめ、又その成績は等しくこれを認めてやらなくてはならない。この點からも今日の學校組織は徹底的に改善しなくてはならぬことゝ思ふ。

第五章 自由と統制

第一節 社會の發達と自由

人間に絶対の自由が無いことは當然である。自由はつまり力の問題である。無限の力があれば絶対の自由もあり得る。しかし人間の力と云ふものは極めて微弱なものである。この微弱な力は宇宙の絶対な力に比すれば無力と云つても宜しい。そこに絶対他力の宗教が成立する。し

かしこれを相対的に見れば人間にも多少の力はある。この僅少の力を以つて生存を續けて行くのである。さればその自由は極めて制限せられた自由であるべきは當然のことである。無理な自由を求めようとすれば必死滅するより外はない。空氣食物衣服等は人間の必然の需要物である。これを度外視して生存することは出来ない。その他自然の制限を受けて居ることは非常に多い。意志の自由と云ふけれども、子細にその自由なるものを検討して見れば、これさへも眞の自由なるものはあり得ない。すべては因果の法則に拘束せられて居るのである。たゞ相対的に見て、こゝに意志の自由なるものを假定するに過ぎない。所謂論理的自由なるものもこれと同様である。されば人間の自由なるものは、相対的な見地から觀た、極めて狹隘な意味の自由に過ぎないものである。これさへもこれを大觀する時は自然の制約の中に拘束せられたものである。

かくの如く人間の自由なるものは相対的に觀た極めて狹隘な自由であるが、この自由が社會の發達と個人の發達とによつて次第に廣くなる傾がある。往昔人智未だ開けず、人力の極めて些少なりし時代には、自然を開拓することが出来ず、山河森林猛獸惡蛇氣候等を征服するの力が無かつた。こんな時代には一族相集つて生活しなければならぬ。そして族長の支配の下にあつて、その統制の下に生存するの外はなかつた。族制々度の創設は自然のことである。この場合の族民は殆ど移轉の自由もなく、財産の自由もなく、恐らく奴隸の生活を去ること遠からぬものであつた

ので無いかと思はれる。然るに社會の發達に連れて、山川も開拓せられ、道路も出来上つて耕作も容易になり、各種の手工業も容易く出来るようになり、交易も出来、治安もよく維持せられる様になつて、一族の中からそれぞれの家を立てるものが出て、こゝに家族制度の發生を見たのである。家制時代には氏長が多く、族民を率ひて生活を營んで居たが、今は族民の中からある人々が分離して、一家を建てる。そしてそれが繁殖してあまりに多人數となつて來ればその中のあるものが別れて、別に一家を立てることになつた。こゝに至つて家人の自由なるものはよほどまで得られることになつた。が、しかしまだ多くの家族が集團的に家長の統制を受けなければ生存を全くすることが出来ないのである。然るに社會の進歩は刻々息まず、生活は一層容易となり、交通は次第に便利となるのみでなく、教育の普及は各個人の自覺を促がして來たので、こゝに所謂個人制度なるものが發現するに至り、各個人皆生長して自活することが出来るやうになれば、父母の家から分離して、自ら配偶者を求めて一家を構成するに至るのである。しかも社會には各種の業務が現れて來て、各々の長所を發揮し、その力によつて、生活を營むことが容易くなつて來て、益々この傾向を助長することになつたのである。かくの如く個人制度に至つて、各個人は皆その職業を自由に選擇し、その財産を自由に處分し使用して、その欲する所のものを購ひ、又は爲すことが出来るやうになつた。即その自由が大に増して來たのである。但我が國にては家族制度が多少異つて發達し、家